
起きたら異世界でした。

一ノ瀬 崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起きたら異世界でした。

【Nコード】

N5486X

【作者名】

一ノ瀬 崇

【あらすじ】

特技は現実逃避、趣味は日向ぼっこ、好きなタイプは小さな女の子。そんな僕、片桐悠里が異世界で繰り広げる剣と魔法と幼女のファンタジー。や、知らない内にトリップしてたけどね。

知らない間に異世界トリップ。

まず感じたのは、全身の気だるさ。続いて何かが僕へと向けている視線に気付く。

微睡む意識を強引に浮上させ、薄く開いた僕の目に飛び込んできたのは――

「……………あ、やっと起きた」

見知らぬ、幼女だった。

肩口まで伸びた紫銀の髪と、青紫の瞳が印象的な幼女。

顔立ちも整っていて、数年も経てば誰もが振り返る美少女になるだろう。

麻布で編まれたゆったりとしたチュニツクとやや煤けた茶色のズボンを着ていて、何処となく漂う異国情緒が幼女のかawaiiさを引き立てている。

そんな美幼女が、僕の顔を覗き込んでいた。この娘は誰だろう？というか僕の部屋にどうやって入ったんだ？

そんな疑念が頭の中を駆け回り、質問として外へ出ようとするが、

「……………！」

声が、出ない。

今気付いたが口も喉もカラカラだった。

ぱくぱくと口を動かす僕を見て、幼女は首を傾げる。

――かわいい。じゃなくて、水、水をください。

僕の思いが伝わったのか、幼女はにこりと微笑む。

幼女は僕の寝ているベッドから離れて、部屋の左の方へ歩いていく。自然とその姿を目で追っていたが、上体を起こそうとした所で、

「……っ、あっ！」

背中が焼けるように痛み、ぐもった声を上げてしまう。

僕の声に驚いたのか、幼女が振り向く気配がする。

「あっ、まだ動いちゃダメだよ！」

幼子特有の甘く高い声に押し留められる。

僕は体を起こすのを諦め、ベッドに深く沈み込むように力を抜く。

右の肩甲骨から腰にかけてじくじくとした痛みが広がっている。

幼女は僕が無理に起き上がろうとしない事を確認すると、ドアを開け部屋を出て行った。

幸い首は動かせるようなので、目で幼女を見送る。

徐々に遠ざかる足音をBGMに、僕は深く息を吐き出した。

——何だろう、この背中の痛みは。怪我をした覚えは無いんだけど

……。それよりあの娘は一体？

そこまで考えた所で、僕は気付いた。

——って、この部屋、僕の部屋じゃない？

混乱する僕の元へ、足音が近付いてくる。

行きと違い、足音は2つ。ドアがゆっくりと開かれ、先程の少女が水差しとコップを抱えてやってきた。

その後ろから、もう1人が姿を見せる。

少女と同じ紫銀の髪と青紫の瞳。恐らくは少女の姉だろう。少女よりもやや長い髪を頭の左で結んでいる。

——ああ、何て言うんだっけか。サイドポニー？

整った顔立ちは正しく美少女と言って差し支えない。

薄い青のローブに身を包んでおり、ゲームに出てくる修道女みたいな格好をしている。

何より目を引くのは彼女が手にした古びた杖。

一体何に使うんだろうか？

と、少女がコップを差し出していたのに気付く。

ありがとう、と心の中で感謝しつつ受け取ろうと手を伸ばそうとして、

——あ、あれ？

幾ら力を入れても腕が持ち上がらない。と、僕の体が動かない事を察したのか、少女はコップを引っ込める。

そして少女は水を自分の口に含むと、

「んう」

「んむっ！？むっ、んくっ、んくっ」

口移しで飲まされた。部屋の入り口の方で少女が何やら衝撃を受けているみたいだが、僕はそれどころじゃない。

口や喉を潤していく水に混じって、甘い香りが鼻へ抜ける。

反射的に舌を伸ばし更に水分を求めると、舌先に温かく柔らかな感触が生まれる。

舌で押せば絡まるようにうねり、逆に引けばおずおずと求めてくる。夢中でそれを吸っていると、幼女がゆっくりと唇を離す。

互いの舌を繋ぐ銀色の糸を見て、自分が今何をしていたのか気付いた。

——ちよ、ちよっ!？僕今この娘とデープなチツスを……!？

顔を真っ赤にする僕を、頬をほんのり桜色に染めながら幼女が見つめ返す。

幼女は目を少し潤ませながら上目使いで、

「おかわり、いる……?」

「な……何してるのよミナあ!？」

思わず頷き掛けた瞬間、少女が叫ぶように声を上げた。

「だってお兄ちゃん、体動かないみたいだったから」

「それにしたって、く、口移しは無いですよ!？」

「でも喜んでたよ?」

待ちなさいお嬢さん。その発言はいろいろと危険です。

尚も口論を続ける2人を何とか宥めるべく、僕は口を開いた。

「えっと……取り敢えず2人共、落ち着いて」

「これが落ち着いていられますかっ!」

少女にあっさり一蹴された。
しかしここでめげる訳にはいかない。
心を強く持って再度声をかける。

「ほら、彼女も悪気が有った訳じゃないし、むしろ親切心というか献身的なアレで」

「だとしても方法に問題が有りすぎますっ！」

むう、なかなか手強い。

ここは幼女のした事を好意的に受け止めている、という所をアピールしてみよう。

「ぼ、僕はそんな、嫌じゃなかったから大丈夫」

「それはそれで問題です！」

ぐっ、確かにそうだ。言葉の選択を誤ったかな。

……な、なんだよう、ロリコンじゃないぞ！……多分。

その後も何とか説得を続け、漸く少女が落ち着いたのが10分後。
ベッドから起き上がれない僕の横で、丸椅子を持ってきて座り足をぶらぶらさせている幼女。その正面の椅子に少女が座る。

「……失礼しました。私はこの教会の修道女でシーナと申します」

そう言って少女――シーナは頭を下げる。

やっぱりシスターだったのか。というかこの建物は教会だったのか。シーナの落ち着いた声は何処か透き通っていて、賛美歌を歌ったらかきと天使の歌声なんて言われるくらいに聴いていて心地良い。

「私はミナだよ。修道女見習いなんだ」

幼女は僕の右手に指を絡めてにっこりと微笑む。

……ヤヴァイくらいにかわいい。というか、僕の人差し指を優しくきゅっと握るのは反則だと思います。

ちよっとドキッとした胸を落ち着かせつつ、僕は口を開いた。

「僕は悠里。片桐悠里。カタギリが姓で、ユーリが名前だよ」

僕の名前を聞いて、シーナが驚いた風に口元へ手をやる。

——何か変な事言ったかな？

2人の名前が外国人風だったから、一応姓と名を言ってみただけど。

もしかしたらシーナは椎奈でミナは美奈という日本人でした的なオチだったり？

うっわ、僕超赤っ恥じゃん。

みたいな事を考えていると、恐る恐るといった様子でシーナが切り出した。

「あの……カタギリ様は、貴族なのでしょうか？」

「へ？」

言われた意味は解っても、言われた経緯が解らない。
僕の何処を見て貴族だなんて思ったんだろう。

「僕は貴族じゃないよ、ただの平民。だから普通にユーリ、って呼んでくれればいいよ。……でも何で僕を貴族だと思ったの？」

貴族じゃない、という言葉を受けてシーナはほっと息を吐く。

「この国では、姓を持つ方は皆貴族ですので……。」
「そっかぁ。……ん、この国？」

あれ、何か今変な事を聴いた気がする。

この国、ってシーナ言ったよね。

何処かで、こんな感じの状況下で、こんな感じの台詞を聞いた事が有ったような……あ、ああ、思い出した。

確か異世界に召還された主人公が魔王を倒すRPGの出だしにこんなやり取りが有った筈だ。

はっはっは、成程なるほど。

つまりここは異世界で僕はトリップした訳か。

「うわぁ……マジかぁ……」

いきなりテンションがた落ちの僕を見て慌てるシーナ。

「あつ、あのっ、私何か失礼な事を!？」

「いや、うん、大丈夫。ちよつと現実逃避してるだけだから」

気に掛ける余裕も無いのでシーナを適当にあしらいつつ、深い溜息を吐く。

——状況を鑑みるに、80%の確率で僕は異世界トリップしたとみている。

まだ決定的な証拠を目にしていない事や、自分の感情を含めて20%くらいはまだここを地球——更に言えば日本だと考えている。

だって異世界トリップものの定めとして、元の世界に帰れないのは定石。運良く帰れる手段が有るとしても、どうせすぐには帰れない。そんなショッキングな出来事をすんなり受け入れるには、少々心のHPが足りない。

まだ救いが有るのは、そこまで元の世界——地球に未練が無い事、かな。

僕に家族が居ない。正確には、家族を失ったばかり。

今年の正月に両親と妹を事故で亡くし、祖父に引き取られて、やっとな両親と妹の死に自分の中で区切りを付けたのが2ヶ月前。

小さい頃から祖父とは付き合いが有ったけど、僕の方に照れや遠慮が有って今一つ打ち解けられていなかった。

だから祖父の事はそこまで心残りじゃない。

……いや、感謝はしてるよ?でも、ちよつと薄情かもしれないけれど、そんな簡単に割り切れるものでもないし。って僕は誰に言い訳してるんだ?

程良い感じにパニックっていると、ふわりと柔らかな感触が僕を包んだ。

視線を上げると、ミナが僕の頭を抱えるように抱き締めていた。

「……ミナ？」

「だいじょぶだいじょぶ。私がいるからさみしくないよ？」

ね？と笑い掛けるミナ。

小さな手で頭を撫でられる度、少しずつ自分が冷静になっていくのが解った。

「私が泣きそうな時はお姉ちゃんがこうしてくれるの。ユーリ、今悲しい顔してるから、私が撫でてあげるね」

ミナに言われて初めて気付いた。

——僕はミナが心配する程、悲しい顔してたのか。

いけないいけない、こんなに小さな娘に心配掛けてるような奴は男じゃない。

祖父に教わった教訓を思い出して、ネガティブな思考を追いつく。

頭が冷えると、幼女特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。そして僕の顔に当たるこのふにふにとした触感の間違いなくちっぱい。

——あれ、ひょっとしてここ異世界じゃなくて天国じゃ？

ポジティブ気分で現実を見据えると、目の前には幼女の胸。横目でちらりとシーナの位置を確認。

よし、この角度なら見えない筈。

僕は意を決して息を吐き出し、

「クンカクンカスーハースーハー……」

うん、堪能した。

大丈夫、再度確認したけどシーナは全く気付いてない。
え、ロリコン？それがどうした！

先程とはまた違ったベクトルで思考を暴走させる僕。
と、何やら視線を感じる。

目を上げると、ミナが軽く頬を染めて僕を見ていた。
そして僕の耳に口を近付けると、囁くように言った。

「……ユーリの、えっち」

はい、すいません。もう色んな意味でクリティカルです。
思わずミナを押し倒そうとして、

「っあ!？」

背中に激痛が走る。

ミナの色香にすっかり惑わされていたが、僕は怪我人だったのだ。
怪我をした経緯は知らないけどさ。

僕の悲鳴に2人が慌てる。

「ユーリ、だいじょぶ!？」

「ミナ、どいて! ユーリさん、今治療しますから!」

幸いにも強烈な痛みは一瞬で引いている。だからこそ、シーナが何をしようとしたのかを見れた。

シーナは古びた杖の先を僕へ向けると、流れる水のような声で何かを唱え始めた。

「生命の息吹よ、彼の者の傷を癒せ、ライブ！」

シーナの声に合わせて小さな光の粒子が杖の先に集まり、拳大の大きさまで膨れ上がる。すると光は弾け飛び、雪のように僕の体へ降り注いだ。

暖かい光が僕の体の中に染み込むように融けていく。

その光景に呆然としていたら、急に背中に違和感が走った。

もぞもぞとした妙な感覚。例えるなら背中の皮膚が意志を持って這い回っているような。

その気色悪さに思わず身を振る。

しまった、と思った時にはもう遅く激痛が背中を走……アレ？

「痛く……ない？」

背中のもずもずもすぐに収まり、全身が気だるい以外に体の異常は感じられない。

試しに体を起こしてみる。力が入りにくい以外は特に異常も無かった。

そんな僕の様子を見てシーナは満足そうに笑みを浮かべる。

「良かった、成功ですね」

「成功って……今何したの？」

僕の疑問に、笑顔で答える。

「ライブの魔法を掛けたんです。失った血は戻らないのでだるさは残りますが、傷は塞がったハズですよ」

異世界トリップもののお約束が出た。

——魔法かぁ。魔法って、魔法だよなぁ。

意味の解らない事を考えながら、僕は諦めて状況を整理する事にした。

どうやらここは本当に異世界みたいだ。

あの魔法も、光だけなら手品みたいにトリックがあるのかもしれない。でもさっきまで有った背中 of 激痛が、あの光を受けてから全く無くなった事の説明が付かない。

だからアレは魔法だと信じよう。

まず大前提として——地球には魔法は無い。

そしてこの世界には魔法が有る。

結論↓ここは地球じゃないよ。

「……うん、完璧な理論だ」

「どしたの、ユーリ？」

首を傾げて僕を見るミナ。

うん、その表情は止めようね？ かわいすぎて僕が壊れるから。

自己主張を始めようとするマイサンを気力で押し留めながら、どうしたもんかと天井を見上げる。

取り敢えず住む所を探さないといけない。

どこか宿屋みたいなのがあれば良いんだけど。そうなるとお金も必要だなあ。この世界にギルドみたいな施設は有るかな？

ぼんやりと考えていると、部屋の外から大きな音が響く。

『ゴーン……ゴーン……！』

「うわっ、な、何？」

「来客を知らせる鐘ですよ。私は少し席を外しますから、何か有ればミナに言い付けて下さいね」

鐘の音に驚いている間にシーナは部屋を出て行った。

これからの事とか魔法の事とかいろいろ話したかったんだけどなあ、とぼーっとしていたら、ほっぺをぶにとつつかれた。

そのままほっぺを摘まれたり、おでこをぺちぺち叩かれたり。

「えっと、ミナは何をしてるのかな？」

「んー、なんでもないよ」

尚もぺたぺた触ってくるミナ。
どこことなくご機嫌な様子で纏わり付いてくる姿は子猫っぽくてかわいい。
やられっぱなしだと負けた気がするから、両腕に無理やり力を込めてむぎゅっと抱き寄せる。勿論ミナが痛くならないように上手く加減して。

「ふわっ!？え、えと、ユーリ？」

そのまま腕力で小さな体を持ち上げ、僕の上に寝かせる。
ミナは戸惑っているけど暴れたりはしないで大人しくしてる。と、

「……ふわぁ」

寝転がった所で急に睡魔が襲ってきた。

ミナを抱き上げた事で予想以上に体力を消耗したらしい。

目を閉じると意識がすぐに薄くなり、僕は夢の中へと入っていった。

こうして、いろいろ現実逃避したまま僕の異世界トリップ初日は終了した。

恩人はエルフでした。

僕がこの世界に来てから3日。

その間にシーナとミナからこの世界の知識や常識、それから僕が現れた時の事を教えてもらった。

まずは今僕が居るこの場所について。

ここは《西の大陸》って大陸の南西部に在る《リンディア王国》って国の更に南西部、森林地帯の入り口に在る《タマタ村》っていう小さな村。

村人達は主に農業や放牧、狩りなんかで生計を立てている。

村にある一番大きな建物がこの教会で、診療所や集会所みたいな役割も持っているらしい。

つい最近神父さんが亡くなって、代わりにシーナが村人達に支えられながら教会の仕事をこなしているみたい。

それと週に一度、行商人の一行がやってきて、村で穫れた野菜や動物の皮と、街で売っている日用品や食材なんかを売り買いしてる。

行商人の馬車やシーナの話聞く限り、この世界の文化レベルはまだ低い。

産業革命以前のまま停滞しているみたいだ。

その理由は魔法が有る所為だと思う。

多分だけど、魔法の技術を発展させようとする、科学の技術は成長していかないのだろう。

——魔法かあ。やっぱりまだ現実感が無いなあ。

聞いて驚いたのは、この世界の人は大なり小なり皆魔力を持っているという事。

その魔力が多い人は、魔導師になる為に国が運営する学校へ行く。優秀な人材を集める為に入学金や生活費は国持ちらしい。シーナも学校に入っていたのか聞くと「私みたいに魔力が少ない人は入れませんよ」と笑って言われた。

僕の傷を治したくらいだから、きっと大魔導師なんじゃないかって思った、と伝えたらちよつと照れてた。

詳しく聞くと、シーナの杖に秘密が有った。

あの杖は神父さんが使っていたもので、大怪我でも治療出来る《ライブ》の魔法が込められたものだったんだ。

魔法を使うにはそれぞれの魔法が込められた杖や魔導書が必要で、治癒系の魔法が込められた杖は比較的高価な物らしい。

そんな貴重な物を僕に使って良かったのか、って聞いたらシーナは困ったように笑いながら答えた。

「ミナの命の恩人を放っては置けませんよ」

そこから、話は僕が現れた時の事に飛んだ。

事の始まりは3日前の朝。

ミナが1人で薬草を取りに近くの森へ入っていった。

この時期には珍しく大ぶりの薬草がいっぱい生えてて、取るのに夢中になる余り普段は立ち入らない森の奥へ進んでしまった。

昼近くになり、さあ帰ろうかと歩き出した所で《荒熊》に遭遇してしまった。

荒熊は文字通り熊なのだが、気性が荒く鋭い爪で獲物を切り刻んでから食べるという、残忍極まりない習性があるらしい。

恐怖で動けなくなったミナに荒熊が近付き、腕を振りかぶる。

ぎゅつと目を瞑るが、痛みの代わりにやってきたのは優しく包み込むような感触。

目を開けると、僕がミナを抱きかかえるようにして、荒熊の攻撃を防いでいたらしい。

荒熊は駆け付けた狩人に退治され、意識の無い僕はそのまま教会へ運び込まれた、という訳。自分でも知らない間に、僕は村のちょっとした英雄になってた。

ミナは命を助けてくれた――結果的にそうだった――僕に好意を持ったようで、甲斐甲斐しく身の回りの世話を焼いてくれた。

まあ、荒熊に襲われた時の恐怖が、そのまま僕へのドキドキにすり替わったんだろうなあ、って思う。

吊り橋効果だっけ？

そんな訳でミナに介護されて、やっとベッドから出ても大丈夫とシーナに言われたのが今朝。

なんだかんだですっかり鈍ってしまった体に喝を入れようと、教会の庭で軽くストレッチを始めた所で現在に至る。

朝の日差しが目には滲みるなあ、とぼやきながら両腕を上には伸ばす。ボキボキと療養生活で凝り固まった肩や背骨が音を立てた。

その音に混じって、背後から草を踏む音が聞こえる。

「いやはや、凄い音だね。おはよう、ユーリ君。もう起き上がっても平気なのかい？」

掛けられた声は、女性にしては低めだけど、つい耳を傾けたくなる

ような綺麗な声。

僕は振り返って声の主に笑顔を向けた。

「おはようございます、エアリィさん。もう怪我は完治したんですけど、流石に体が鈍っちゃいまして」

目の前に立つ女性はエアリィさん。

荒熊を退治し、僕を教会まで運んでくれた恩人の狩人さんだ。

身長は僕と同じ160cmくらいで、すごい美人なおトナの女性。切れ長の緑色の目と薄い金の長髪がとてもチャーミングだ。

何より目を引くのは、ピコピコと揺れる長い耳。

そう、エアリィさんはエルフなんだ！

いやあ、まさか本物のエルフを見られるとは思ってなかったから、最初にエアリィさんを見た時は衝撃だったね。思わず「その耳触っても良いですか!？」って聞いちゃったし。

あの時は顔を赤くしたエアリィさんに断られちゃったけどね。

「元気なのは良いけど、余り無理はしないようにね。あれだけの怪我をした後というのは、存外動けないものだから」

「あはは、解ってますよ。今日は精々散歩くらいにしておくつもりでしたから」

「それじゃあ散歩が終わったら、私の家に寄ってくれ。何も無いがお茶くらいならだすよ」

そう言って微笑むエアリィさん。

その姿は近所の優しくて美人なお姉さんって感じた。

今日も森へ入るのだろう、ゲームとかで狩人やアーチャーが着てそうな――グリーンサーコート？を纏い、背中には木で出来た弓と矢筒を背負っている。

ただ、僕の視線が向かうのはコートの盛り上がった部分。

エアリィさんはスレンダーな体型をしてて全体的には華奢なんだけど、胸元はしっかり女性らしさをアピールしてる。

――あれは間違い無くCはある！

と、僕の視線を感じ取ったのかエアリィさんは胸を隠すように腕を抱き、身を振りながら頬を赤く染めた。

「私も元気なのは良いと言ったが……あんまり見られると恥ずかしいものだよ？」

僕の理性はダメージを受けた！

いや、エアリィさん、それ反則です。かわいすぎです。

雰囲気はオトナの女性なのに、こういったちよつとした仕草が、どこことなく子供っぽくてかわいい。

屈託無く笑った時なんか、僕と同じ年――14、5歳の女の子にしか見えない。

前にお見舞いに来てくれた時のワンピース姿は永久保存版だった。

あ、思い出したら鼻血出そう。

反射的に鼻へ手を伸ばす。勿論鼻血は出ていない。

「……ふふっ、まあそれだけ元気なら心配はいらないか」

僕の動きが面白かったのか、エアリィさんが笑みを零す。

思わずぼーっと見ていると、

「ん、どうしたんだい？」

「笑ったエアリイさんが素敵だったので見惚れてました」

……ハッ！？僕は今何を口走ったんだ！？

上がりっぱなしのテンションに任せてとんでもない事を言ったような気がする。

見ればエアリイさんは顔を真っ赤にして俯き、ぷるぷると肩を震わせていた。

——うっわぁ、エアリイさんマジ切れ状態？一体何を喋ったんだ僕！？

軽くパニックになっている僕をキッと見据えて、エアリイさんは腰に手を当て怒るように言った。

「そっ、そういう事は余り軽々しく言わないでくれないか？」

「は、はいっ！もう言いません！」

「いや、たまにというか、言うならもっと雰囲気の有る所で……」

最後の方は声が小さくなって聞こえなかったけど、取り敢えずエアリイさんが怒ってるのだけは解った。

もうテンションに任せて喋るのは止めよう、うん。

「それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

「はい、あ、エアリイさん」

うん？と軽く首を傾げて僕を見る。やっぱりかわいいなあ。

恩人の無事と狩りの成功を願って、僕は自分に出来る100%の笑顔で言った。

「行ってらっしゃい」

「――ああ、行ってきます」

僕の言葉にきよんとしたエアリイさんだけど、花が咲いたような素敵な笑顔を返してくれた。

エアリイさんを見送ってから、僕は一通りの軽い運動を始めた。

目測50mダッシュや腕立て伏せ、スクワットなんかは少しキツかった。

筋トレって1日サボっただけでキツくなるけど、3日も寝転がっていたらここまでキツくなるのか。

額に汗を掻きながら、大きく深呼吸する。

吹き抜ける風が気持ちいい。

一息吐いて、僕は庭に生えている大きな木の根元に腰を下ろした。右手を伸ばし、隣に置いてある麻袋を掴む。

「はてさて、一体何が入っているやら」

実はこの袋、僕が肩に引っ掛けていた物らしい。

少なくとも僕はこの袋を見たのは今朝が初めてだ。そう言えば、とシーナが僕の替えの服を調達してきてくれた際に、思い出して持ってきた物だ。

見た目の割には随分と軽く感じるので、あんまり中身は入っていないんじゃないかと思う。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

ちよっぴりドキドキしながら麻袋に手を突っ込んだ瞬間、

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!？」

突然掛けられた声と背中にくっつく感覚に、妙ちくりんな悲鳴を上げてしまう。

そのまま僕の肩に手を回してきゅっと抱き付いてくる。むむっ、この甘い香りは――

「ミナ、脅かさないでよ」

「にへへ、ゴメンね」

ていつ、とミナの体を持ち上げて僕の膝の上に乗せる。

背面座……げふんげふん。

頭をくしくしと撫でると、ミナは嬉しそうに目を細める。と、僕の左手が入っている麻袋に目が行ったようだ。

「気になる？」

「うん、ユーリが何を持ってきたか点検しようよ」

「じゃあ一緒に見てみようか」

左手を突っ込んだまま袋ごと持ち上げ、ミナの前に置く。

袋の口を開け、中の物を取り出す。

「これは……折り畳み傘？」

取り敢えず足元に置いて他の物を取り出す。

次に出て来たのはなんとみかんの缶詰め。

更に手を突っ込むと栓抜きが付いた缶切りが見つかった。

その後も出るわ出るわ、折り畳み傘3つ、缶切り1つ、みかんの缶詰め5個、白桃の缶詰め3個、釣り糸50mが4つ、ガムテープ2つ、お土産の木刀1振り、2L入る水筒が2つ、招き猫の貯金箱が1つ、手動発電式の懐中電灯が2つ、露天商で売ってそうなアクセサリーが幾つか、他にも大量に出て来た。

最初はミナも物珍しい品に多様な反応を見せていたけど、流石にこの量を前に黙り込んでしまった。

僕も疲れやら呆れやらで、この四次元ポケットみたいな麻袋に手を突っ込むのを止めた。

多分、まだ何か入ってる。だって袋を振ったら中でガサゴソいってるもん。

「ふわぁ……すごいね、これ」

「取り敢えず手分けして倉庫に持って行こっか」

目的の倉庫は教会の隣に建っている。

ちよつと寂れた木造2階建てで、1階は壊れた家具なんかを置いてある所謂粗大ゴミ置き場。2階が余り使わない雑貨なんかを保管する場所。

たまに掃除しているのか、埃が積もっていない階段を2人で登っていく。

大半のガラクタを整理して倉庫に納め、やっと片付いたのは昼近くだった。

ふう、と一息吐いているとミナが一点を見続けているのに気付いた。その視線を辿ってみると、無造作に置かれたアクセサリーの山があった。

——やっぱり女の子だなあ。

なんとなく微笑ましく思い、僕は右手を麻袋に突っ込んだ。

目的の物を思い浮かべて右手を引き抜くと、想像してたのよりちよっぴりオシャレな物が指の間に挟まれていた。

手のひらに隠しながら、僕はミナに声を掛ける。

「ねえミナ、ちよつとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

要領を得ない僕の言葉に首を傾げながらも、ミナは要求通りに動いてくれた。

ちっちゃなミナの手を両手で優しく包み込み、そっと、それを挿し込む。

「ん。ミナ、もう目を開けていいよ」

少しの不安と沢山の期待が混じった表情で目を開くミナ。
そして左手の中指に光るそれを見て、顔を輝かせた。

「わぁ……!!」

ミナの左手に光るのは銀の指輪。

蔦が絡まり合う装飾が施されていて、控え目ながらも気品のあるデザインだ。

ちなみに何故かサイズはぴったりだった。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないかね」

そう言ってミナは、屈んだままの僕に照れたような笑顔を見せた。
お返しなんていいのに、って言おうとした僕の口が塞がれる。
頭の後ろと背中に腕を回して僕が逃げられないようホールドしながら、ミナは小鳥が餌を啄むように僕に唇を押し付けた。

「んっ、んちゅ、ちゅっ、はむう、ちゅ、ユーリ、んっ、しゅきい、ちゅっ」

動けない僕を貪るように情熱的なキスをするミナ。

小さな舌が僕の口内を弄り、唾液を舐めとっていく。

んくんく、と白い喉を鳴らして僕の唾液を飲み込む姿に理性が焼き切れそうになる。

僕の唾液を飲み干したミナが一息吐くと、今度はミナの唾液が僕に流れ込んできた。

鼻へ抜ける甘い香りに脳を揺さぶられた。

体が熱い。

今僕にキスをしている、この少女が欲しい。

そんな衝動に突き動かされ、僕は抱きかかえるように腕を回す。

急に動かれ驚いたのか、ミナの体が硬直する。

僕はミナが動かないのいい事に、舌で彼女の口内を蹂躪する。

夢中で舌を伸ばし唾液を舐めとっていると、舌先がミナの舌に触れる。

「んむっ、ふむうっ!? んっ、んくっ、んふううっ♪」

ミナの舌に触れる度、奥からじゅぷつと蜜が溢れる。

溜まった唾液ごと柔らかく小さな舌を吸ってみる。

幼い体がびくんびくんと軽く跳ね、ミナは力無く僕に凭れ掛かった。息が苦しくなって口を離す。

僕とミナを繋ぐ銀色の糸が服に落ち、妖しく輝いていた。

「んああ……っ♪ユーリい、しゅきい……♪」

僕の腕の中でとろけた笑みを浮かべるミナ。

ミナの胸の小さな突起が、服を押し上げていた。
それを摘もうと僕は手を伸ばし――

『ガラーン……！ガラーン……！』

突如鳴り響いた鐘の音に、僕もミナもびくうっ！と身を震わせる。

一瞬、誰か来たのかと思ったけどすぐに思い当たる。

あれは正午の鐘の音だ。

来客用の鐘は建物の中には良く響くけど、教会の隣に併設されているこの倉庫までは音が届かない。

それに若干音色も違う。

「……あは」

びっくりした反動か、どちらともなく笑い声が漏れた。

もうさっきのピンク色な雰囲気は無い。

ちよっと惜しかったかな？と思いつながら、僕はミナに右手を差し出した。

「それじゃあ、お昼ご飯を食べに帰ろうか」

「うん、戻ろう♪」

純真な笑顔で僕を見上げたミナ。

手を繋いで倉庫を後にする。

と、教会の入り口まで来た所でミナは手を離した。

数歩先に行くところと振り返り、僕にだけ聞こえる声で言った。

「……また、しょうね♪」

頬を赤く染めて教会の中へ駆けて行く。

残された僕は顔を真っ赤にしながら、ゆっくりとその後を追った。

だから待つんだ息子よ。君の出番はまだまだ先なんだから。

いや、まあ、ミナとキスしてた時は、僕のズボンに五重塔が建ってたけどさ。

閑話——私の好きな人。

突然だけど、私は今好きな人がいるの。

その人はやさしくてカッコ良くて……ちよっぴりえっち。

顔はかわいくて、髪の毛を伸ばしたら女の子に見えそうなの。

その人の周りの空気もやわっこくて、えっと……にゅ、にゅーわ？
日向ぼっこしてる時みたいにぼかぼかしてるよ！

その人の事を思い出すだけで、ちよっと幸せな気分になっちゃう。
……あ、いけないいけない。

ぼーっとして部屋を通り過ぎるところだった。

そっと扉を開けて、中をのぞき込む。

うん、まだ寝てるみたい。

最近の私の楽しみは、毎朝その人を起こす事。

「ユーリい、朝だよ」

体をゆすってみるけど、すやすやとかわいい寝息を立てたままのユーリ。

パツと起きるのは苦手みたい。

だから私は毎朝、ユーリにちよっぴりいたずらするの♪

「ていっ」

いきおいを付けて指をユーリのほっぺに伸ばす。
むにゅとやわっこい感触。

もちもちのほっぺを触つてると何だか癒される。

そのまま指を下にずらすと、ユーリのくちびるに当たる。

朝だからかな？ちよっと乾燥しててカサカサ気味。

私は振り返って部屋の入り口を見る。

……うん、お姉ちゃんに見られてない。

最初にユーリを起こした時はお姉ちゃんに見付かって、後で怒られちゃったからね。

同じ失敗はしないのっ！

私はドキドキする胸を押さえながら、ユーリのくちびるに顔をよせた。

舌を伸ばして、よだれをくちびるに薄くぬるように舐める。

チロチロ、ペロペロ、時々ちゅっちゅっ。

そんな音を立てて、ユーリのくちびるを味わう。

「はふう……♪」

今日はこれくらいかな。

最後にくちびるを舌でなぞって、ユーリから離れた。

「にへへ、ちゅうしちやったあ♪」

うれしさや恥ずかしさでほっぺが熱い。

ユーリにちゅってすると、ぽわぽわした気分になって、心が気持ちよくなっちゃう。

ちよっと癖になりそうなくらい。

やんやん、ってくねくねしてたらユーリがもぞもぞ動き始めた。

体をやさしくゆすつたら、閉じてた目がゆっくり開く。

「おはよう、ユーリ。朝だよ？」

「……んう……」

「起きないといたずらしちゃうよ？」

もうしちゃったけどね。にへへ♪

ユーリはまだ寝ぼけてるみたいで、すぐに目を閉じようとする。
だから私は布団をひっぺがした。

でもあんまりやったらかわいそうだから、はがすのはお腹の上くらいまで。

「うう……寒いよミナ……」

「ほら、起きたらあったかいよ」

寒そうに体をよじってるユーリ。

そしたら、急に腕が伸びてきて捕まった。

「わわっ、ユーリ!？」

「んう……ミナは暖かいなあ。……よし、今日からミナは僕の抱き枕に決定」

そのまま布団の中に引きずり込まれて、ユーリに抱きしめられる。
あ、ユーリのおいだ……。

ちよっぴりほっぺが熱いけど、なんだか幸せな気持ちになっちゃう。

「……にへへ、ユーリの抱き枕になっちゃったあ」

胸板に顔をこすりつけて深呼吸。

鼻の中いっぱいユーリのおいが広がる。

前にユーリが私にしたのと同じ事をしてみたけど、これはなかなかすごい。

全身にユーリのおいがついちゃう気がして、すごくえっちだ。

「わぁ……私、ユーリのせいでえっちになっちゃったかも……」

って、ユーリ起こさないとお姉ちゃんに怒られちゃうよ！

このまま一日中くっついてたいけど、お姉ちゃんのげんこつは怖いもんね、うん。

ゆーわくを振り払って、私は体を離そうとする。

「わひゃうっ!？」

逃げようともぞもぞ動いたら、がしつと強く抱きしめられる。

そして、ユーリの右手は私のお尻をつかんだ。

そのままむにむにと揉まれる。

「やつ、ユーリっ、んっ、んあっ」

変な声が出る。

なんだか恥ずかしくなって、ユーリに文句を言おうとして顔を上げたら、目を閉じてくーすか寝てた。ほっぺを叩いて起こそうと思っただけど、両腕はガッチリ押さえ込まれてる。

抜け出そうと動いたら、

「きゃふっ、んあっ、あっ、やあん」

お尻をむにむにと揉まれる。

——う、動けないよお……。

鼻からはユーリのおいが入ってくるし、動いたらお尻を揉まれるしで、だんだん頭がぼわぼわしてきた。

結局、様子を見に来たお姉ちゃんに助け出されるまで私は捕まっていた。

私はげんこつ、ユーリはお説教をお姉ちゃんからもらったけど、私にげんこつするのはなんだか納得いかないよお！

それとユーリは私に何をしたのか全然覚えてなかった。

寝ぼけてるユーリにあんまり近付いたらダメ、ってお姉ちゃんにもこっそり教えておいた。

……べ、べつに、ユーリの抱き枕は私だけでいいの、とか思っ
てないよ？

朝ご飯を食べて洗濯物を干し終わって。
お昼までやる事のない私はふらふらと歩いてた。

「……はふう♪」

今日の私はちよっぴりごきげん。

朝に抱きしめられたせいで、服からユーリのおいがいっぱい。
うれしいような恥ずかしいような、不思議な気分。

なんだかユーリに抱っこされてるみたい。

そんな幸せ気分でてくてく廊下を歩いてたら、外から声が聞こえてきた。

窓をのぞくと、ユーリが庭を走り抜けてた。

そういえば、ご飯の後でとれーにんぐをやる、って言ってたつけ。
よく解らなかったけど、あれがきつととれーにんぐなんだよね。

私は庭の入り口の木に隠れて、邪魔しないように観察をする事にした。

「49っ、50っ、51っ」

ユーリは地面に寝転んで、上半身だけを起こしてた。

なんだっけ、ふ、ふ………腹筋？

そうそう、腹筋。

ユーリすごいなあ、腹筋50回も出来るんだあ。

しばらく見てたら、ユーリは庭で一番大きい木の下に座り込んだ。
休憩かな？

朝の仕返しに驚かしちゃおう、って思って、私は足音を立てないよ

うにこっそりこっそり近付く。
後ろまでやってきて、いきおいよく抱きつく。

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!?!」

むぎゅっと腕を回したら、ユーリのおいがいっぱいいい。
ほわぁ……汗くちあいよぉ……♪

ユーリのおいにキュンキュンしてたら、ぐいって体を持ち上げられた。

そのまま膝の上に乗せられて、後ろから抱きしめられる。

頭にぽふり、って温かさが広がる。

くしくしとやさしく撫でられて、思わず顔がとろけそうになっちゃう。

その後2人でユーリの持ってた袋の中身を点検する事にしたの。

最初に袋から出てきたのは、青くて短いぼっこみたいなの。

「これは……折り畳み傘?」

他にも果物の絵が描かれた缶とか、キラキラした首飾りとかいっぱい出てきたの。

もしかしてユーリって商人さん?

……でも、普通はこの袋に入りきらないよね、この量。

実はユーリって整理整頓の達人さん?

次から次へと出てくる中身に、私はぼーんってしちゃった。
それから出てきた荷物を2人で倉庫に運んだの。

ユーリは私に軽い物しか持たせてくれなくて、自分は物がこぼれそうなくらい抱えてた。

時々ふらふらしながら歩いてく姿がちょっとかわいかった。

倉庫の2階で荷物をどさどさーって広げる。

首飾りや指輪だけでもちよっとした山になってるよ。

圧倒されてたら、ユーリに声をかけられた。

「ねえミナ、ちょっとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

なんだろう？ちよっとドキドキしちゃうなあ。

言われた通り目を閉じたら、左手をやさしくきゅってされた。

くすぐったくてぴくん、ってしてたら何かが中指に当たる。

ユーリがもういいよって言ったから、ゆっくり目を開けてみた。

「わぁ……！」

私の中指に、キレイな指輪がはめられていた。

小さい私の指にしっかりぴったりな大きさの、銀の指輪。

何よりびっくりなのは、

——ユーリが、私の中指に……！

私たちのいる西の大陸では、男の人が女の人に指輪をはめる事には特別な意味がある。

左手の中指はさらに特別。

それは『あなたは私のもの』って意味。

つまり、私はユーリに『結婚してください』って言われたようなものの。

思わず顔が熱くなっちゃうけど、ここで慌てちゃダメ。

多分ユーリは、そういった事……この大陸の文化を知らない。

王国の事も魔法の事も知らなかったみたいだから、きっと別の大陸から来たんだと思う。

だから、これは逆に良い事かも。

今ならキセイジジツを作って、ユーリのお嫁さんになれる。

私はまだまだ子供だし、周りにはお姉ちゃんやエアリイさんもいるから、ユーリはいっぱいゆるわくされちゃう。

でも、私だってユーリが好きだもん！他のみんなには負けないからねっ。

心の中で手をぐって握って、私はユーリに笑顔を向けた。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

やっぱり解ってないみたい。

それなら、って私はずるい笑いを浮かべて言った。

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないとね」

その後の事は……にへへ、ナイショ♪

だって思い出しただけで、体が熱くなってぴくんぴくんしちゃうもん。

そうそう、指輪を贈られたら、返事はちゅうでするんだよ！ちゅうして、私の全てをあなたに捧げます、って示すの。

つまりこれで、私はユーリ専用っ♪

だから今度ユーリが、その……さっきみたく、私のおっぱいさわりたくなったら……いい、いいよ？

恥ずかしいから誰もいないところで、ね♪

そんな気持ちも込めて、私はユーリに言った。

「……また、しょうね♪」

閑話——私の好きな人。（後書き）

今回は視点を変えてミナから見た世界を。

子供っぽく見せる為に漢字を平仮名に代えたり、言い回しを素直な表現にしたり……いやあ、難産でした。

そして今回はいつもより短い（もじかい）です。

それでも拙文に付き合って頂いた皆様に感謝を。

お茶会にお呼ばれます。

昼ご飯を食べて、ちょっとした雑用をこなして。

そんなこんなで時刻は午後2時。

何で正確な時間が解るかと言うと、袋から腕時計が出て来たから。

耐水耐圧耐衝撃が売りのゴツいやつだ。

取り敢えずアレは『四次元麻袋』ってあだ名を付けよう。

話を戻して、今僕は部屋の中にいる。

これまた四次元麻袋から出て来た、多分この世界風の衣服を着込んでいるからだ。

黒を基調として、肩から袖口まで蔦柄の刺繍が施されたシャツと、同じく黒の下地と側面に金の蔦柄が走るズボン。更にはこの編み上げ靴まで黒だ。刺繍はないけど、代わりに靴紐が金色。

——いやいや、派手っていうか趣味悪くない？

コスプレとかなら格好いい服装かも解らないけど、一市民が着る服装としてはかなり異彩を放ってる。

確かに、僕が最初に着てた学生服は背中がバックリ裂けてるし、亡くなった神父さんの服を借りっぱなしって訳にもいかない。

でも、だからってコレが代案ってのはどうだろう。

そんな事を考えてると、ドアをノックする音が聞こえてくる。

「ユーリさん、準備出来ましたか？」

「一応出来たけど……笑わないでね」

僕の声に、頭に？を浮かべながらシーナがドアを開けた。

シーナは僕の姿を見て、部屋の入り口で息を呑み固まってしまった。

——そりゃそうだよなあ。幾らファンタジーな世界でもコレは無いよなあ。

気恥ずかしさで頬に血が集まるのを自覚しながら、どうしたもんかと頬をぽりぽりと搔く。

と、固まっていたシーナがぼつりと呟く。

「……素敵です……」

「へっ？」

「あ、いえっ！何でもないですっ」

何だろう？つい「キモッ」とか「ダサッ」とか口に出ちゃったのかな。

……考えてると悲しくなるから止めよう、うん。

それにシーナは良い子だからそんな事言わないもんね！

や、まだ年聞いてないけど多分僕とそう変わらないと思う。

同世代の娘さん捕まえて良い子も無いか。

取り敢えず現実逃避を止めて真実へ一歩踏み出してみる。

「えっと……ど、どうかな？」

意を決して聞いてみる。

願わくばポジティブに受け取れる罵倒でありますように！

「服の落ち着いた気品がユーリさんの魅力を引き立てていてすごく格好いいですよ。おとぎ話に出て来る勇者様みたいです」

——イイイイヤッホオオオオイ！

まさかの全肯定きたあああ！

お世辞でも何でもいい、罵倒じゃなかったから何でもいい！
嬉しさの余りシーナの手を握りぶんぶん振りたくる。

「ありがとうシーナ！」

「きゃー！？えっと、あの……どういたしまして？」

シーナは戸惑ってるみたいだけど、今は僕の感謝を受け取って欲しい。

小さい頃から妹の着せ替え人形役をやっていた成果がここで出たのかな。

妹よ、天国から見てるか？お兄ちゃんは妹のおかげで格好良くなれたよ。

あ、いけない。妹の事思い出したら涙がちよきれそうだ。

今度は突然しんみりしだした僕に、シーナは更に戸惑いを深くした。

「あ、あの、ユーリさん？」

「ん、ああ、大丈夫。ちょっと色々思い出しちゃったただけだから」
「そう、ですか？」

握ったままだったシーナの手を離す。

細くて白くて小さな手。

細工品のような、って言葉はシーナの為にあるんだなあ。

そんな風に思いながら、僕はシーナに思い付いた事を言う。

「先にミナと外で待っててもらえる？」

「どうかしたんですか？」

「せっかくだから、お土産持って行こうと思って。勿論2人の分もあるよ」

「私達にはそんな気を使って頂かなくても……」

「いいからいいから。じゃ、ちょっと行ってくるね」

何か言いたげなシーナを残して、僕は倉庫へ向かう。

ふっふっふ、3人共喜んでくれるかな？

ニヤニヤしながら階段を駆け下り、教会の玄関を抜ける。

朝より数段傾いた太陽に出迎えられ、一瞬だけ目が眩んだ。

すぐに目は慣れ、倉庫の古びた扉を開けて、階段を上へ。

とんとんとん、とリズムを刻みながら2階に到着。

あったあった、みかんに桃……ついでにパインもあった方がいいかな？

僕は倉庫の隅に置いておいた麻袋に手を突っ込み、無造作に中の物を掴み取る。

うん、あったあった。

目的の物を腕に抱えて、僕のニヤニヤは更に濃くなった。

3人の――特にエアリィさんのびっくりする顔を早く見てみたいなあ！

「3人共、いらっしやい。今か今かと待ちわびたよ」

「エアリィさん、今日はお茶会に呼んで頂きありがとうございます」

「はっはっは、相変わらずだなシーナ君は。もっと気さくに話してくれても構わないよ？」

「エアリィさん、こんにちは！」

「こんにちは、ミナ君。今日も元気いっぱいだね」

「さつき振りです。あ、これお土産です。みんなで食べましょう」

「ああ、わざわざ済まないね。ありがたく頂くとしよう。……それはそうとユーリ君、すごい格好だね。王国の舞踏会にでも出るのかい？」

「うぐっ。に、似合ってますか、やっぱり」

「いやいや、余りに素敵なのでね。貴族様よりも格好いいよ」

そんな会話を交わしながらエアリィさんの家にお邪魔する。

出迎えてくれたエアリィさんは朝の時とは違って、薄い水色のワンピースを着てた。

清楚な雰囲気と柔らかな微笑みが合わさって、どこかのお姫様みたいだ。

家も4LDKくらいありそうなログハウスで、小綺麗な内装が落ちていた雰囲気醸し出してる。

もうお茶の用意はしてあったようで、いい匂いが漂ってくる。

「まあ、掛けて待っていてくれ。すぐにお茶を持ってくる」

「あ、僕もお手伝いしますよ。お土産も広げようと思いますし」

「そうかい？じゃあミナ君とシーナ君はそのまま座っていてくれ」

足取りも軽やかなエアリィさんに続いて台所へ。

お茶会が余程楽しみだったのかひどくご機嫌な様子。長い耳もピクピク動いてるし。

触りたいなあ。ハムハムしたいなあ。

と、僕の邪な視線に気付いたのかエアリィさんが振り返る。

どうしたんだい？と微笑みを浮かべて僕を見る姿が、もうたまらんです。

「ちょっと大きめの器を3つと、フォークを人数分お願いします」

「ああ、解った」

僕はみかんの缶詰めを手にとると、缶切り片手に開け始めた。

きこきこきこ、と軽快なリズムに乗せて鼻歌なんかも歌っちゃってみたり。

「集え、銀河の守護神、♪砕け、悪の野望を、♪」

「なかなか勇ましい歌だね、ユーリ君。何を謳い上げた曲なんだい？」

「全てを手に入れるんだ……♪あ、これですか？この曲は昔妹が僕のテーマソングとして作ってくれたんですよ」

「そうだったのかい？いやはや、才能に溢れた妹君だね」

ちょっと自慢げになる。

妹はかわいくて賢くて優しくて、まるで天使みたいな子だった。絵も上手だし声も綺麗だし作詞作曲も出来て運動も得意。

その上僕を「おにいちちゃん」って慕ってくれたし。

え、シスコン？ハハハ、何をおっしゃる。

っと、もう一周してみたいで缶の蓋が上がっていた。

手を切らないように注意しつつ、蓋を開けて木のボウルに中身を移す。

うん、まずみかんは出来上がり。

エアリィさんを見ると、目をキラキラさせてみかんを見ていた。

「ゆ、ユーリ君っ。この美味しそうなのは一体何だいっ？」

テンションが振り切っているのか、少し語尾に力が入ってる。

なんて言うか、初めて見るご馳走を前にした子供みたいですごくかわいい。

「これはみかんっていう、僕の国で一般的に食べられていた果物をシロップ漬けにしたものですよ。他にも桃とパイナップルって果物も持ってきました」

「なるほど、これは、その、ううむ。いや、はっきり言おう、早く食べたい！」

言いながらも目はみかんに釘付けなエアリィさん。
実はちょっぴり食いしん坊さんなのかな？

なんて事を考えながら、僕は桃の缶詰めに手を伸ばした。
開けて中身を移す度に、エアリィさんは黄色い悲鳴というか、感嘆
の声を上げる。

どの世界の女の子も、果物には弱いんだなあ。

予想以上にかわいい反応を見せるエアリィさんを微笑ましく思いながら、僕は缶詰めの空を片付け始めた。

「ずいぶんと盛り上がっていたみたいですね……え、何ですかこれ？」

「ん、なんだか甘い匂い……ほわぁっ、ナニコレ!？」

器を持ってリビングに戻ると、2人共目を丸くしてた。

やっぱりこの世界の食べ物と地球の食べ物は少し違うみたいだ。

シーナはフォークで桃をつんつんして、ミナはパインに鼻を近づけて匂いを嗅いでる。

エアリィさんは待ちきれない様子で視線をみかんに向けながら、香草茶——多分ハーブティー的なものを注いでいる。

やばい、みんなかわいすぎて鼻血出そうだ。

取り敢えずみんなにお茶が行き渡ったのを確認して、フォークを握らせる。

「今日集まってくれた皆に精霊の祝福があらん事を……。待ちきれん、突撃だ!」

「おー!」

ファンタジー特有の、食べる前に捧げるお祈りが見れるかと思った
らそんな事はなかった。

勇ましくフォークを握り締めるエアリイさんと、腕を振り上げてノ
リノリなミナ。

シーナなら修道女だし真面目にお祈りしてるハズっ、と目を向けた
ら既にお祈りを終えて臨戦態勢だった。

いやいや、何倍速でお祈り終わらせたのん？

女の子パワーに圧倒されて若干言葉が怪しくなる僕。

シーナは桃を小さく切り分け、とても上品に食べている。

うん、お嬢様っぽくてかわいい。

ミナは口いっぱいパインを頬張ってる。

なんだかりスみたいでかわいい。

エアリイさんは、みかんをいっぺんに5個くらいフォークに刺して
口に放り込んで、幸せいっぱいな顔でもぐもぐしてた。

やだ、なにこのかわいいイキモノ。

今日はエアリイさんの破壊力が半端じゃないなあ、とみんなを見て
ヘラヘラ笑いながら、僕は温くなった香草茶をすすった。

「で、取り敢えず今日はみんなに僕の事を知ってもらおうかと思う
んだ」

果物との死闘も終わってまったりとした空気が流れ始めた頃、僕は
そう切り出した。

その言葉にエアリイさんとシーナは姿勢を正すけど、ミナはへにや
つと首を傾げる。

「ユーリの事？」

「そうそう、僕の事。例えば……ミナは僕が、別の国から来たって言ったら信じる？」

「うん、ユーリの事ならなんでも信じるよ！」

いや、嬉しいけどね、そうじゃないんだよ。

聞き方を間違えたかなあ、と頬をぽりぽり搔いているとシーナが助け船を出してくれた。

「確かに、この国に住む方なら知っている事を、ユーリさんはご存知無かったですからね。異国の方と考えるのが自然ですね」

「ありがとうシーナ、まあ、言いたいのはそのう事。で、こんな事言ったら冗談だと思われるかもしれないんだけどさ」

僕はみんなの顔を見渡して、爆弾を投下してみた。

「もし、僕が『別の世界』から来たって言ったら、信じる？」

うわ、みんなぼかーんってしてる！

そりゃそうだよなあ、いきなり異世界人です、なんて言われてもなあ。

何言ってるんだコイツ的な視線を向けられて、最悪脳に蛆が湧いたって思われるのがオチ……いやいや、みんなを信じるんだ。

果物であんな幸せそうに笑う女の子達ならそんな酷い事は言わないハズ！

戦々恐々としながらみんなの様子を窺ってみる。

ミナは、僕が何を言っているのか解っていないみたい。

そもそも別の世界って何？って顔してる。

シーナは軽くパニックになってるみたい。

うん、その気持ちはよく解るよ。最初僕もパニックだったからね。

エアリィさんかというと、何やら考え込むように僕をじっと見てた。

あ、その目で僕を見ちゃダメ、なんかゾクゾクきちゃう。

「そう言ったって事は、ユーリ君自身そう思える理由を見つけたのかい？」

おおっ、エアリィさんひょっとして信じてくれた！？

ちよっと感激しながら、僕は口を開いた。

「僕の世界と違う所を見つけて、そう考えたんです」

「違う所、とはなかなか抽象的だね。例えば何が違ったのかな？」

「そうですね、一番の違いは……この世界に魔法がある事、ですかね」

僕の言葉に耳をピク、と動かす。

反応が解りやすくていいな。

「僕のいた世界では魔法は空想の産物でしかありませんでした」

「それは大きな違いだね。少なくとも、私からしてみれば魔法が存在しないなんて信じられないよ。空気と同じ、在って当たり前のものだからね」

「それから、エアリイさんみたいなエルフもいません。会話が出来る程の知性を持った生物は人間しかいません」

「それは……絶滅した、という訳ではなく？」

「ええ、最初から人間しか種族として存在していません」

ううむ、と考え込むエアリイさん。

別の大陸にもエルフや獣人なんかが大勢いるって話だし、全体から見ると少数民族な人間しか存在しない世界ってものが想像付かないんだろう。

「ただ、幾ら僕が自分の世界と違う所を並べても、僕が異世界人だと証明するのは難しいですけど」

「え、何ですか？」

それまで聞き役に徹していたシーナから疑問の声が上がる。

答えようとした僕より早く、エアリイさんが綺麗な声を響かせた。

「簡単な事だよ、シーナ君。彼は自分の世界と私達の世界、両方を知っているから2つの世界が違うものだ判断出来る。しかし私達は彼の世界を知らないから、私達の世界を基準にする事でしか思考出来ない。つまり、彼がどんなに説明しても、私達からしてみれば証拠の無い作り話にしか聞こえない、という事だよ」

僕が言いたかった事を完璧に全部言われちゃった。

流石エアリィさん、知的な所も素敵です。

ただ、ミナが睨むような視線を向けているのが心苦しい。

最初から僕を全肯定してくれるミナにしてみたら、今のエアリィさんの話は僕の言葉を信用してないって取れるからなあ。

……いや、僕もエアリィさんがどう思ってるのか解らないからドキドキだけだね。

「エアリィさんの言う通り、僕が異世界人だって証拠が無いんだ。異世界が在るって証明する方法も解らないし」

「おや、証拠ならここに在る……在ったじゃないか」

「へ？」

微妙に言い直して、エアリィさんは空になったボウルを指差す。

そこに在ったもの……みかん？

「私の知る限り、どの大陸にもこんなに美味しい果物は無いよ。それにこれが入っていたあの缶。あれを作る技術も、この世界には無いものだ」

ああっ、言われてみれば！

さっきまで散々その事でニヤニヤしてたのに、すっかり忘れてた。みんなの笑顔がかわいかったせいにしておこう。

ん？という事は……、

僕の視線をいたずらっ子のような笑みで受け止めるエアリィさん。

「ふふ、意地悪な言い方をしてすまなかったね。いやなに、存外君が困ってる姿がかわいかったのね」

「ああっ、エアリィさん僕をからかってたんですね!？」

「ははは、許してくれないか。ただ、私は最初から君の言う事を信じていたよ?」

そう言って手を合わせ上目遣いに僕を見るエアリィさん。

そんな事で騙されな……騙されました。

だって反則級にかわいいんだもん! ああ、こうやって男は女の子に騙されていくんだなあ。

そんな事を考えていると、ミナが僕の膝に座り抱き付いてきた。

そのまま首だけエアリィさんに向けて、威嚇するように睨んでいる。

「ユーリをいじめたらダメなの!」

ミナの健気な言葉に僕のハートは撃ち抜かれた。

もう、ズギューンって。

頭を優しく撫でると、くすぐったそうにすり寄ってくる。

慌てたのはエアリィさんだ。

「い、いや、いじめた訳ではないよ?」

「でもユーリを困らせて笑ってたもん!」

「そ、それはなんと言うか、ミナ君もかわいいと思わなかったかい?」

「それとこれは別なのー！」

あ、ミナも思っただ。

言っとくけど、男にかわいいは褒め言葉じゃないんだからね？

やいのやいのと賑やかになる2人とは対照的に、シーナは黙ったまままだ。

どうしたんだろ？と首を向けてみると、丁度顔を上げたシーナと目が合った。

「なるほど……ユーリさんは異世界人だったんですね」

「え、いまさら！？」

マイペースさんめ。

意外とシーナって天然さん？

普段しつかりしてるから、こういうシーナはなんか新鮮な気がする。取り敢えず収集が付かなくなったから、僕は香草茶をすすってまったり流れに身を任せる事にした。

投げっぱなし？勿論。

ハハハ、流されるのは得意なんですよ。

場所を移して教会の裏庭。

あの後僕に魔法が使えるのか気になって、エアリィさんに教えてもらう事になった。

すぐに仲直りしたみたいで、ミナはエアリィさんと一緒に的を準備

してる。

仲睦まじい2人を見てると和み度数が半端じゃない。

シーナはと言うと、万が一の時の為にライブの杖と傷薬、それに包帯なんかも用意しておくって教会の中へ引っ込んでいった。

大げさに思えるけど、失敗したらそれだけ危険って事だよね。

よしっと気合いを入れて、僕は気持ちを新たにした。

丁度準備も終わったみたいでやり遂げた感を滲ませながらミナが駆け寄ってくる。

そのままぽふって抱き付かれ、ミナは褒めて褒めて、としっぽを振る子犬みたいにじゃれついてきた。

頭をくしくし撫でると気持ち良さそうに目を細める。

「はぁ……癒されるわぁ」

「にへへ、ユーリの手やさしいから好き♪」

ミナを撫でているとエアリイさんも僕の元へやってきた。
ほぼ無意識に手が伸びて、

「うなっ!？」

気付くと僕の右手はエアリイさんの頭に。

ナデナデナデナデ。

さらさらの髪の毛は手触りが良くて、いつまでも触っていたくなる。
っていうか「うなっ」って。

エアリイさん猫みたいな声上げたね。かわいいからいいけど。

——って、僕は何をやってるんだ!?

つい勢いのままぬエアリィさんの頭撫でてたけど、ひょっとして怒ってるかな?

うわぁ、エアリィさん俯いて肩ふるふるさせてるし。

ていうか、大人の女性を子供扱いしちゃ怒るよね、普通。

あ、でも撫でると気持ち良いや。

なでなでなでなで。

勿論左手でミナを撫でるのも忘れない。

おおう、両手が幸せいっぱいだ。

「——何してるんですか、ユーリさん」

突然背後から聞こえてきた声にびくうっとする。

振り向いたら半目で僕を見るシーナの姿が。

「いや、えっと、なんていうか」

からからから。

いい感じに僕の頭は空回りを披露した。

別にやましい事をしてた訳じゃないから慌てなくてもいいけど、小心者でチキンな僕はこういう時に思いつ切り慌てる。

シーナは溜め息を吐いて、腰に手を当てるとお説教を始めた。

「いいですかユーリさん、年上の方を子供扱いしてはいけません。ミナのように小さい子ならまだしも、エアリイさんのように大人の方の頭を撫でるなんて失礼ですよ。まだエアリイさんだったから良かったですけど、貴族様相手にやってしまったら不敬罪で投獄される事もあるんですから。だいたいユーリさんは礼儀を知らなすぎます。異世界人だからといって、全てが許される訳ではありませんからね。丁度いい機会です、この際礼儀作法をみっちり教えてあげます」

うわぁ、シーナのマシンガンお説教タイム始まったよ。
スイッチ入ると途端に喋り出すんだよねえ。

「い、いや、シーナ君。せっかくだけど、今は魔法の練習だから、その話は夕食後にでもじっくりやってくれないか？」
「む、そうでしたね。仕方がありません、お説教はまた後でやりましょう」

ナイス、エアリイさん！

お礼に後でみかんの缶詰めと缶切りをあげちゃう。

ミナは僕の陰に隠れて様子を窺ってた。シーナのげんこつ痛そうだったもんね。

取り敢えずシーナも引き下がったくれたし、心置きなく魔法の練習が出来る。

ミナも僕から離れて、後ろの長椅子に座って足をぶらぶらさせてる。

「それじゃあ、やり方を教えるよ。まずは体を楽にしてみてください」

言われた通り全身から無駄な力を抜く。魔法の練習、って聞いて思わず体が緊張してみたい。

「次に意識を体の内側に向けるんだ。目を閉じると集中しやすいかもしれないな。全身の血流を感じるように、指先、腕、足先、太腿、背中、首、心臓なんかを意識してみるといい」

目を閉じて意識を巡らせてみる。

血流を感じる、ってどんな感覚なのかな？

運動した後には耳の血管がドクンドクン煩く鳴るような感覚かな。

あれだったらイメージしやすいんだけど。

まあ、試しにやってみよう。合ったらエアリイさんがなんか言ってくれるはずだし。

最初は心臓から。首、左腕、両足、右腕って順番に意識を広げていく。

「すごいな、ユーリ君は。もうコツを掴んだようだね、今度はその感覚を指先に集めるように意識してごらん」

やっぱりあの感覚で合ってたみたいだ。

今度はそれを指先に集める……何かイメージが有った方がやりやすいよね。

なんかそれっぽいイメージ……あ、魔○光殺砲でいいか。

指先に意識を集めて、と。
なんだか指先が熱を持ってきた気がする。

「充分出来たと思ったら、指先を対象——あの的に向けて、使いたい魔法を唱えるんだ。ファイアーの魔導書があるから、これを使ってみると」

「ファイアー！」

あ、なんか先走って呪文唱えちゃった。

さっきミナとエアリィさんが木の枝を組み合わせて作った人形の足の元から、高さ2mくらいの火柱が上がる。

でもすぐに炎は消えちゃって、失敗したかな？って思ったんだけど、よく見たら炎が燃え尽きてて灰一つ残って無かった。

——うわぁ……ファイアーって名前でしょぼいの想像してたけど、威力凄まじいなあ。丸く地面禿げてるし。

なんとも言えない表情でエアリィを見ると、真っ青な顔をしていた。

え、もしかしてなんかマズかった？

「……ユーリ君、正直に答えてくれ。今、君は、何をした？」

「え、えっと、言われた通りのを狙って呪文唱えただけなんですが」「質問を変えよう。君は今、魔導書を持っていたりしないかい？」

「持って無いです……っていうか、魔導書無いまま魔法使えちゃい

ました」

「……そう、か。いやはや、つくづく君は私を驚かせてくれるね」

感心半分呆れ半分、といった感じでエアリィさんは苦笑を浮かべた。僕も自分にちよつと呆れてるけどさ。

この世界の理を無視して、理魔法を放つてのもどうなんだろう。理魔法といえば、この世界の魔法ってファイオーエブレムっぽいよね。

でもエルフや獣人もいるし、まるつきり同じじゃないよねえ。

その内マムクートとか出るのかな？

竜族の女の子とかかわいいんだろぅなあ。

しかも合法ロリかぁ……ごくつ。

「……いや、信じらんない気持ちは解るがそろそろ帰ってきたまえ
ユーリ君」

おっと、現実逃避してたらエアリィさんに怒られちゃった。

失敗失敗。

「取り敢えず、この魔導書を渡しておくよ。誰かに見られてもこれで言い訳出来るだろうからね」

「ありがとうございます。まあ、極力誤魔化すか使わない方がいいですよね」

「加えて異世界人だというのも黙っていた方がいいだろうね。心無い人が聞けば研究の為に飼育殺しにされるか、危険だと思われて命を狙われるか」

「うへえ……おっかないですね」

一気に話が血腥くなってきた。

ゲームなら幾らでも返り討ちにしてきたけど、現実として降りかかると考えたくも無い話題だね。

それにしても、つくづくテンプレだなあ。

異世界に飛んだらチート級の魔法が使えるとか、周りは美少女ばかりだとか。

まあ、今日の所は平和に終わりそうだし、特に心配は無いかな。

「山賊だ！山賊が出たぞお！」

ああ、もう！

どこまでテンプレな展開が続くんだよお！

したくなかった初体験です。

山賊が現れたって聞いて、村は大騒ぎだった。

村の自警団が防衛と迎撃に出るようで、エアリィさんもそっちへ向かった。

僕はというと、村人の避難誘導と教会の警戒に当たっていた。

いやいや、怖くて戦場なんか行けないって。

足腰の弱いお婆さんを背負って教会へ運んだり、鳴子を設置したり。僕に出来る精一杯の事をやる。

本当にいざとなったら……魔法で、山賊をやっつける。

出来れば戦いたくもないし、その辺の事は考えたくもない。

シーナとミナは教会の中に避難させて、村のみんなと待機させてる。今は村の東側から山賊が攻めて来ているみたいだけど、こういうパターンの戦いだとか北の森を抜けてくるはみ出し者が1人くらいいるんだよね。

——って、落ち着け僕。思考が分裂し始めてるじゃないか。

色んな事を思い浮かべては考える前に別の事を思い浮かべて気を逸らす、僕特有のパニックだ。

普段ならいいけど、今はそれが命に関わってくる。

だから僕は深呼吸をして無理矢理にでも落ち着く事にした。新鮮な空気が肺を満たして、少し頭が冷える。

——よしっ、ちょっと落ち着いた。

妙な緊張で強張っていた右手の握り拳をほどく。

大丈夫、いざとなったらファイアーで脅かしてやればいいんだ。

流石に持っている武器が手元だけ残して燃え尽きたらびっくりするだろうし。

それに上手く撃退出来たら、ミナがキスしてくれたりして……？

でへへ、と妄想に頬を緩ませる。

おっといけないいけない、ちゃんと警戒しないと。

敵なんか来る訳無いって決めつけてる歩哨は間違い無くスナイポされてお陀仏だし。

でもエアリィさんは大丈夫かなあ？

心配はいらないよ、って僕に微笑みながら弓と矢束を背負って家の外へ。

その姿が格好良くてちよつと憧れた。

凛々しいエアリィさんもいいなあ。

僕がまだ避難してない村人を探しに出た所で、村の入り口で弓を使える数人と合流して引き連れて森の中へ向かうエアリィさんを見掛けた。

なるほど、森の中から弓を射掛ければ、すぐには見付からないだろう。

自警団の人達は鉄板をくつつけまくった、ガチムチアーマーみたいな鎧を着て行った。

あれならレイピアでも使われない限り致命傷は負わないだろう。

まあ山賊がレイピアなんて持ってないよなあ。手斧を振り回してそんなイメージがある。

——つと、また思考が走ってるよ。落ち着けて僕。

妙な高揚と緊張が混ざって、自分じゃどうしようも無いくらい浮き足立ってる。

やっぱり僕ってチキンだなあ……って、ちょっと自嘲してみる。シーナや、ミナだって取り乱さずに他の人達を気に掛けていたっていうのに、僕は見えない何か相手に独り相撲状態だ。

そんな落ち着かない時間が、5分、10分と過ぎた頃。

『カランカラン!』

一瞬息が、心臓が止まる。
来た。

鳴子が響いたのは教会の裏手に広がる、ちょっとした藪の中。
震える足を叱咤して教会の裏庭へ急ぐ。
教会をぐるっと囲む2mくらいの塀を、勢いを付けてよじ登る。

『ヒュン!』

「うわぁっ!?!」

目の前を何かが通り過ぎる。それに驚いてバランスを崩し、地面にべちゃっと落ちた。

この地面に這いつくばる感じ、久し振りだなあ。

っと、ふざけてる場合じゃない。

一歩間違ってたら死んでたね、アレ。

立ち上がって前を見ると、筋肉ムキムキでスキンヘッドで煤けたタンクトップとズボン姿の男性が1人。

「うわ、テンプレ通りの山賊だ」

「ああん!？」

「柄も悪いなあ、って山賊だから当たり前か」

ある種の感動を覚える。

山賊は右手に切れ味の悪そうな大きい手斧を提げて、僕を見てニヤニヤ笑い出した。

「辺境の村に貴族の坊ちゃんとはツイてるぜ。たんまり金が手に入りそうだ」

え、貴族？どこにそんな人が？

キヨロキヨロと辺りを見渡すけど、そんな人は見当たらない。

ああ、貴族って僕の事か。やっぱりこの服一般的な服装じゃないんだよ、きつと。

ちよっと天然だった僕の行動を、山賊は素敵に勘違いしていた。

「残念だったなあ、お前の味方は誰もいないぜ？逃げ道も無いようだしなあ」

下卑た笑い方をする山賊。

あれが俗に言う悪い笑みかあ、僕には真似出来そうにないなあ。ともあれ、油断している今がチャンスだ。

1回だけなら奇襲も出来るし、上手くいけば退かせる事も可能だ。

——よし、落ち着け僕。絶対に成功させるぞ。

出来るだけ体を動かさないように意識しながら、少しずつ指先に感覚を集中させる。

さっきの練習の時よりも、強い熱と鼓動を感じる。

狙いは右手に持つ手斧。

しっかりと見据えて言葉を放つ。

「ファイアー！」

僕の掛け声と同時に、山賊の右手に火柱が上がる。

でもそれは一瞬で掻き消える。

僕のように注視してなければ視界に赤いフラッシュが焚かれただけにしか見えないだろう。

そこから、更に動きが生まれる。

手首から先を失った腕が跳ね上がる。それまで支えていた重さが手首毎無くなった反動だ。

「うおあっ！？な、なんだこりゃあ！？」

跳ね上がった自分の腕の動きに、次いで自分の手首から先が消失している事に顔を驚愕で歪める山賊。
間髪入れず、僕は声を張り上げた。

「今のは脅しだ！大人しくしないと、次は命を失うぞ！」

声が震えなかった自分を褒めてやりたい。

だって、あんな、手首から先が無くなるとか思ってたし！

やだよお、グロいよお、威力高過ぎだつてば。

断面は炭化したのか真っ黒だし。

出血は無いみたいだから、遠目から見たら特撮の特殊メイクに……
ごめんなさい、無理です。見えません。

胃から上がってくる酸っぱい液に辟易しながら、僕は山賊を睨み付けた。

勿論視線は山賊の眉間に集中させる。じゃないと吐きそう。

対する山賊はまだ何が起きたのか理解出来ていないみたいで、目を白黒させている。

けど、僕がファイアーの魔導書を構えているのを見て、何が起きたのか悟ったようだ。

忌々しげに僕を睨み返す山賊。

「てめえ、舐めた真似してくれるじゃねえか！」

「っ、動くなつて！」

わざと魔導書を前に突き出すように見せる。けど山賊はそんなのお構いなしに、僕へ突っ込んできた。

「うわあっ!？」

「このガキ、ちょこまかと！」

「ちょ、ま、危ないって！」

僕の首くらいある太い腕を振り回す山賊。

それを不格好だけど何とか避けていく。

冗談じゃない、あんなの当たったら肋骨折れるって！

山賊は怒り狂って僕を殴り殺そうと腕を振り上げる。

顔や脇腹を拳が掠める度、新たな恐怖が湧き上がってくる。

初めの内はまだ機敏に反応出来たけど、怖くて体が言う事を聞かなくなってきた。

ぎりぎりの所で避け続けるけど、遂に壁際へ追い詰められた。

「手間掛けさせやがって。悪あがきもここまでだ！」

ヤバい、逃げたくても膝に力が入らない。

恐怖と疲労で地面に張り付いた両足が、がくがく震えだした。

いきなり濃厚に薫りだした死の臭いに僕の思考は恐怖一色に染まる。

左腕を振り上げる山賊。

眼前に迫り来るそれを、僕は混乱と恐怖に塗れた眼で見ていた。

『――ヒュン』

突然生まれた音と共に、山賊の左腕が左に逸れる。

僕の顔を掠めて背後の壁に当たった衝撃が背中を伝う。多分扉にはヒビが入ったんじゃないだろうか。

目に飛び込んできたのは山賊の肘に刺さった一本の矢。

さっきの音は矢の風切り音だったみたい。
不意に山賊の体が揺れて、そのままぐらつと地面に倒れ込んだ。
その側頭にもう一本矢が刺さっていた。

「大丈夫か、ユーリ君っ!？」

聞こえた声に、僕はやっと状況を理解した。
右へ振り向くと弓を持ったまま駆け寄るエアリイさんの姿が。
ああ、エアリイさんが女神様に見える。

「怪我は無いかい？向こうは片付いたから様子を見に来たんだが、
間に合って良かったよ」

ぺたぺたと僕の体を触って怪我が無いか確認する。
傷を負ってないのが解りほっとした笑みを浮かべるエアリイさんを見
て、僕の緊張の糸が切れた。
思わず両手を広げてエアリイさんに抱き付いた。

「エアリイさあゝん！」

「な、わ、ユーリ君っ!？」

「怖かったよお。殺されるかと思ったあ」

「だ、大丈夫、ユーリ君をイジめる奴は私が成敗したから!だから、
その、ユーリ君っ、落ち着いてくれ」

「大丈夫?怖いのではない？」

「あ、ああ、大丈夫だよ」

「えへへえ、エアリィさん強くて優しいから好き」

「うなっ!? ちょ、待ってくれ、ユーリ君っ!?」

「むぎゅう」

「……………っ!?」

……はい、落ち着きました。

さっきの僕は黒歴史なので忘れて下さい。忘れろ、忘れるんだあ! ……まあアレだよ、恐怖の反動でちょっぴり幼児退行しただけさ。

今じゃすっかり落ち着いて普段通りの僕に戻ったさ!

って言いたいけど、僕は今エアリィさんに背負われてる。

情けない事に腰が抜けて立てないんだ。

色々恥ずかしい所も見せちゃったし、エアリィさん呆れてなかったらしいなあ。

「ユーリ君、もっとしっかり掴まってくれ。落ちてしまうよ?」

「ああすいません。重くないですか?」

「軽過ぎるくらいだよ。まるで女の子みたいだ」

女の子みたい、かあ。

ちょっぴりショックを受けつつ、僕は前に回した手をエアリィさんに巻き付けるように動かしてしがみついた。

「きゃん!」

かわいらしい悲鳴と左手の掌に広がる柔らかく幸せな感触。
擬音で表すなら、もにゅっ、と言った感じ。

ちようと掌にぴったりフィットする大きさで、沈み込んだ指を優しく包む弾力性。

——これはまさしく、おっぱい！

って、幸せに浸ってる場合じゃない。

ただでさえ格好悪い所を見せてるのに、この上エロ魔神だなんて思われたらエアリィさんに嫌われちゃうよ！

慌てて手を退けようとするより一瞬速く衝撃が左手首を襲った。

『バリン！』

突然の衝撃に僕もエアリィさんも驚いて後ろに倒れ込む。

あ、エアリィさんの髪からいい香り。

思わずまったり仕掛けた僕の目に映ったのは、左手首の時計に突き刺さった鉄の矢。

液晶が割れ中部まで食い込んでいるけど、底部の板に遮られて僕の手首には傷一つ付いて無かった。

慌てて矢の飛んできた方を見ると、森の中で大柄な男が僕に弓を構えているのが見えた。

恐らく山賊の一味だろう。

僕達が無傷なのを見て次の矢をつがえ始めた。

——今の矢、エアリィさんを狙ってた？

結果的に僕の時計に命中したとは言え、それはイレギュラー。最初に狙ってたのはその奥、エアリィさんの心臓付近だ。

——アイツは、エアリィさんを殺そうとした？

僕の冷静な部分が早く逃げろ、って叫んでる。

エアリィさんを担いで物陰に走れと悲鳴を上げる。

でも、アイツが何をしようとしたのかを理解した時、僕はぶち切れた。

——許さない。

上体を起こしてアイツを睨み付けた。

頭から熱が全身に回って、燃えているような感覚が広がる。

アイツから僕を庇おうと動くエアリィさんを優しく抱き締めてその動きを封じる。

今なら全身に流れる魔力を感じられる。

アイツがつがえた矢が空を疾りながら僕の頭部へ向かう。

「ユーリ君っ！」

叫ぶように僕の名前を呼ぶエアリィさん。

鏃が僕の額数c mまで迫って、そのまま消失した。

なんの事は無い、鏃から順に熱で蒸発させてやっただけだ。

周囲に汗ばむ程の熱が広がり、一瞬で収束する。

僕の胸の辺りから見上げるエアリィさんは、今日の前で起きた事が理解出来ないのかポカンとした顔をしていた。

そっと抱き寄せ、長い耳に口を寄せて囁く。

「大丈夫、エアリィさんには傷一つ付けさせないから」

視線を外しアイツを睨み付ける。

今の芸当を見て分が悪いと悟ったのか、こちらを警戒しながら撤退を始めようとしていた。

逃げられるとでも思ってる？

エアリィさんを傷付けようとした報いは受けて貰わないとね。

出来る限り苦しんで死ぬような魔法がいいなあ。

暗い思考を巡らせていると、一つの魔法が脳裏に浮かぶ。

ある程度離れて大丈夫だと思ったのか、アイツは背を向けて駆け出す。

その背中へ落とすように、僕は呪詛を呟いた。

「ノスフェラート」

言い終わると同時、アイツの周囲に紫色の暗い炎が浮かび上がる。
人の頭程の大きさを持つ炎は五肢に喰らい付くようにアイツへ殺到

した。

叫ぶ間も与えられないまま、暗い炎が全身を喰い尽くす。
吸血鬼の名を冠するこの魔法は、死を与えながら『死』という安息を許さない。

永遠に近い時を掛けて少しずつ魂を喰らい、耐え難い苦痛を最期の時まで与え続ける。

しかも、喰われた魂は転生の輪廻には戻れず永久に失われるんだ。
不意に、腕の中で震える動きが生まれる。

視線を下げると、僕の腕に抱かれたままのエアリイさんと目が合った。

見上げる瞳にはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

——怖がらせちゃったかな？

出来るだけ優しく声を掛ける。

「エアリイさん、怪我は無いかな？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。ユーリ君こそ平気かい？」

「うん、僕は大丈夫。……良かった、エアリイさんが無事で」

ほっとした途端、強烈な眠気が襲ってきた。

そのまま後ろにパタッと倒れ込む。

少し赤みが差してきた青い空が広がっていた。

瞼を閉じる直前に浮かぶのはエアリイさんの事。

——情けない所もえっちな所も、怖い所も見せちゃったなあ。それでも嫌われちゃっても、エアリィさんが無事だったから……いっか。

色々悩みが増えました。

山賊騒動から2日。

とある理由で僕の精神力はガリガリ削れてきている。

1つは自分の責任というか、僕が受け止めなくちゃいけない事。

あの時僕は、僕の意志で、1人の人間を殺した。

それも正当防衛なんかじゃない。

小さな子供が蟻を踏み潰すみたいに、僕は人間の命を弄んだ。

単に殺した訳じゃない、僕が思い付く最も残虐な方法で殺したんだ。それを思い出す度、胃から酸っぱいものが上がってきて、胸の辺りが酷く病む。

——やっぱり、ゲームみたいには慣れないなあ。

ゲームの中なら襲ってきた山賊の身包み剥いで頭にプスプス弓矢撃ち込んだり、スタアアアアップ！してきた衛兵を沈静化した後で背後から斬りつけたりしてたんだけどなあ。

まだ魔法だったから良かったけど、もし剣なんかで殺していたら、手に残る肉を断つ感触に眠れない夜を過ごしていたハズだ。

異世界だから法で罰せられる事は無いけど、だからって割り切れるものでもない。

時折込み上がる酸っぱい液に辟易しつつも、どうにか折り合いを付けなくちゃ、とも思う。

ただ塞ぎ込むだけの暇が無い事は幸いかもしれない。……最も、それが僕の精神力を削り取っていくもう1つの理由なんだけど。

「どうしたんだい、ユーリ君？ 疲れているなら少し休むといい、それにユーリ君が望むなら……その、添い寝くらいならしてもいいよ？」

「ユーリ、お腹空いたの？ 私がクッキー食べさせてあげるね♪ それとも……口移しの方がいい？」

教会の居間で椅子に座る僕に、背後からエアリイさんがきゅっと抱き付き、膝の上に乗ったミナがむぎゅむぎゅすり寄っている。

エアリイさんは先日山賊騒動の時に取った僕の行動——偶然にエアリイさんの命を救ったパイタッチ——のせいで、何故か好感度が鰻登りになっている。

曰く、命の恩人だからって事だけど、エアリイさんも僕の命の恩人なんだけどなあ。

それを指摘したら『ふふっ、お揃いだね』なんて顔を朱く染めて言うもんだから、僕のHPは赤ゲージですよ。

どうやらこの世界のエルフ族は、命を救ってくれた人に一生尽くすらしい。

それも一族のしきたりじゃなく、遺伝子に刻まれた本能に因るものだとか。

以来毎日……といっても2日しか経ってないけど、エアリイさんは僕の側を離れようとしなない。

それを見たミナが対抗心を燃やして、僕に引っ付いて離れない。

流石にトイレに行く時とお風呂に入る時は付いて来ないけど、それ以外はずっと一緒。

加えておはようのキスとおやすみのキスをねだってきた。

余りにかわいかったから二つ返事で了承したのはナイショだ。

そんな訳で、今僕の後ろを付いて回るピク○ンが2人。

まあ2人共かわいいし癒されるからいいか、って思い始めた。

ただ、1つ問題が。

「……………じー」

正面から感情の読み取れない三白眼で僕を見据える少女。

シーナだ。

修道女らしく貞操観念がしっかりしてるせいか、僕がデレデレしてるのがお気に召さないようだ。

もっと健全な男女の関係を築いて欲しいみたいだけど、そもそも2人と男女の関係にすらなっていないし、この2人に抱き付かれて反応しないのは年老いた人だけだと思う。

それでも妹のミナと友人のエアリィさん、2人の恩人——僕自身に自覚はないけど——という事もあってか、余りキツくは言ってこない。

代わりに、じっと何か言いたげに僕を見据えてくるんだ。

シーナもかわいいから別に見られる分にはいいか、って最初は思ってたけどコレはなかなかキツイ。

「あの、シーナ？」

「なんですかユーリさん」

「……………なんでもないです」

取り付く島もない。

それも目が乾いて痛くなるんじゃないかってくらい僕を見ながら。若干怖いですヨ。

「シーナ君、そう目くじらを立てなくてもいいんじゃないか？」
「そうだよ、ユーリ悪い事してないよ？」

援護射撃をしてくれる2人。

その気持ちはありがたいんだけど、出来れば抱き付きながらは言わないで欲しい。あぁっ、シーナの僕を見る目が濁ってる！濁ってるよ！

誰でもいいからこの状況なんとかしてくれないかなあ。

そんな風に早くも他力本願な僕の願いが届いたのか、来客を知らせる鐘が響いた。

「あ、はい。すぐ行きます」

いつもの表情に戻して玄関へ向かうシーナ。

うん、やっぱりいつもの方がかわいいよ。

そんな事を考えてると、後ろから耳に熱い吐息を吹きかけられた。

「うひいあ!？」

「酷いなユーリ君、私にはその熱い目を向けてくれないのかい？」

そう言ってご自慢のCカップおっぱいの谷間に僕の頭を埋めるエア
リイさん。

むにむに、ふによふによ。

なにやら幸せな感触が首や後頭部を包み込む。

そして顎を僕の頭に乗せて凭れ掛かる。

いや、もうデレデレですねエアリィさん。

もう喋り方にしかクールキャラ残って無いですよ。

意識を背後に向けていると、胸元にもぞもぞした感触が。

見るとミナが僕のYシャツの中に潜っていた。

流石に先日 of 格好は恥ずかしかったので、今の僕の格好は無地の白Yシャツに濃紺のスラックス。

スラックスはぴったりサイズなのにYシャツはかなり大きめで、仕方なくダボっとさせて着ている。

袖も捲ってみたけど動きにくくて、なんでこのサイズなんだろうかと麻袋片手に悩んだけど、今ならその理由が解る。

「ぶはっ。にへへ、ユーリとみっちゃく♪」

2つ目まで開放したボタンの辺りから頭だけ出したミナと目が合う。僕のシャツの中に潜り込んで密着してるんだ。

確かにぴったりサイズだったらYシャツがパツツンパツツンになって苦しくなったただろう。ゆったりサイズだからミナがこうして入っても丁度良いくらいだ。

しかも今日は日差しが強いからみんな服は薄手。

ミナも薄いベージュのTシャツを着てるから、柔らかいふにふにや擦れると堅くなるさくらんぼの感触が直に伝わってくる。

——落ち着くんだ僕、落ち着くんだ息子。いつ如何なる時も平常心を保つのだ。

出来るだけ意識を逸らしながら必死にうろ覚えの般若心経を唱える。

と、ミナがくいつと体を伸ばして僕の唇を奪う。

一瞬で思考が止まった僕に、とろけるような笑みを見せるミナ。

「……にへへ、ユーリ大好き♪」

がらがらがら。どんがらがっしゃーん。ばりばりばり。きゅーん。そんな音を立てて僕の平常心は脆くも崩れ去った。

いやね、この素敵な天使を相手に平常心を保つだなんて土台無理な話なんですよ！

思わずむぎゅーっと抱き締めようとした所で、部屋の扉が開く。

「ユーリさん、あなたにお客様……」

「……あ」

一気に部屋の温度が氷点下まで下がった気がした。

○がつ×にち、はれ。

きょうは、おそとがはれてるのに、かみなりがおちました。

……ゴメンナサイ、取り乱しました。

いやあ、流星にシーナも我慢の限界だったみたいで遂に雷が迸ったね。

いつものように——これがいつもと表現されるのも問題な気がするけど——床に正座してシーナのお説教を受ける。

今回はミナとエアリィさんも正座だ。

シーナの後ろで所在無さに頬をポリポリ掻いている男の人も、余りの剣幕に口を挟めない様子。

「聞いているんですか、ユーリさんっ」

「は、はいっ！」

「あ、あの、シーナ君？」

「なんですかエアリィさん。お説教はまだ終わってませんよ」

「あうっ、い、いや、その」

「言いたい事があるならハッキリ言う！」

「は、はいっ！後ろの方が困ってますっ！」

「へっ？」

シーナの三白眼に気圧されながらも、背後を指差すエアリィさん。

うん、怯えた子猫みたいで保護欲をそそるけど、人を指差すのは失礼になるから止めようね。

慌てて振り返るシーナから見えないように頭を撫でてあげると、エアリィさんはくすぐったそうに目を細めた。

「ええっと、宜しいでしょうか？」

「あぁっ、申し訳ありません！すっかりお待たせしてしまって」

「いえいえ、とんでもない。……それでは、貴方がユーリ殿でしよ
うか？」

人懐っこそうな笑みを浮かべる男の人。

紫紺の髪の毛に眼鏡、細面で柔和な顔に全身から滲み出る苦労性の

オーラ。

あ、なんかこの人と友達になれそう。

灰色のローブを着てるし、学者か魔術師かもしれない。背格好は僕よりちょっと高め。……ちょっとだからね！

「はい、僕がユーリです。あなたは？」

「申し遅れました。私は魔術師ギルドの者でナカシユといいます。どうぞ宜しく」

そう言って腰を折るナカシユさん。

僕も慌てて頭を下げようとしたらナカシユさんに制される。

「そのまま構いませんよ。……今動いたら悶えますよ、きっと」

右を見ればお説教が終わったと喜んで立ち上がろうとしたミナが、顔を苦悶に歪めて倒れていた。

ああ、その表情もかわいいなあ。

なんかゾクゾクきそう……じゃない、アブナイ性癖に開花しそうだった。

ずっと正座してたから足の感覚無いなあ。

これで立ち上がったら間違いないで倒れて頭ぶつけるね。

目に涙を溜めてうるうると僕を見上げるミナ。

ああっ、ゴメンよミナ。僕にはどうする事も出来ないんだ。いや、よからぬ意味でならどうか出来るけど。そんな目で見上げたら襲っちゃうよ？……だから息子よ、お前の出番はまだ先だ。収まっていなさい。ハウス！ゴーホーム！

「どうも、お見苦しい所をお見せしました」

「いえいえ、こんなに素敵な方々に囲まれて羨ましい。……大変でしよう？頑張って下さい」

最後の方は僕にだけ聞こえる音量で喋るナカシユさん。

良い人だ。気遣いが心に沁みるなあ。

来客用の部屋に移ってまったりとお茶をすすりながらのお話。

教会が広いから部屋は有り余ってるんだ。

シーナとミナとエアリィさんは黙って僕とナカシユさんの会話に耳を傾けている。

ミナとエアリィさんの頭に真新しいたんこぶがあるのが痛々しい。げんこつ1発でお説教は無しにしてももらえたみたいだけど、エアリィさんまでげんこつ落とされるとは思ってたよ。

朝早くにミナが焼いてくれたクッキーをかじりながら、ナカシユさんに尋ねた。

「本題に入る前に幾つか質問したいんですけど、いいですか？」

「ええ、勿論。ただその前に1つお願いしたい事が」

「なんですか？」

ナカシユさんは頭をポリポリ掻きながら苦笑いを浮かべて言った。

「お恥ずかしながら、余り敬語には慣れていませんので良ければお

互い気楽に喋りませんか？」

——よっぽど頭の中が平和な人か、それとも凄腕の諜報員じゃなきゃ、こんなまったりした空気は出せないよなあ。

僕としては平和な人って考えて起きたいけど、初対面でこれだけ空気を緩ませるっていうのも不思議な事なんだよ？

横目で伺ってみるとエアリイさんだけがその事に気付いた様子で僕を見ていた。

まあエアリイさんがいれば大丈夫かな。

「うん、了解。ナカシュって呼べばいい？」

「ああ、それで構わないよ」

「じゃあ早速だけど、ナカシュ」

僕の言葉に身構えて背筋を伸ばすナカシュ。

……聞いたら多分、一気に脱力するだろうなあ。

僕の考えが伝わったのか、3人共ちょっぴり口の端がニヤニヤしてる。

「魔術師ギルドって何？」

「……は？」

その反応がツボに入っただのか、シーナは顔を背けて口元を手で隠し

ぶるぶる震えている。エアリィさんは頑張ってお茶を口に運ぶけどカップがカタカタ震えている。ミナに至っては普通に座ってるように見せてテーブルの下に左手を伸ばして僕の膝をバシバシ叩いてる。いやまあ、僕に取っては当然の疑問なんだけど、みんなにしてみたらギャグにしか思えないんだろうなあ。

そう言えばシーナはギルドについては説明してくれなかったなあ。まあシーナも関わる機会がほとんど無いみたいだし。

気を取り直したナカシュが説明してくれたのはこんな感じ。

魔術師ギルドは、この大陸だけじゃなく他の大陸にもあるかなり大きなギルド。

細かい所は各大陸で違うけど、魔術を悪用させないよう魔術師をまとめて、みんなで便利な魔術や人の役に立つ魔術を研究しよう、ってギルドらしい。

有事の際、魔術師ギルド所属の魔術師は市民の救出や怪我の治療、瓦礫の撤去作業なんかをするけど戦争に参加したりはしない。

ギルド所属の魔術師には毎月の手当てと国営の宿泊施設やギルド直営の魔導書店なんかで多少割引してもらえる。

と、そこまで聞いてちよっとした疑問が湧いてきた。

「ナカシュ、魔法と魔術と魔導って何が違うの？」

「ああ、簡単な事さ。魔術は魔力を使って火を出したり水を出したりする事、魔法はその水を出す時に用いる理——つまり方法、魔導は魔力をどう扱えば魔術を行使出来るかの指針。それを理解してきっちり分けて話すのはギルドの老人達しか居ないけれど」

「じゃあ魔法使いや魔術師や魔導師も別物？」

「その通り、魔術師は行使出来る魔術の種類が豊富な人、魔導師は扱える魔力が普通よりも多い人、魔法使いはちよっとした魔術が使

える人だね。基本的には魔法使いが成長して魔術師か魔導師になる
って思ってくれればいいよ」

なるへそ、雑多な呼び方じゃなくちゃんと分類されてたんだ。

さて、諸処の疑問が解決された所で、いよいよ本題に入るとしよう
か。

「ねえ、ナカシュ。僕を尋ねてきたって事だけどさ」

「ああ、その事なんだけどね、実は」

「なんで僕がこの村に居るって知ってたの？」

話を進めようとするナカシュを遮って、僕は言葉を続けた。

そう、一番気になってたのはそこなんだ。

僕がこの世界に来てからまだ一週間も経ってない。

なのにナカシュは僕の存在を知っていた。聞けばナカシュは首都『
リレジー』から来たって言うし。

リレジーからここタマタ村までは早馬で1日、普通の馬車でも3日
掛かる。

考えられるのは僕の事を村長さんが「こんな人を保護しましたよ」
って届け出たのを、どんな人か確認しに来たって所だろう。

でもそれなら王国の衛兵や警備隊の人が来るハズだし、わざわざ魔
術師ギルドから人を寄越す理由が解らない。

僕の視線を受け止めて、ナカシュは事も無げに話し始めた。

「こちらの村長から報告を受けてね。怪我をした旅人を1人保護し
た、と。別にそれだけなら警備隊の人達に任せておくんだけど、上

司の気紛れで派遣されてね」

「気紛れ？」

「村長の報告書を読み上げた新入りが、突然現れただなんて転移でもしてきたんスカねえ、なんて言うもんだから上司が興奮しちゃって。事実関係を確かめて事の次第に因ってはギルドに勧誘、いや拉致してきなさい！と言いついてね。それで私が派遣されて来たんだよ」

うわあ、また滅茶苦茶な。

上司の言う事も滅茶苦茶だけど、それに従ってここまで来たナカシユも色んな意味でひどい。

ああ、だから苦労性なオーラが出てたのか。

しかしこれは参ったなあ、と僕は頭を抱えなくなる。

確かに突然現れたのは事実だけど、聞く限り転移魔法はかなりの難易度らしい。もしかしたら伝説級の魔法かもしれない。

そんな中「実は転移しちゃって」なんて言おうもんなら、間違い無くその上司のオモチャにされる。

気は進まないけど、僕は嘘を吐く事にした。

「まあ、ある意味転移はしたみたいなんだけどね」

僕の言葉に顔色を変えるエアリィさん。

大丈夫、と1つ頷いて言葉が続ける。

「元々僕は拾われっ子でさ、爺ちゃん――僕を育ててくれた人が魔術の研究しててね。多分術の失敗で転移というか、吹き飛ばされた

んだと思うよ」

「術の失敗で、という事はかなり大掛かりな術を？」

「らしいよ？」

「随分と曖昧に喋るね」

「僕は魔術について余り知らないし、もっぱら爺ちゃんの身の回りの世話をしたからね。得意なんだよ？鳥を焼いたり野菜を炒めたり」

得意と言いつつ敢えて料理が上手そうに思えない言い方をする。

事実そこまで料理する訳じゃないし。

けど、こういうちょっとした搦め手が後々効いてくるんだ。

「ならどの辺りに住んでいたとか、どうやって戻るのかとか、何か当ては有るのかい？」

「全く。住んでいたのは暗い森の中だったし、爺ちゃんに聞いた事も無かったなあ。おかげで帰り方も解らない状況だよ」

「余程君のお爺さんは変わった方のようなだね。だけど失敗の結果とはいえ1人でそれだけの術を作ろうと言うんだから、実力も折り紙付きなんだろう。どうだい、魔術師ギルドの方で君のお爺さんを探してみようか？君さえ良ければ魔術師ギルドで君を保護してもいい。その方が早く戻れるかもしれないよ？」

きたか、と身構える。

僕の話を全部信じた訳じゃないだろうけど、仮にそんな人がいるなら是非とも接触しておきたいハズ。

それに僕の身柄を魔術師ギルドに置いておけば、将来僕を迎えに来る時に会える。

僕には魔術師ギルドからの保護という形で給金や情報提供が入るから、今考えられるデメリットは皆無に等しい。

さあ、どうやって切り抜けるか。

このやり取りにちよつとワクワクしながら、僕は口を開いた。

「探してもらえるならありがたいけど、魔術師ギルドはなんか怖そうだね」

「おや、なんでそう思うんだい？」

「だって人間を1人拉致してこい、だなんて普通に言えちゃうような人が上司なんでしょ？ そんな人身売買みたいな事を平然と言えちゃうなんて、やだよ」

軽く身震いしてみせると、ナカシュはしまった、って顔を歪めた。上司も冗談で言ったと説明しても不安と不信が残りそうな反応を見せる僕に、なんて言えいいのか解らないようだ。

——僕、ひよつとして役者になれるかも？

妹に付き合つてよくごっこ遊びをした経験がこんな所で役に立つなんて。

妹よ、お兄ちゃん俳優デビューしちゃうかもしれない。

あ、妹の事思い出したらちよつぱり涙が滲んできた。

いけないいけない、心を強く持たないと。

ただナカシュは僕の涙を勘違いしたのか、慌てて取り繕い始めた。

「ああ、無理にとは言わないよ。魔術師ギルドには変人が多いから、私の方から余りユーリには近付かないよう言い含めておくから」

そう言ってチラリと左右を伺う。

何を……ああ、なるほど。

テーブルの左では僕の涙を見たエアリィさんが刺すような視線を向けて、僕の右ではミナがほっぺを膨らませて睨んでいる。

ミナかわいいなあ、そのほっぺにキスしちゃうぞ？

邪念を振り払いつつ、僕は次の一手を指す。

「最初に目が覚めたのがここだし、余り場所を移さない方がいい気がするんだ。ほら、山で遭難した時とかも無理に歩き回らないでその場にいた方が早く発見されるって聞くし」

「それはそうかも知れないけど」

「それにさ」

なおも食い下がるナカシュに奥の手を使う。

といってもやる事はそんなに無いけど。

ミナの体をひよいと持ち上げ、僕の膝の上に座らせる。

勿論後ろからむぎゅーのおまけ付きだ。

ミナはちよつと驚いたみたいだけど、僕の意図を読み取って甘えてくる。

「好きな子の側にいたいなあ、って思うのはいけない事かな？」

その言葉にぽかんとするナカシュ。
毒気を抜かれたのか力無い笑みを浮かべて頭を振った。

「……解った、一応こちらでもそのお爺さんの事は調べてみるけど、必要以上に干渉はしないよ。上司には上手く私から伝えておくよ」

「ありがとう、ナカシュ」

「気にしないでいいよ、慣れてるから」

そう言ってナカシュは席を立った。

玄関まで見送りに行って、トボトボ歩くその背中を見ていると何故か悪い事をしたような気持ちになる。

——多分、上司の人に振り回されてるんだろうなあ。

話を聞く限りやんちゃな幼なじみタイプだね、上司の人って。

ツインテールで縦ロールなんだろうか。

居間に戻ってソファアに腰掛けて脱力する。

ふひー、と大きく息を吐いたら一気に全身がだるくなった。

やっぱり慣れない虚勢は張るもんじゃないね。

来客用の部屋の後片付けを終えたミナがとことこやってきて、だらしなく体を投げ出している僕の上にぼむっと乗っかる。

紫銀の柔らかな髪を優しく撫でると、甘えるように抱き付いてきた。

「さっきはゴメンね、ダシに使っちゃって」

「ううん、私の体も心もユーリのものだから、好きに使っていいん

だよ？」

お待ちなさいお嬢さん、その台詞は非常に危険です。

そんな幸せそうにとろけた顔をしちゃいけません！僕の理性が壊れちゃうでしょ！

と、頭に2つの柔らかい感触が。

上から肩に手を回され抱き締められる。

「ユーリ君、私の事も忘れないでくれよ？私だって君になら全て奪われても構わないんだから」

「むー、エアリィさんはユーリをゆうわくしちゃダメ！」

「おやおやミナ君、独り占めはズルいよ？」

「エアリィさんは私より大人なんだからガマンだよ」

「ならガマンした分ミナ君が寝てから、私はユーリ君と大人な時間を過ごそうかな？」

なにやらバトルが始まったけど、2人にはケンカして欲しくないなあ。

しかも原因が僕って……いやあ、異世界トリップして良かった。

しみじみ思いつつ、僕は体を起こしてミナを左手で抱き寄せ「わあっ」エアリィさんの右手を掴みぐるっと回すようにして「うなっ」

腰元の辺りに座らせる。

驚いた声を上げる2人の頭を撫でながら、ゆっくり諭すように言った。

「2人ともケンカしちゃうだよ？一緒に仲良く笑ってるのが一番い

いし、2人が仲良くしてるのを見てると、僕も嬉しいからね」

「にへへ、はぁい」

「ユーリ君にはかなわないな……ふふっ」

うんうん、お兄さん聞き分けのいい子は大好きですよ。

え？ 解決方法がヘタレ？

ハハッ、何を今更。

本当は自分の気持ちを整理して、本気で2人の気持ちに向き合わないといけない事くらい、解ってるつもり。

だけど僕にはそんな度胸も甲斐性も無いし、なにより、

——愛しいって気持ちは解るけど、好きってどんな気持ちなのかな……。

恥ずかしながら齢15にして、まだ初恋の1つも経験してない。

正直2人が僕に向けてくれる好意も、イマイチ実感が湧かないっていうか、なんだろう。自分でもよく解んないや。

えっちな気分になる事はよくあるけど、それで突っ走って傷付けちゃうのは絶対に嫌だし。

……冷静に観察したら僕って本当にヘタレでチキンだなあ。

おっと、また思考が沈みがちになってたよ。

ちょっと下がった気分をごまかすように2人の頭を撫でる。

「ユーリさん」

びくうつ！と僕の体が跳ねた。

ギギギと錆び付いたロボットみたいな動きで振り返ると、そこには聖母のような微笑みを浮かべたシーナが。

ああっ、微笑みは素敵なのに、おでこに血管浮き出てるよ！バツテンが、バツテンが浮き出てる！

「そういえばまだユーリさんはお説教の途中でしたね。……ミナ、エアリイさん、ちよつとユーリさんを借りていきます。文句は無いですよね？」

夜叉のような凍える声に顔を青くしてブンブン首を振る2人。

僕は首根っこを掴まれて、廊下を引きずられて行く。

勿論BGMはドナドナだ。

「あ、あの、シーナさん？」

「ふふふ、なんですかユーリさん？階段を上りますから、喋ると舌嚙みますよ」

「ちょ、それは死んじゃう、死んじゃうよ！？だ、誰か、ヘルプミ
ー！」

やたら広い教会の中に僕の悲鳴だけが虚しく響いた。

後で村の子達に聞いたら、この時の叫び声は教会の七不思議に数えられていて、言う事を聞かない子は連れて行かれちゃうって母親に言われたらしい。

以来、子供達は母親の言う事をよく聞くようになったとか。
めでたくないけど、めでたしめでたし。

チャンチャン。……いや、本当に怖かったです。

お勉強の時間、魔法編。

激動の午前が過ぎ、お昼ご飯を食べ終えまったりとしたティータイムへ。

今日のお昼は僕が作った。

といっても簡単な蕎麦だけだね。

四次元麻袋から出て来たのは蕎麦の袋と鳥の胸肉、ネギ、七味、めんつゆ、それと便座カバー……じゃなくて、ぴったりサイズのYシヤツ。

なのであのタイミングで出て来たのかさっぱりだけど、取り敢えず着替えてレツクツキング。

みんな蕎麦を見るのが初めてみたいで興味津々だったけど、温かい蕎麦を気に入ってくれたようであれよあれよという間に5人分茹でた蕎麦がつゆ諸共綺麗さっぱり無くなった。

ミナは初めての蕎麦に舌鼓を打って大満足、エアリイさんは猫舌なのかふーふー冷まして食べていた。

蕎麦を食べるエルフ……なんだろう、すごい光景だ。

一番蕎麦が気に入ったのはシーナで、僕よりも食べていたのにはちよっとびっくりした。

七味もたっぷり振り掛けてたし、案外辛党なのかな？

機嫌も直ったようでなによりだね。

食後のティータイムには蕎麦茶をご馳走。

これも気に入ったみたいで、珍しくシーナのにへらって顔が見れた。うん、普段見れないだけあってすごくかわいい。

ミナは村の子供達と村長さんの所で勉強会、エアリイさんは狩りをしに森へ入って行った。

僕はというと、シーナとマンツーマンで魔法についての特別授業。今の所知ってるのファイヤーとライブだけだしね。

「では授業を始めます」

「シーナ先生、よろしくお願いします」

「解らない所があったらどんどん質問して下さいね」

蕎麦茶片手にご機嫌なシーナ。

いつもより若干ノリノリだ。

「まず、魔法には大きく分けて3つの種類があります。ユーリさん、なんだと思いますか？」

おおう、いきなり当てられた！？

何だろうね、魔法の3つの種類って。

パツと思いつくのは攻撃、回復、補助辺りかな？

元気良く手を挙げてシーナに答える。

「はい、シーナ先生！」

「はい、ユーリさん」

「攻撃、回復、補助の3つだと思います！」

「なるほど……そうきましたか。確かに役割で考えるとそうなりますね」

ありゃ、って事はハズレか。

んー、シーナが考える別の答えで種類が3つあるやつ……。

何だろ、解らないや。

あ、もしかしてこの世界では3つだけ僕にしてみたら3つじゃないとか？

例えば……そう、魔法の属性とか。

「はい、シーナ先生」

「はい、ユーリさん」

「魔法の持つ属性……かな？」

「大正解です、どんどんぱふぱふ」

拍手してくれるシーナ。

前に教えたどんどんぱふぱふがこんなに破壊力あるとは思わなかった。

余りのかわいさに鼻血が出そうになる。

というかここまでテンション高いのは蕎麦茶のおかげか。

恐るべし、蕎麦の力。

「では更に問題です、その3つの属性とは何でしょう？」

そう言って僕の顔を上目遣いに覗き込むシーナ。

ああもう、なんでこの姉妹はこう色々とクリティカルなんだ！

邪念混ざりまくりな煩惱ヘッドで答えを考えてみる。

多分だけど、魔法の名前がFEちっくだから理、光、闇なんじゃないかなあ。

「理、光、闇の3つ？」

「すごい、正解です！ひよつとしてユーリさん知ってました？」

「合ってたんだ。たまたまだよ、僕の世界にある物語に確かそんな表現があったなあって思い出してさ」

「へえ、今度その物語教えて下さいね？こほん、ユーリさんが正解した通りこの世界の魔法は理、光、闇の3つで構成されています。内訳は解りますか？」

「うん、なんとなく。ファイヤーが理魔法、光魔法にはライブも含まれるのかな？」

「その通りです。光魔法には変則的ながら治癒や解毒、精神への干渉も含まれています。理魔法は解りやすいですね、火や水、雷に風なんかが該当します。闇魔法はちよつと難しいんですけど……」

言いにくそうに言葉を区切る。

イメージからして禍々しそうだし、聖職者のシーナにはちよつと苦手意識もあるのかな？

この世界でいう闇魔法に、先日僕が使ったノスフェラートも分類されるかな。

だけど闇魔法って分類がそもそも間違ってるよね。その辺りをシーナに提言してみた。

「闇魔法の位置付け、ですか？」

「うん。そうだなあ、例えばさ、シーナは闇ってなんだと思う？こんな感じ、って程度で良いから言ってみて」

「そうですね、暗くて冷たくて……怖いですね」

ちよつと首を傾げて考えるシーナ。

その仕草も姉妹揃ってとってもかわいらしい。

癒やされながら、僕はシーナの答えにちよっぴり肩を落とす。

——やっぱり、そんなイメージかあ。仕方ないって言えばそうなんだろうけど。

魔法を使うにはイメージが大切だ。効果は個人の力量に左右されるだろうけど、発揮される効果の方向性は術者が思い描く必要がある。解りやすく言えば、ファイヤーで出す火の勢いは魔力が関係するけど、ファイヤーで出た火が『どんな風に燃えるか』は自分のイメージに左右される。

使う魔法をどう捉えるかで、魔法の効果は変わってくる。

まあ何が言いたいのかハッキリ言うと、あの時僕が使ったノスフェラート、あれを僕は闇魔法として使ってない。

つまり、僕はこの世界の法則を無視した魔法を使った事になる。

どうやって、何を、どのように、使ったのか。

多分、僕とシーナの捉え方の違い——闇に対するイメージだけに止まらない相違——に、ヒントがあるんじゃないかって思う。

そんな漠然としたモヤモヤを抱えて、僕は口を開いた。

「僕の闇に対するイメージ……考え方は、シーナとだいぶ違うね」

「ユーリさんはどんな風に考えてるんですか？」

「僕思う闇は……暖かいよ」

「暖かい？」

ぽかんと呆けたような顔をするシーナ。

そりゃそうだろう、自分が思っていたイメージとほぼ180度違う

答えが返ってきたんだから。

「シーナは闇を考えた時、光の対極にあるものって想像したんじゃない？」

「ええ、だって光と闇は相反するものなんじゃ」

「そこから変えてみよっか」

「ふえ？」

「まず光の対極にあるのは闇じゃない。光の反対側にあるのは、影なんだ」

「影……ですか？」

「そうそう、光があるから影が出来るし、影があるって事はどこから光が差してるって事だよね？」

「なるほど、言われてみればそうですね。でも光と相反するものが影なら、闇って何なんですか？」

よしっ、食い付いた。

知識や発想を教えるのに一番の近道は、疑問と興味を持ってもらう事。

それが出来たら、後は互いの気が済むまで持論や疑問をぶつけ合えば良い。

「それなんだけど、僕は『闇』っていうのは万物の祖……全ての母親なんじゃないかな、って考えてるんだ」

「母親？」

「そう、例えば人間はどうやって生まれてきたのか、考えた事はある？」

「え、それは神様が人間をお作りになったんじゃないんですか？」

「修道女のシーナらしい答えだね。それも答えの1つだと思うよ」

「答えの1つ、ってユーリさんの考えは違うんですか？」

「僕の世界では神様を持たない人達も多くてね」

僕の言葉に驚いた顔をするシーナ。

一神教が世界に広く布教されているこの世界じゃ確かに信じられない事だろうなあ。

「そうだなあ、花を咲かせようと考えた時に、種を植えるよね。僕の世界の研究者は、全ての生物は種で殖えるって考えたんだ」

「種、ですか。私達人間も種で？」

「うん、肉眼では見えないけどね。詳しく説明すると混乱しちゃうから、概念的に種のようなものって思ってくればいいよ。その小さな種で人間が殖えるとして、生まれてくる種は誰が作ったんだらうね？」

「それは神様じゃないんですか？」

「うーん、難しいかもしれないけど一旦神様の事は忘れよう。神様以外で、何だと思う？」

「神様以外ですか……やっぱり親でしょうか」

「よくできました、その考え方が出発点だよ。じゃあその親は誰が生んだんだろう」

「そのまた親ですね」

「そうだね。じゃあそのまた親、更にその親……辿っていったら、一番最初の親は誰になるんだろう？」

そこまで喋って、僕はカラカラの喉にすっかり冷たくなった蕎麦茶を流し込んだ。

神様というジョーカーを使えなくて、シーナはうんうん悩んでいる。僕自身も、この先を上手く説明出来るか解らない。

妹は感覚で理解してくれたけど、論理で納得しようとした両親は最期まで理解出来なかった。何せ説明する側の僕も曖昧な感覚で、こうなんじゃないかって勝手に解釈してるだけだし。

なかなか難しいな、って思ってたらしーナが不意にぱっと顔を上げた。

「ユーリさん、ひょっとして……その最初の親が生まれる前は、何も無かったんじゃないですか」

「おおう、よくそこまで辿り着けたね!？」

正直、神様を信じてる人に、僕の世界の知識無しにその発想が出来るとは思って無かった。

中学で習うレベルの地学を知らない人に説明するのは難しいしね。

「僕達の世界では、最初には何も無かったっていうのが常識というか定説なんだ。ある時、何らかの理由で何も無かった所から、生命が、世界が誕生した。その何らかの理由の1つが」

「ユーリさんの世界の神様、ですか？」

僕の言葉を継いでしてやったり顔のシーナ。

先に言われちゃったなあって悔しい反面、僕はシーナの柔軟な発想力や頭の回転の早さに驚いていた。

実はシーナって天才なのかも。

もしかしたら僕の考えを解ってもらえるかな？なんて考えてちよっ

とワクワクドキドキしながら、僕はわざとらしく咳をした。
ここまでは色んな学者や本から得た知識を披露してただけ。
ここからは僕自身の、僕だけの言葉で説明しなきゃ。

「ここからは僕の想像っていうか妄想なんだけど、何も無かった所に『得体の知れない何か』が世界を作ったんじゃない、そもそも何も無かったっていうのが間違いないかなって、僕は考えるんだ」

「えっと、どういう事ですか？」

「物質的な意味では、本当に何も無かったんだと思う。光や熱、その他思い付くもの全て。ただ、精神的な意味では、何かが存在していたんだと思う」

「精神的な何か……幽霊みたいなものですか？」

「うん。何も無かった場所に神様みたいな存在が世界を作り出したんじゃない、『何も無い』っていう存在が自らの意志で世界を生み出したんだ、って僕は思うんだ」

そこまで聞いて、シーナはあっと声を漏らした。

どうやら僕が言いたい事に気が付いたみたい。

本当に賢いなあ、と嫉妬する所か感心しちゃったよ。

「つまりユーリさんは、その何も無い存在を『闇』って考えているんですね」

「大正解。正解した優秀なシーナには後で豪華商品をプレゼントしちゃおう」

「わ、ありがとうございます」

正解した事に喜ぶシーナ。
でも突然怪訝そうな顔をして僕に言った。

「ユーリさんの闇に対する捉え方は解りましたけど、なんで突然そんな事を？」

いやあ、流石シーナ。そこまで解っちゃうかあ。

……いや、多分誰でも気付いたよね。

本当はエアリィさんもある時に言った方が良いんだろうけど、先に一般人代表のシーナの反応を見ておきたい。

今のエアリィさんだったらミナみたいになんでも受け入れてくれそうだし。

いや、受け入れてくれるのは大変ありがたいんだけど、シーナみたいに僕に対してフラットな感情を持つてる人の意見を聞いて置かないと後々危ない事が起きそうな気がする。

また波紋を呼ぶ事になるんだろうなあ、ってどこか他人事のように感じながら僕は爆弾を投下する覚悟を決めた。

「こないだの山賊騒動の時にさ、僕ファイヤー以外の魔法使ったんだ」

「そうなんですか！？2人共話してくれないから、何かあったのかなとは思ってましたけど、よく即興で出来ましたね？」

「まだ驚くのは早いと思うよ……」

「え、何ですか？」

「いやいや、なんでも。それで山賊相手に多分この世界の闇魔法を使ったんだけど」

「や、闇魔法を使ったんですか！？難易度も高く扱うのに初歩のもので数年かかるのに！」

「シーナ、落ち着いて。ここからが一番大切な事だから」

逸るシーナをどうにかなだめて、この日一番の爆弾をポイッチョした。

「……実はそれを使う時、僕は闇魔法として考えてないのにそれが使えたんだ」

「……はい？」

「この世界ではファイヤーを使うにしても、『理魔法のファイヤー』って理解してないと使えないでしょ？」

「ええ、そうですね。……え？」

「って事はさ、僕がいくら頑張っても闇魔法のライブや光魔法のファイヤーは使えないハズだよな？」

「その通りですね。え、え？」

「ゴメン、この世界に存在しない魔法使っちゃった♪てへぺろ」

舌をちよつと出しておでこに手をぺちんと当てる。

こらそこ、面と向かってかわいくないとか言わない！

……や、かわいって言われてもそれはそれでシヨックだけどさ。

シーナは頭に？を4つくらい浮かべてたけど、徐々に顔から表情が消えていく。

そしてゆつくりと目が大きく開かれて、もうこれ以上はって所で突然立ち上がって悲鳴のような声を上げた。

「え、あ、それ、えっ、な、あああああああああつ!？」

うん、とっても素敵にパニックってるね。

こういう時は下手に刺激しないで本人が落ち着くまで放っておくに限る。

……決してヘタレてる訳じゃない、うん。だってカップやお皿割れちゃったら危ないし。

まったり蕎麦茶をすすって、シーナが落ち着くまでしばらくティータイムを満喫した。

「うう、恥ずかしい所をお見せしました」

「いやいや、見た事無いシーナの一面を見て楽しかったよ」

はうっ、と小さくなるシーナ。

顔を真っ赤にしつつも、持ってる蕎麦茶は手放さない所がちょっぴりおかしい。

ただまあ、シーナとも話し合ったけど新しい魔法を使えるようになったのは極力ナイシヨにしておく事にした。

エアリィさんは僕が魔法使った時に一緒にいたから話すつもりだけど、ミナには黙っていようと思う。

もしかしたら、それを知ってるせいでミナが危険に晒されるかもしれないね。

「それにしても、シーナがあんなにびっくりするとは思わなかった」

「驚いて当然じゃないですか！あんな事突然言われたら誰だってびっくりしますよ！」

「あはは、そうかもね。でもあわあわしてるシーナもかわいかったよ」

「……わ、忘れて下さいっ、思い出しちゃダメですう！」

空になったカップを置いてぶんぶん腕を振り回すシーナ。

ゴメンゴメン、と頭を撫でたら真っ赤になって動きが止まる。

「そっ、そんな事してもごまかされませんかね！？」

「困ったなあ、どうしたら許してくれる？」

「……もうちょっと、撫でてくれたら、その……いい、です」

ダメだ、なんかもうかわいすぎる。

慣れない真面目モードで話したせいか、反動でものすごい甘えたくなってきた。

耐えきれなくなった僕はシーナをお姫様抱っこしてソファに座った。

「え、あ、あのっ、ユーリさん！？」

「ああ、気にしないで。かわいいシーナに触れたくなっただけだから」

「かつ、かわ……！？やっ、ダメです、恥ずかしいっ」

わたわたと暴れるシーナを膝の上に座らせて、優しく後ろから抱き

締めた。

あ、髪の毛から良い匂いがするなあ。

くんかくんかすーはーすーはー。

……うん、堪能した。

シーナったら耳たぶまで真っ赤にして、恥ずかしがり屋さんなのか？

ちよっぴりイタズラしてみたくなった僕は、その真っ赤な耳たぶを甘噛みしてみた。

「ひゃうっ！？あっ、やあっ、あっあっ、んううっ」

やわっこい耳たぶをはみはみする度に、シーナの体がぴくぴく跳ねる。

面白くなって、僕は耳たぶを甘噛みしつつ、頭を優しく撫でてあげる。

「んやあっ、ユーリ、さんっ、あっ、それダメっ、ダメですう、ふやあ、あっ、ああっ、やあ、私っ、ばかになっちゃいますうつ、ふああっ」

小刻みに震えていた体が一際大きく震え、くてっと力無く僕へ凭れ掛かる。

潤んだ目は虚ろで、時折小さく体が跳ねる。

——あれ、これってかなりえっちくない？

意識した途端、下腹部に血液がすごい勢いで流れ込んだ。
ま、まずい、落ち着け息子、スタアアアアップ!?

しかし願い虚しく、おあずけばっかりだった息子は僕の言う事なんか聞かずにすたんだっぷ。

ふりふりと揺れるシーナのお尻の間で少年の自己主張を始めた。

「ふわあ……ユーリちゃん、なんだかカタイの当たってましゅ……。
なんでしゅか、これえ……。?」

絶頂の余韻なのか、呂律が回らないシーナがお尻を振って何が当たっているのか確かめようとする。こっ、これはまずいっ!
柔らかなお尻の感触がとっても気持ち良い。

「ちよっ、待ってシーナっ!?!」

「カタイのこしゅれて、きもちいいれしゅう♪」

なんて淫乱な。お兄ちゃんそんなえっちな娘は大好物ですよ!

違う、間違えた。

今のはナシでっ!

というかパニックってないで早くシーナをなんとかしないと、息子のHP的な意味でまずい。

ここはもう一度シーナを気持ち良くしてあげるしかない。

早速僕は耳たぶを口に含み、はむはむもにゅもにゅ甘噛みを始めた。
同時に頭を撫で回すのも忘れない。

「んやあ、ユーリちゃん、んあつ、しよれ、らめれしゅう、ふああ
っ♪」

腰をグラインドさせて妖しく身をくねらせるシーナ。

まるでゲームに出て来るサキュバスみたいに、綺麗でえっちな雰囲気
を纏ってる。

実は3人の中で一番えっちなんじゃないだろうか。

一番えっちな娘が修道女……シチュエーションだけでもご飯3杯い
けそうなアレだね！

なんて考えたりして、どうにか意識をラグビー部並みのタックルを
シーナのお尻にかまそうとする息子から逸らす。

「ふあつ、やらあ、わらひ、らめになっひやいましゅう、あつ、あ
あっ♪」

扇情的な声を上げるシーナ。

多分もうそろそろ限界なハズ。

ダメ押しに耳たぶをちゅううつ、って吸い上げる。

その瞬間、シーナは体を大きく跳ねさせて、ぐったりと脱力した。

余りの強い刺激に体が耐えられなくなって失神したみたい。

敏感で淫乱でかわいいなんて最高じゃないか。

シーナをソファアに寝かせて、風邪を引かないようにお腹に薄いタ
オルケットを掛けてあげる。

これでよし。

「……トイレ行ってこよつと」

さあ、僕の強靱な精神力に惜しめない賞賛を浴びせて！

あ、やっぱりいいや。

先にトイレ行ってくるから。

ふう、ただいま。

あの後起きたシーナにジャンピング土下座をして、なんとか許してもらった。

「ユーリさんはえっちです、けだものです」って涙目で言われてちよつとゾクゾクした……いえ、なんでもありません。

帰ってきたミナは何があったのなんとなく理解したみたいで、僕の耳に口を寄せて「私ならいつでもイイよ……？」って言ってきたのはびっくりしたよ。

えろえろ姉妹め、食べちゃうよ？

まあ後でご機嫌取りに蕎麦殻の枕とペットボトルに入った蕎麦茶を贈っておこう。

——まあ、なんだかんだでシーナとちよつぱり仲良くなれたかな？

閑話——忘れられた集落から。

あたたかい。

最初に感じたのは私を包み込むような温かさ。

優しくそっと回される腕に甘えて、耳を胸に当てると愛しい人の鼓動が、私の鼓膜を、脳を、そして心を揺らす。

彼に名前を呼ばれる度に、私の胸いっぱいには歓喜が広がり心が震える。

ほら、今も私を呼ぶ声がする。

「美由里」

声を聴くだけで、私の心がダメになりそうになる。

ずっと聴いていたい。ずっと触れ合っていたい。ずっとずっと、彼の側にいたい。

彼の手が私の頭を撫でる度、彼の指が私の髪を梳く度、体が、心が融けそうになる。

きっと、この世に生を受けた瞬間から、私の魂は彼を欲していた。彼になら全てを捧げてでも構わない。

私の体は彼に貪ってもらう為、私の心は彼に弄んでもらう為にある。

——だから早く、私の全てを奪いに来て。

そこで目が覚めた。

目に映るのはいつもと変わらない景色。

木と煉瓦で組まれた内壁に真っ赤な絨毯。

魔法の火が灯されたカンテラに照らされて薄く影が伸び、室内を明るく照らして出す。

私の目覚めと共に輝きだした魔法の火が、やや肌寒い室温を一気に常温にまで引き上げた。

枕元に置いた時計が朝の10時を示している。

魔力で動く自動式卓上カレンダーは最後の記憶から約半年先の日を映し出していた。

今回の休眠は短かったなあ、と大きく伸びをする。

ぼきぼきべきべき。

関節が酷い音を立てる。

「んー、快調快調。にしても随分と懐かしい夢を見たなあ。元気にしてるかな、お兄ちゃん？」

幸せな夢を思い返すと、にへらあってだらしく顔が歪む。

今日は朝から良い気分だ。

思わず鼻歌を歌いながらテーブルの上に置いてある水晶に目を向けると――、

「うそっ！？割れてんじゃん！え、えっ、いつ割れたの！？ってこうしてる場合じゃない、行かないと！」

慌てて布団を跳ね退け着替えを箆笥から取り出しパジャマを脱ぎ捨てる。

ちやつちやつと着替えて割れた水晶を片付け、急いで部屋を飛び出し

た。

あの水晶は『招きの水晶』って呼ばれるマジックアイテム。所謂魔具の一種なんだけど、ちょっと特殊な性能を持つてて普通の人には扱いにくい。

魔具は使用者が魔力を込める事で効力を発揮するけど、招きの水晶は使用者の想いを消費して発動するタイプの魔具だ。

逢いたいって想いを毎日込めて水晶を想いでいっぱいしたら、水晶が割れて想い人を呼び出す事が出来る。

普通だったら会いに行った方が早いし、相手の都合に関係無く呼び出すもんだからイマイチ使い勝手は宜しくない。

でも私にはこれ以上無い至高のアイテムだ。

なにせ本来なら二度と逢えないハズのお兄ちゃんに逢えるというチートアイテムだからね。

長い回廊を右に回ると1人の女性がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

背が高くスラッとしてモデルさんかってくらい足が長い。

それでいて体の要所は女性的な丸みを帯びていて悩ましげだし、胸は大きいし――ありゃFは間違いないわね。

切れ長で睫毛の長い赤い瞳と、腰まで伸びる長い緑銀のサラサラな髪の毛が相俟ってエキゾチックパンク……いや、少なくとも日本じゃないか。

まあ要約するとスゴイ美人な近所のお姉さん、って雰囲気だ。

私とお揃いの赤いローブを着てるけど、本当にお揃いなのか？ってくらい輝いて見える。

やっぱり素材が良いと服も違って見えるのね。

彼女も私に気付いたようで、甘い微笑みを浮かべて小さく手を振る。

「あら、ミューリちゃんおはよう。休眠してる間お話出来なくて寂しかったわあ。……って、あ、あら？待ってミューリちゃん、私そんなに早く走れないわよお」

上げた手をむんずと掴まえてそのまま駆け抜ける。

普段なら抱き付いて甘えたい所だけど、今は一大事。

お姉ちゃんに付き合ってばわばわしてたら日がくれちゃうよ。

迷路のように入り組んだ回廊を走りがてら、掻い摘んでこれからの事を話しておく。

「お姉ちゃん、起きたら水晶が割れてたの！」

「まあ、じゃあ遂にミューリちゃんのお兄さんがこの世界に？」

「そうなの、今から迎えに行くから長老に許可もらいに行くよ！返事は聞かないけどさ」

「でもそれって許可もらった事になるのかしら？」

「いいのよ、本人知らない間に抜け出して事後承諾にするより良心的でしょ？」

「わあ、ミューリちゃん優しいのね♪良い子に育ってお姉ちゃん嬉しいわ」

お解り頂けただろうか。なんちって。

この短い会話で充分解る通り、お姉ちゃんはちよつとのんびり屋で天然で良い人。

これで私達の中で一番頭が良い天才って言うんだからびっくりだよね。

何度目かの角を曲がると、やけに荘厳な雰囲気醸し出している扉が見えた。

お姉ちゃんの手を離し更に加速して、勢いを殺さずに両足で踏み切りドロップキック。

「たのもー！ー！」

「ぶべらぐあっ！」

思いつ切り開かれた扉にぶつかり何かが吹き飛んだ気がするけど気にしない。

ゴロゴロ転がって体勢を整える。

すくつと立ち上がって椅子に座って気ままにお茶を飲んでいた禿げ上がったお爺さんに言い放つ。

「という訳で、ちよつくら行ってくるわ！」

「ミューリちゃん、それじゃ誰も解らないわよお？ほら、長老固まつちやてる」

「そう？でもお姉ちゃんは解ってるからいいんじゃない？誰にも解らないのにお姉ちゃんだけ解るなんて、流石お姉ちゃん頭良い！」

「うふふ、ミューリちゃんに褒められちゃったあ」

わあい、と2人で仲良くハイタッチ。

……はっ！？いけないいけない、お姉ちゃんワールドに引き込まれちゃった。

お姉ちゃんと会話するところまでばわわしてくる。

と、さっき吹き飛ばされた衛兵のおっさん……ああ、いけない。綺麗

麗な言葉を使わないとお兄ちゃんに「めっ」ってされちゃう。衛兵の綺麗なおっさんが近付いてきた。

「待てミューリ、一体何処へ行くと言うんだ」

「決まってるじゃない、前世から結ばれていた愛しの伴侶の元よ！」
「何、遂に見付かったのか!？」

「そうなの、早く逢いに行かないとお兄ちゃん素敵で格好良くて優しくてフェロモンむんむんで一目見ただけで胸がキュンとなって思い描いただけで切なくなっただけで触れられただけでイっちゃいそうになっ
て、ああ、ああ！」

「悶えるなよ！」

「これが悶えずにいられますか!待っててねお兄ちゃん、すぐイクから！」

お姉ちゃんの手を掴み直して開け放たれたままの扉を駆け抜ける。
すべすべしてもちもちして思わず頬を擦り寄せたくなる感触だけど、
なんとかお姉ちゃんの手から意識を切り離す。

回廊を左へ左へ、時々右へ。

階段を駆け降り再びダッシュ。

引き摺られるようになりながら横を走るお姉ちゃんが思い出したように言った。

「ねえミューリちゃん、今向かってるのって転移門？」

「そうだよ!あれならお兄ちゃんの元へひとつ飛びだもん」

「でも私魔石持っていないわよお？」

「大丈夫、こんな事も有ろうかとコッソリ研究塔からちよろまかしてきたから！」

「あらあ、悪い子♪でも恋する乙女は止められないって言うし、今回は特別に許しちゃうわ」

「さっすが、お姉ちゃんは話が解るっ！」

階段を駆け降り人通りの多い通路を擦り抜けるように駆け抜ける。
みんな何事かとびっくりしてるけど、私とお姉ちゃんの顔を見て把握したらしく声援が飛んでくる。

「おっ、嬢ちゃん遂に恋人見付かったのか！」

「そうだよ！今から抱き締めてもらいに行くの！」

「よし、行ってこい！子供出来るまで帰って来るなよ！」

「ありがと、おじさん！」

「そうかい、やっとミューリちゃんにも春が来たんだねえ」

「ミューリお姉ちゃん、結婚するの？おめでと〜♪」

「ナギさんも遂に嫁に行くのかあ。ミューリ嬢ちゃんとも仲良くな
！」

「くうっ、ミューリちゃんとナギさんが嫁に行っちゃうなんて」

「ははは、めでたい事さ、泣くんじゃないよ！それにしてもあの2人を一度に嫁に迎えるなんて、婿殿は幸せ者だねえ」

「あらあら、皆さんありがとうございます」

「みんな、ありがと、ありがとうございます！」

暖かい声援に包まれて、ちょっとくすぐったい。

みんなが祝福してくれた分より、もっと幸せになるからね！

一足早い結婚式みたいになった回廊も通り過ぎ、いよいよ目的の扉が見えてくる。

同じようにお姉ちゃんの手を離して空中に飛び上がる。

「ファルコンキイイック！」

「ヌウウウイ！」

ワートホグに吹き飛ばされたマスターチーフみたいな声がしたけど気にしない。

今度はそのまましゅたつと着地を決める。

「10, 0! なんちって」

「きやあゝ、ミュージリちゃんカッコ良い♪」

わあい、と笑顔で2度目のハイタッチ。

吹き飛ばされてピクピクしてる転移門の管理人に、すちゃっと右手を上げてサムズアップ。

「そんな訳で、ちょっくら行ってくるわ！」

左手に握り締めた魔石を割ると、周囲に魔力の渦が出来る。

開放された魔力に反応して転移門が蒼く輝き、私とお姉ちゃんの体を光が包み込む。

右手でお姉ちゃんの手を繋ぎ、私は高らかに詠唱を始めた。

「開け、空間の門よ！私とお姉ちゃんを望むがまま、愛しのお兄ち

やんの元へ運べ！レッツ転移！」

眩い光が視界を埋め尽くし、空間が弾けるように歪んで、私とお姉ちゃんは空間を飛んだ。

「しかし、ミューリにあそこまで慕われるとは如何程の人物だったのか。それとなく同情もするが」

ふう、と溜め息を吐き出して走り去った廊下を見詰める。

と、先程まで動かなかった長老が微かに身動ぎした。

矢張り長老ともなれば何が起こるのか予見出来ていたのだろう、動じず黙って送り出してやるとは流石長老。

俺もいつかは長老のようにどっしりと構えた大人になりたいものだ。

「ふわぁーあ、ちよっとうたた寝してしもうたわい」

「って、寝てたんかい！」

「ほ、どうしたんじゃロージ？何かあったんかいのう」

背伸びして骨を鳴らす長老。

アンタが寝てる間に嵐が来たのさ、とは言えずに深い溜め息を吐くしか無かった。

閑話——忘れられた集落から。（後書き）

今回はちよつぴり短いです。

それと前回のお話にはなんちゃって科学が満載です。

学校とかで話したら黄色い救急車を呼ばれるので注意が必要です。

ニート脱出の第一歩。

ぴよぴよぴよ。

かわいらしい声に導かれるように、枕元へ手を伸ばす。
手探りでスイッチを探し当てぽちっと押すと、耳をくすぐっていた
かわいらしい声が途切れる。

——朝かあ。

ぼんやりとする意識で無理矢理上体を起こすと、カーテンの隙間か
ら柔らかな陽射しが目を刺激する。

ぼーっとしていたら左腕を何かが引つ張ってくる。

何だろう、と目を向けたらパジャマ姿のミナが微笑んでいた。

あれ、何でミナがここにいるんだろう。

取り敢えず笑顔を返すと、急にミナが抱き付いてきた。

「わぷっ、ミナ、何……」

「ちゅっ、ちゅ、ちゅぷっ、んっ、んむっ、ぺろぺろ、はむう、ち
ゅううっ♪」

キスされました。しかも濃厚なやつ。

突然の事に驚くけど、僕にいつまでも驚いている余裕は無い。

何故なら僕の息子が最高にハイっちゃってるからだ。

朝だからただでさえ血流が良くなってる所に、美少女の甘い匂いと
柔らかな舌触りがプラスされて気力限界突破状態だ。

思いつ切り自己主張を始める息子に気付いて、ミナがほっぺを赤く染めた。

もじもじと指を突き合わせながら、上目遣いに僕を見上げてか細い声を出す。

「あのね、私まだお子様だから気持ちよく出来ないかもしれないけど、ユーリがしたいなら……私、頑張るよ？」

わーにんぐ、わーにんぐ！

りせいがほうかいしています、すみやかにしゅうふくしてください！あれ、発音わーにんぐでいいんだっけ？

取り敢えずミナがかわいすぎて僕の理性がピーンチ！？

思わず抱き締めようとする両腕と突き上げようとする腰を気合いでねじ伏せる。

ダメだ息子、一時の快楽に負けてミナを傷付いたら後悔するぞ？

頭の中の天使と悪魔が協力して息子を取り押さえるのを確認して、僕はゆっくりとミナの体を引き離した。

「ミナ、気持ちは嬉しいけど、まだダメだよ」

「……やっぱり、私みたいな子供じゃダメ？」

「違うんだ、ミナ。ミナはかわいいし優しいし、とっても素敵な女の子だよ。だけど、だからこそ、自分を安売りなんてしちゃいけない。ミナが子供を作る年になって、自分が思い描いた大人になる時まで待つんだ。その時に、まだ僕を好きでいてくれたなら、僕の方からプロポーズさせて欲しい」

中学2年の時に考えた対幼女説得呪文がこんな所で役に立つなんて、
案外中2病も悪くないかも。
まあほとんど本心だけどね。

大人になっても僕なんかの事を想ってくれる人なんてそういないだ
ろうし、そこまで僕を想ってくれるなら、僕もその想いに全力で応
えていきたいし。

……はっ！なんか今すごい恥ずかしいセリフを言った気がする！
こういう時は……これだ！

——キリッ。

ふう、これで何を言っても恥ずかしくないぞ。

そんなしょうもない事を考えてる僕とは対照的に、ミナはうつとり
とした目で僕を見上げていた。

うっ、キラキラの目が眩しいです。

「ユーリ……うん、私大人になるまでガマンするね。あ、でもユー
リがガマン出来なくなったら、いつでも言ってるね？私の体と心はユ
ーリ専用なんだから♪」

ぐはぁっ！

僕の理性に大ダメージ！

息子軍の盛り返しに天使軍と悪魔軍は押され気味です。

いやいやミナ、せっかく僕がミナに我慢するよう言ったのに、逆に
僕が我慢出来なくなるような事を言ったらダメだよ。

悶えてる僕に、もう一度優しく触れるだけのキスをして離れるミナ。

さっきまでお腹の上にあった体温が失われていくのを、ちょっぴり寂しく思いながら、僕は枕元の目覚まし時計に目を向ける。

——おはよう、美由里。

愛しい妹の声が吹き込まれた、少し色褪せた目覚まし時計。

昨日麻袋を漁っていたら、地球の僕の部屋に置いてあったハズのこれが出てきた。

暖かくて寂しい、なんとも不思議な気持ちを覚えて、僕はこれを枕元にセットしたんだ。

一週間振りに聴いた妹の声に心が和む。

ミナやエアリィさんも素敵だけど、やっぱり妹分を補給しないと元気が出ないしね。

ふと視線を感じて顔を戻すと、ミナが優しく微笑んでいた。

「ユーリ、妹さんの事大好きなんだね」

「うん、自慢の妹だよ」

「そっかあ、ちょっとしつとしちゃう」

「嫉妬？」

「だって私の知らないユーリをいっぱい知ってるし、ユーリにそんなに愛されてるなんてうらやましいもん」

「あはは、でも妹からしたらミナの方が羨ましいかもね」

「ほえ、なんで？」

「よく僕のお嫁さんになりたいって言ってたけど、兄妹だから結婚出来ないって言ったら泣かれちゃったし。だからその辺りはミナの事を羨ましがってるかも」

「どうかなく？ユーリは私みたいな小さい子供にもよくじょうしち

やう、えっちさんだからね♪妹さんに迫られたら断れなかったかも」

「ハッハッハ、そんな事……ナイデスヨ？多分」

「あはは、ユーリのへんたいく♪」

「なにおう！？」

「わあ、ユーリが怒った♪」

ドタバタと追いかけてこを始める。

部屋を3周した所でわざとミナが掴まり、僕に擦り寄ってきた。

そのままベッドに座り、膝の上にミナを乗せて後ろから抱き締める。

「わあ、つかまっちゃった！？ユーリにえっちな事されるうゝ♪」

「ふっふっふ、そんなにえっちな事されたいなら、ミナにはすぐくえっちなお仕置きしちゃうぞ」

「ユーリさん、朝から何を騒いで……」

「「あっ」」

ある意味絶妙のタイミングでシーナが部屋のドアを開けた。

ベッドの上には走り回ったせいで顔を赤くした、少し息の乱れた2人。

ミナは僕の手を自分のまだ膨らんでもいない胸に押し当てて、僕はさっきの余韻で TENT を張ったままの下半身をミナの太腿に挟まれている状態。

ぴこーん、とどこかでフラグの立つ音が聞こえた。

「ユーリさああああん！」

こうして僕とミナは朝から雷の洗礼を受けるのでした。
ちゃんちゃん。

「はっはっは、それでユーリ君のほっぺに見事な紅葉が付いている訳か」

「まあ自業自得な面もありますよ。っていうかこっちの世界にも紅葉あるんですね、それにびっくりですよ」

テーブルを4人で囲みながら、簡単な朝食を取る。

ちなみに今日の朝ご飯担当は僕だ。

お馴染みの麻袋から取り出した食パンに甘い玉子焼きとハムとチーズを載せて、窯に入れてパンに軽く焦げ目が付いた所で取り出す簡単レシピだ。

飲み物は同じく麻袋から取り出した100%オレンジジュース。

何故か取り出した時に冷蔵庫の中に入れてたのだったくらいキンキンに冷えていた。

色と香り、それに味を見た限り賞味期間にも問題はなさそう。

やっぱりエアリイさんが気に入って、早々に1リットル飲み干してしまった。

こくこく喉を鳴らして美味しそうにオレンジジュースを飲むエアリイさんは小動物みたいでかわいかった。

シーナはムスツとした顔で蕎麦茶をすすっている。

パンに蕎麦茶はどうだろう、って思ったけど本人が満足そうだしいいか。

ミナは頭に真新しいたんこぶを作って、もみゅもみゅと小さな口で

パンを咀嚼中。

甘い玉子焼きが大ヒットらしく、食べてるパンは早くも5切れ目。そのちっこい体のどこに入るのか、お兄さんすごく疑問です。

かくいう僕はエアリィさんに指摘された通り、ほっぺに真っ赤な紅葉をくつつけている。

じんじんひりひりと痛むけど、シーナが付けてくれた傷って考えたらむしろ……はっ、いけないいけない、思考が変態チックになった。

気を付けないとまたシーナにビンタされちゃうし。

あれ、それって罰だっけご褒美だっけ？

「あ、そろそろ時間か。食べたら出発しないとね」

まったりしてたら腕時計からピーピーと電子音が鳴り響く。

示された時間は8時。

もうちょつとしたら街へ行く行商人の馬車が出発する時間だ。

「次に逢うのは一週間後か。ああ、矢張り私も一緒に行こうかな？」

「あはは、心配性ですねエアリィさんは。大丈夫、しっかり稼いできますから！」

「いや、そういう訳では無いんだが……」

皿に手を伸ばすと指先が空を切る。

ありゃ、もうみんなで食べちゃったか。

まあ腹八分目でいいかな？

って思ってたなら、ミナが持つてるパンを半分にちぎって片方を僕に

差し出した。

「はんぶんこしよ♪」

「ありがとうミナ」

「にへへ、ふーふはなんでもはんぶんこだよ」

パンを受け取り、2人で仲良くもぐもぐはむはむ。

何故かこのパンが一番美味しく感じる。

やっぱり最上の調味料は愛ですな。

美味しく頂いてごちそうさま。

さあ、早速出発の為の準備をしないと。といっても、着替えて麻袋を持つくらいだけだね。

いつもの白Yシャツと黒のスラックス、その上に灰色のローブを羽織る。

耐熱性や耐寒性、耐刃性にも優れて寝るときには毛布代わりにもなる万能ローブだ。おまけに軽くて魔法耐性まで付いている。

勿論麻袋から出て来た。

正直この麻袋を持ったら誰でもチートになれる気がする。

麻袋を肩に掛けて準備完了。

あ、肩紐は昨日シーナが付けてくれた。

裁縫してる姿はなかなか似合ってて、ちょっぴり見惚れてたら「何見てるんですか」って照れたシーナにぺちぺち叩かれた。

ツンデレさんめ。

玄関に出るとエアリイさんとシーナが見送りに来てくれていた。

「あれ、ミナは？」

「呼んだんですけど降りて来ないんです、返事もしないし」

「恐らくユーリ君と離れるのが寂しくて会いに来れないだけじゃないかな？」

「そっか、了解。お土産買ってくるから期待してて、ってミナに伝えておいて」

「ああ、解ったよ。私とシーナ君にもお土産を忘れないでくれよ？」

「あはは、勿論だよ。じゃあシーナ、エアリィさん、行って来ます」
「行ってらっしゃい、ユーリ君」

「道中気を付けて下さいね」

手をぶんぶん振りながら教会を後にする。

見送りに来てくれなかったミナがちょっと心配だけどね。

朝ご飯の時は普通だったのに、なんでだろう？お土産をちょっぴり豪華にして機嫌直してもらおっと。

そんな事を考えながら村を歩いていくと、村の入り口に止まる馬車を見つけた。

そろそろ出発の準備が完了するみたいで、乗り込むのは僕が最後までいい。

商隊の一番偉いっぽい人が僕を見て、恰幅のいい体を揺らしながら近付いてきた。

「おっ、きたな兄ちゃん」

「おはようございます。お待ちせしたみたいですみません」

「いやいや、気にしないでいいさ。なんせ兄ちゃんの初仕事への門出だ、日が暮れるまで待ってやるさ」

かっかっか、と豪快に笑うおじさんに若干気圧されつつ、指定された3台目の馬車に乗り込む。

中には全身を紫のローブで隠すようにした人が座っていた。
結構小柄な人で、頭をすっぽりフードで覆っている為顔は見えない。

「初めまして、ユーリといいます。街までの短い間でですけどよろしくお願いします」

出来る限りにこやかに話し掛けてみた。

やっぱり旅の仲間とは仲良く話が出来くらいじゃないとつまらないね。

フードの人は僕の方に顔を向けると、軽く会釈をしてくれた。

——恥ずかしがり屋さんなのかな？それとも単に無口だったり。

フードの人の向かいに座ると、前の方からかけ声が聞こえてきた。
出発の合図だ。

ゆっくりと馬車が動き出し、タマタ村が離れていく。

少しだけ後ろ髪を引かれる光景を眺めながら、僕は拳を握って決意を新たにした。

——よし、こっちの世界での初仕事だ。もう誰にもニートだなんて言わせないぞ！

事の始まりは一昨日。

夕食の席で教会の運営費やシーナ達の生活費の事を聴いたのがきつかけだった。

「じゃあ教会回りは全部？」

「ええ、生前に管理費や維持費やそれに掛かる税金は神父様が一括で払い込んでいるので、実質掛かっているお金は私達の食費や日用品を買う雑費くらいですね」

「心配しなくてもだいじょぶだよ！私がユーリを養ってあげる♪」

「い、いやいや、それは男の沽券に関わるから謹んで辞退させてもらうよ」

こんなに小さなミナのヒモになるとか、いくら何でも情けなさすぎる。

自分の食い扶持くらい自分で稼がないと！

そんな訳でどこか働ける場所は無いかと聞いてみたら、エアリィさんが街の冒険者ギルドに登録したらどうかって言ってくれた。

「冒険者ギルドは仕事を斡旋するギルドでね。簡単なものは庭の草むしり、難しいのや危険なものになると山賊や傭兵崩れの掃討なんかがあるよ」

「なるほど、それなら僕にも出来そうですね」

「ここから近い街といえば北の『クワンカ』かな。確か今来ていた商隊が北へ向かうようだから、同乗を頼んでみたらどうだい？」

「そうですね、せっかくだし行ってみようかな」

冒険者ギルドかあ、なんだか異世界っぽいなあ。
ちょっぴりテンション上がったきた。

「よし、いっぱい稼いでミナもシーナも養ってあげる！」

「おお、ユーリカッコいい♪」

「わ、私もですかっ!？」

「おやおや、私は養ってくれないのかい？寂しいなあ」

「勿論エアリィさんですよ！みんな纏めて僕が面倒見ます」

思い返したら妙なフラグいっぱい立てた気がする。

っていうかあの発言って一歩間違えたら「みんな僕の嫁！」って言うてるようなものじゃないんだろうか。

……ま、まあ余り深く考えるのはよそう。

そんな訳で僕は冒険者ギルドへ向けて出発したんだ。

往復で3日くらい掛かるから実質4日しか働く時間は無いけど、その分数をこなして稼ごうかな。

なんて考えていたら視線を感じた。

先程からフードの人がチラッと僕の様子を窺ってる。

照れて話し掛けづらいのかな？

なんて思ってたら、突然フードの人が僕に声をかけてきた。

「もう、まだ解んない？」

「へっ？」

僕の膝の上に乗って、被っていたフードを脱ぎさる。
はらりと流れる紫銀のショートボブ。
くりくりつとしたかわいい瞳が、イタズラっ子のように僕を見上げていた。

「み、ミナ？」

「うん、ユーリのミナだよ♪」

満面の笑みを浮かべて僕に抱き付くミナ。

幼女特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

ああ、やっぱりミナはいい匂いがするなあくんかくんか。

ってなんでミナがここにいるんだ!?

正氣に戻った僕が口を開こうとしたのを察知してか、ミナは柔らかな唇で僕の言葉を封じた。

「ちゅっ、ちゅくっ、れろれろ……♪」

ミナの舌が僕の歯や舌を舐め上げる度に、ぞわりと快感が込み上がってくる。

小さな舌の横から甘い唾液が流れ込み、僕の思考を溶かしていく。

ミナの唾液を求めて舌を伸ばす。

一瞬だけ怯んだミナの舌に僕の舌を絡ませ、僕の匂いを、味を染み込ませていく。

ぴくぴくとかわいらしく震える体を優しく抱き締め、その小さな舌先を吸い上げた。

「ふむうつ、んっ、んんっ♪」

与えられる快感に身を任せて目を潤ませるミナ。

ハートマークを乱舞させながら、僕の唾液をこくこくと喉を鳴らして美味しそうに飲み込む。

突然、馬車が大きく揺れた。

道端の石にでも乗り上げたんだろう。

その衝撃でミナの体が浮き、落ちた時に僕のストラックスに張られたテントにミナの股間が擦れた。

声にならない声を上げ体を痙攣させる。

不意の衝撃に絶頂させられたようだ。

全身から力が抜け僕に凭れ掛かるミナ。

唇が離れ、荒い息を吐き出す。

「はへえ……あへえ……ゆーり、はげしすぎだよお……♪」

まだ性の目覚めも来ていないミナには刺激が強すぎたみたいで、だらしないところけ顔を僕に向ける。

僕は優しくほっぺにキスをして、脅かすように言った。

「ミナがお嫁さんになったら、もっと気持ち良くてもっとえっちな事してあげる」

「ふああ……っ、なるう……ゆーりのおよめさんになるからあ、もっとお、もっとしてえ……♪」

「ふふ、ミナはえっちだなあ」

もう一度優しくほっぺにキスをしたら、ミナはぶるっと体を震わせて気絶した。

余りの興奮と快感に脳が付いてこれなかったみたいだ。やっぱりかわいいなあミナは。

髪を撫でてあげると幸せそうに微笑んだ。

——って、つい本能に任せてキスしちゃったけど。なんでミナがいるか聴きそびれちゃったな。

次からはちゃんと流されないようにしつかりしないと。でもミナかわいいから無理かな、なんて早くも敗北宣言しつつ、起こさないよう優しく抱きかかえる。

っていうか朝ミナに言った事と真逆な事してるな僕。

あれだけキザなセリフを口にしたのに早くもミナの幼女ボディを弄ぶなんて、僕ってもしかして鬼畜？

ちよっぴり自己嫌悪に陥っていると大きな欠伸が出る。

——そういえば朝早かったし、昨日は興奮して眠るの遅かったなあ。

街に到着するのは明日の昼前。

やる事といえば精々毎食のお手伝いだ。

それまでミナとゆっくりしていようかな。

ぽかぽかと暖かい空気に包まれながら、僕も少し眠る事にした。

いざ行かん、冒険者ギルド。

どうも、最近息子に精神を奪われがちな片桐悠里です。

昨日は本当に色んな意味で危なかった。

僕にべったりなミナを見て商人さんには冷やかされるし、煽られたミナが迫ってきてピンクで気まずい雰囲気になるし、馬車の中で何回かミナを押し倒しそうになるし。

いやあ、流石に我慢したよ。

どうせなら気兼ねなく2人っきりの空間でミナの初めてをもらってあげたい……って、また思考が息子に奪われてる！？

こほん、まあそんな事はあったけど特に事件も無く1日目は終了した。

いや、ミナがいた事が事件っちゃ事件だけどね。

聴いてみたら、僕と離れたくない一心でついて来ちゃった、って事らしい。

止めても聞かないだろうって判断したエアリィさんにこっそり手回ししてもらって、ローブとか護身用のナイフとか用意してもらったみたい。

でもシーナには内緒だったみたいで、帰ったらげんこつが確定。

家族に心配掛けちゃダメだよって、叱ったらミナは案外あっさりと聞き入れてくれた。

やっぱり妹を叱る時にも使った「めっ」が効いたのかな？

取り敢えずお仕置きという事で、ミナには僕が担当する夕飯作りの手伝いを任命した。

夕食の時に僕が作った豚汁はなかなか好評だった。

商人さん達はこれを商品展開出来ないかって考えてたし、護衛の傭兵さん達は競うようにおかわりしてくれた。

僕とミナは少し離れた所で互いに食べさせあってた。

端から見たらただのバカカップルだったんじゃないだろうか。

そして2日目の朝、珍しくミナよりも早く起きた僕はのんびりと外の景色を眺めていた。

僕の住んでた所じやなかなか見られない、緑豊かな自然。

やっぱり空気が美味しいなあ、排気ガスも無いし車の騒音も無いし。ぼんやりしてたら前髪が鼻先に降りてきていた。

そういえば床屋で髪切ってもらったの2か月も前か、そりゃ伸びるよね。

「……うっとおしいなあ」

ぽつりと口に出る。

おでこや鼻に髪の毛が掛かると、チカチカ痛痒くなるから嫌なんだよなあ。

帰ったらシーナにお願いしようかな？

あ、でもそれまでチカチカに耐えなきゃいけないのか。

うっとおしい部分だけ先に切って、後でシーナに整えてもらおっと。麻袋からはさみを取り出す。

出て来たのは何故か工作用のはさみだったけど、まあ切れるからいいかって気にせず髪の毛を切る。

うん、まあこんなもんな？

手鏡で変な髪型になってないのを確認してはさみをしまう。

あ、どうせなら髪の毛も自動で処理した方がいいよね。

なんだかんだで慣れてきた僕は魔法の新しい使い方を試してみる事にした。

ずばり、魔法付呪！

大層なネーミングだけど、早い話が髪の毛にファイヤーの魔法をエ

ンチャントして燃やそうって事だ。

エンチャント出来るなら案外いい儲け話になりそうだし。

でも髪の毛って燃えると異臭するんだよねえ、どうしようか？

そこまで考えた時、昨日護衛のお姉さんが言っていた事を思い出した。

この辺には人を襲う狼が出るらしい。

その狼に髪の毛をくつつけて撃退したらどうだろう。

襲われる人もいなくなるし、狼には悪いけどこれも僕の好奇心の為、ちよつと熱いかもしれないけど我慢してもらおう。

早速髪の毛にファイヤーの魔法を宿す。

イメージは髪の毛の対象が接触したらスイッチが入って魔法が発動するピタゴラ風味。

ついでに狼を狙って追尾する魔法も付呪しておこう。

なんて名前がいいかな？

ストーカーだと犯罪チックだし、もっとナウイ名前を付けたい。

「……チェイサー」

おお、これだ！

僕の好きなアニメの主題歌から取ってみたら意外としっくりきた。

早速付呪して馬車の覗き窓から髪の毛をばらまくと、風に乗って森の奥へ飛んでいった。

微かに犬の鳴き声みたいなのが聞こえてきたのにはびっくりしたね。まさか囲まれてた？

怖い怖い、って身震いしているとミナが目を擦りながらもぞもぞ動き出した。

「ゆーりい……?」

「おはよう、ミナ」

「ゆーりだぁ♪ゆーりい、おはようのちゅう、しよお?」

寝ぼけ眼で僕に抱き付きキスをねだる小さなお姫様。

朝っぱらから余りのかわいさにお兄さん大爆発しそうです。

というか、やっぱり昨日1日で僕とミナの距離が縮まった気がする。
主にえっちな方向に。

外に出て顔を洗っていると、いい匂いがしてきた。

釣られて行ってみるとおじさんがコーンスープを温めていた。

ジャガイモやとうもろこし、カボチャなんかはこっちの世界でもポピュラーな食材で、特にとうもろこしは地球のよりずっと甘くて美味しい。

しかもとうもろこしは僕の好物。

口いっぱいによだれを溜めていたらおじさんに「待て、お座り」って言われた。

犬じゃないやい! って思ったけど体は反射的にお座りのポーズを取ってた。

妹とやっていたわんわんごっこの影響がこんな所にも!

おじさんはまさか僕が本当にお座りするとは思わなかったらしく爆笑してた。

むくれていたらコーンスープをちよっぴり多くよそってもらった。
ラッキー。

まあミナに見られなかったのは不幸中の幸いだったかな?
見られたら恥ずかしいし。

朝食の後は再び馬車に揺られる時間。

狼が来るかな〜ってドキドキしてたけど、どうやらさっきので逃げ出したみたいで、ちょっと安心。

しばらくミナとイチヤイチャらぶらぶしていると、前の方からおじさんの声が飛んできた。

「兄ちゃん、街が見えてきたぞ！」

おじさんの声に弾かれるように2人で身を乗り出して前方を見ると、活気溢れる街並みが広がっていた。

街の真ん中にそびえ立つ、一際高い真っ白な建物が見える。

あれが教会だろう。

この大陸では宗教がある程度の力を持っていて、一定の水準の教育は教会が行っている。

基本的に無料で教育や治療が受けられる為、貴族に受けは良くないけど民衆からの評判は上々。

だから民意を掴んでおく為に教会に何らかの形で支援せざるを得ないけど、元々教会に野心は無く政治や権力に色を見せないから取り入りにくく、まあ取り敢えず民衆の人気取りに仲良くしておくかってスタンスの貴族が多いらしい。

以上、エアリィさんからの受け売りっ。

僕だって偶には勉強するんだ。

まあ、今は初めて見る異世界の街にテンション上がっちゃってるけどね。

「おお、すごいや」

「おお、すごいね」

同じ反応をしてしまい、顔を合わせてクスクス笑っているとおじさんに怒られた。

「夫婦揃ってバカやってないで降りる準備しておけよ！」

「はぁーい」

商隊の皆さんに別れを告げて中央広場まで歩いてきたけど、目に映るものが珍しくてぽかんとしちゃった。

ミナも同じようできりにきよきよと視線をさまよわせている。取り敢えず宿を探しに行く事にした。

ミナがいるからそれなりにいい宿じゃないといけないかな。

手を差し出すと、少し照れたように笑って僕の手をキュッと握るミナ。

ミナかわいいよミナ、ってのほほんとしつつ広場の案内板に目を通していると、活発そうな男の子が近付いてきた。

「兄ちゃん、何か探してるのか？」

「宿屋を探してるんだけど……この街は初めてだから、どこがいいか解らないんだ。そこまで高級じゃなくてもいいから、安心安全なご飯の美味しい宿屋ってあるかな？」

「それならうってつけがあるぜ！」

「それじゃ案内してもらおうかな？」

男の子の手に銅貨5枚を握らせると、男の子は目を見開いた。

「ちょっと、兄ちゃんバカか!？」

「いきなり失敬な!？」

「いや、だって普通銅貨1枚くれりゃいい方だぜ? 5枚なんて頭の緩いボンボンが気まぐれでバラまく時くらいしか見た事ねえや」

「いいの、これからいっぱい稼ぐ予定だし。それに後ろの子、妹さんじゃないの?」

僕の視線の先、男の子と同じ赤茶色の髪の毛をツインテールに纏めた女の子がこちらを伺っている。

手を振ったらちょっと驚いたみたいだけど、小さく手を振り返してくれた。

「偽善なのは解ってるけど、僕のいい気分を演出する為にもらっておいてよ。甘いお菓子でも買ってあげたら喜ぶんじゃない?」

「……変わった奴だな。でも、兄ちゃんバカだけどいい奴だ」

ニカッと笑って銅貨を受け取る男の子。

うん、いい笑顔だ。

ロリとシヨタには優しく親身に、それが異世界トリップでは大きな意味を持つハズ。

ちよっとした打算も含めて、逞しく生きて行かないとね!

先導する兄妹について行くと、脇腹の肉を摘まれた。

見るとミナがちよっとむくれた顔で僕を見上げていた。

「まったく、ユーリはすぐ小さい女の子の前でカッコつけたがるんだから」

「いたた、ミナ、痛いよ」

「ユーリのうわきものお」

クスクスと笑いながら僕の肉を摘むミナ。

くそう、早くも尻に敷かれ気味だ。

そうそう、路銀はシーナに借金してきたんだ。

お金稼いでくるって言ったのに、稼ぐ為のお金を借金するとか若干のヒモ臭がするけどね。

でも大丈夫、絶対にお金稼いで借金を返して、ついでにシーナにお土産までプレゼントしちゃうもんね！

そしたらシーナもちよっぴりデレたりしちゃうかも。

エアリィさんには髪飾りとか似合いそうだなあ、プレゼントしたら毎日付けてくれたりして。

でへへ、ってほんの少しニヤけたら脇腹の痛みが鋭くなった。

「いっただだっ!?!」

「もう、ユーリのおバカ!……やっぱり胸大きくないとダメなのかなあ」

小さな呟きも聞こえたけど、僕は声を大にして言いたい。

ちっぱいも大好物です！

僕とミナのやり取りを見ていた男の子が頭に?を浮かべて言った。

「兄ちゃんとその子ってどんな関係なんだ？ 兄妹にしては似てないし」

「そうだなあ、多分「夫婦だよ！」……だそうですよ？」

「疑問形で答えるなよ！ ってか兄ちゃん尻に敷かれてるなあ」

「薄々気付いてたよ、それは」

「っと、着いたぜ兄ちゃん」

足を止めるとなかなか立派な門構えの宿屋があった。

大きな看板には……見た事も無い文字。

なんて読むのか見当も付かない。

「ちよっぴり値は張るけど安宿とは比べ物にならないくらい清潔だし料理も旨いぜ」

「道案内ありがとう。そうだ、冒険者ギルドってどこ？」

「それならこの道を真っ直ぐに行って広い通りを左に曲がったらすぐだぜ」

「そっか。ほい、お駄賃」

「……いや、もうどうでもいいか」

追加で銅貨5枚を渡した僕を呆れた顔で見上げた男の子。

なんだか諦めたように溜め息を吐いて、来た道に戻って行った。

去り際に両手をぶんぶん振ってバイバイしてくれた女の子に癒やされつつ、僕とミナは宿屋に足を踏み入れた。

内装は落ち着いた雰囲気、派手さはないけど華やかな印象。

と、来客に気付いた女性が床を掃いていた手を止めて、僕達に近付いてきた。

30過ぎくらいの背の高い女性で、女将さんって形容がぴったり合いそうな人だ。

「いらっしやい、部屋をお探しかい？それとも食事？」

「5日間程部屋をお借りしたいんですが」

「朝晩の食事付きで1泊銅貨30枚、5日間ならちよつと割引して銀貨2枚と銅貨40枚でどうだい？」

「2人で寝られるちよつと大きめのベッドがあります？」

「ああ、お洒落な部屋が空いてるよ」

「じゃあその部屋をお願いします」

僕は腰に固定したポーチから銀貨3枚を取り出して女将さんに渡した。

この世界のお金は4種類ある。

一番安い通貨が銅貨、銅貨50枚で銀貨1枚、銀貨50枚で金貨1枚、金貨50枚で白金貨1枚だ。

今の会計なら銀貨3枚出してお釣りが銅貨10枚。

数学の授業中、広げたら手を繋いでる人形をプリントの切れ端で作っていた僕にとって、この単位の理解はなかなか難しかった。

テストは常に赤点タイトロープだったし。

苦い思い出に浸っていたら、ミナに手を引かれて現実に引き戻された。

女将さんに案内された部屋は2階の右奥、なかなか広くてお洒落な部屋だった。

ふかふかのソファードとシックなテーブル、そして目を引くダブルベッド。

「朝食と夕食は1階の食堂に降りてきておくれ。教会の鐘が鳴る頃には用意が出来てるからね」

「解りました、これから5日間お世話になります」

ミナと一緒にぺこりと頭を下げる。

すると女将さんは驚いたようで、頬をポリポリ搔いていた。

「今時珍しく礼儀正しいお客様だねえ、なんだかこっちが落ち着かないよ。はい、これが部屋の鍵」

「どうも。じゃあミナ、荷物置いたら早速行こうか？」

「うん、行こう行こう♪」

といっても荷物らしい荷物は着替えを入れたサックくらいしかない。ほとんど変わらない格好のまま、僕とミナは宿屋を後にした。

男の子に教えられた道を、手を繋いで歩いていく。

「なんだかデートみたいだね」

「でえとって？」

「恋人が2人で仲良く出掛ける事だよ」

「おう、デートデート♪」

ご機嫌になるミナに目を細めつつ、僕はまた1つ解らない事が増えたなあ、と思った。

こうして会話が出来てるのは、多分なんらかの魔法かそれに近い力が働いているせいだろう。

文字が違うんだから使っている言語形態そのものが違うんだと思う。不思議なのは会話していて、僕が日本語として話している言葉は通じるのに、僕が外国語やカタカナ語と認識して話している言葉が通じない事だ。

正確には通じる言葉と通じない言葉があるって事かな。

なんとなくこうじゃないかって、理由として考えられるのは、日本語で説明出来るか否かで分けられる所。

例えば、スプーンやフォーク。

あれは『スプーン』 や『フォーク』 ってしか認識出来ないから、そのまま伝わってるんだと思う。

デートみたいに、逢い引きって言い換える事が出来る言葉は相手に伝わってない気がする。

でも『ボウル』は器って言い換えられるけどエアリイさんに通じたし、僕の考えた法則が合ってる証拠も無いからなあ。

まあいいか、伝わらなかったらその都度説明すれば。

そうこうしている内に冒険者ギルドに着いた。

入り口前方には受付、左には道具屋と歓談の出来る広場、右には依頼掲示板と食事の出来る軽喫茶がある。

独特の雰囲気吞まれていると、喫茶店の方から僕を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、ユーリ君。こっちこっち」

「あれ、護衛のお姉さん？」

「さっき振り」

ヒラヒラと手を振っているのは、さっきまで商隊で一緒だった護衛のお姉さん。

褐色の肌に輝く銀髪のショートボブ、Dカップの胸を黒いジャケッ

トで覆っているのにヘソ出しルック、同じく黒のホットパンツに黒のサイハイソックスが眩しい絶対領域を演出、ぷりんとしたお尻やむっちりした太腿が妖艶な色香を醸し出しているのにやや幼い顔付きがアンバランスで魅力的なお姉さんだ。
なんとなく猫っぽい緑色の目が人懐っこい印象を与える。

「これからギルド登録？」

「ええ、そのつもりです」

「そっかそっか、登録終わったら一緒に何かお仕事するかい？」

「簡単な仕事で雰囲気掴むつもりだったので退屈かもしれないよ」

「大丈夫大丈夫、あたし暇だから全然気にしないよ」

「あはは、了解です」

くるっと踵を返して喫茶店へ戻っていくお姉さん。
いいお尻だ。

ちょっと見惚れていると、横でミナがほっぺを膨らませていた。

「ぷー」

「ミナ？」

「ぷくー」

「つんつん」

「ぷちう」

「あ、空気抜けた」

「もう、遊ばないでよっ」

「あはは、ゴメンゴメン」

膨れたミナのほっぺをつついて空気を抜いてやる。

しっかり付き合ってくれる辺り、ミナは良い子だよね。

っと、いけないいけない、早い所登録しよっと。

受付は……わお、受付のお姉さん僕が入ってきた時のスマイル保ってるよ。

すごい精神力だなあ、と妙な所に感心しながら僕は受付のお姉さんに話し掛けた。

「いらっしやいませ、冒険者ギルドへようこそ」

「あの、冒険者として登録したいんですけど」

「はい、新規登録ですね。ではこちらの書類に必要な事項をお書き下さい」

「あ、僕読み書きが出来ないので代筆をお願いしてもいいですか？」

「はい、構いませんよ。ではお名前からお願ひします」

「名前はユーリです」

名字の方は黙っておいた。

シーナが名字持ちは貴族だって言ってたから余計なトラブルに巻き込まれるかもしれないしね。

その後も色々な事を聞かれた。

年齢、住居若しくは拠点、犯罪歴等々。

犯罪歴は有っても言う人いないんじゃないかなあ、って思ったけどちゃんと嘘を見抜くマジックアイテムがあるらしい。

確かに犯罪者を抱え込みたくはないしね。

「職業はどうされますか？」

「職業？」

「はい、これは他の冒険者とパーティーを組む際の参考になります。前衛担当であれば戦士や剣士、後衛担当であれば狩人や魔術師といった具合です」

あ、今受付のお姉さんパーティーって言ったね。

やっぱり通じる言葉には何か法則があるのかな？

取り敢えず自分の職業を考えてみる。

まあ、あんまり目立ってもヤダしシヨボいのにしておこう。

「じゃあ魔法使いでお願いします」

「魔法使い……で宜しいのですか？」

「あれ、なんかまづかったですか？」

「いえ……普通ですと魔術師や魔導師と仰る方が多いので」

「まだそう名乗れる程の実績も無いので、魔法使いにしておけば仮にパーティー組んでも余計な負担掛けないかなあと思ひまして」

「お若いのに立派ですね。解りました、魔法使いで登録致します。

これで貴方もギルドの一員です、こちらのギルドカードが貴方の身分証代わりになりますのでくれぐれも紛失なさらないようお願い致します。紛失致しますと如何なる理由であれ再発行に銀貨1枚が必要になります」

その他の注意事項や基本的な流れを右から左へ受け流す。

……うん、こういう話には僕の集中力はまるで発揮されないんだ。いざとなったらミナに聴こう。

ギルドカードを懐のポケットにしまい、依頼掲示板の方へ向かう。すると1台のテーブルに目が釘付けになった。

回転寿司でも見た事無い量の皿が積み上がっていて、その中心では銀色の髪の毛が揺れ動いている。

――予想は付くけど、なんだあれは。

若干呆れつつ眺めていると、最後の料理を食べ終わったらしくお腹をぽんぽんと撫でながら暴食天使が姿を見せた。
いったいあの体のどこに入っただろう。

「おっ、ユーリ君登録終わった？」

「終わりましたよ。っていうか、すごい量ですねコレ」

「まだまだおやつ程度だよん」

「これでおやつ程度！？」

ええい、お姉さんの胃袋は宇宙か！

昨日も僕の作った豚汁7回もおかわりしてたし。

取り敢えず依頼掲示板を眺めてみる。

……読めなかった。

仕方がないのでミナに読み上げてもらった。

薬草の採取、鉱石の採取、角ウサギの駆除、灰色狼の撃退、ゴブリンの掃討……って、この世界にゴ布林いるの！？

てっきり魔物の類は無いと思ってたけど、そんな事は無かった。
と、左腕の袖をミナに引っ張られた。

「ねえ、ユーリ。これなんかどう？」

ミナがオススメしてくれた依頼は屋根の修理。
報酬は銅貨3枚。

確かにこれなら僕にも出来るし、最初の依頼としてはぴったりかも。

「うん、いいかもね。さっすがあ、ミナは話が解るっ」

「にへへ、もつと褒めていいよ？」

頭をくしくしと撫でると嬉しそうに目を細めるミナ。

その横でお姉さんはうんうんと感心した様子で頷いていた。

「色々な依頼がある中でその依頼にするなんて、ユーリ君は人間が出来てるねえ」

「え、なんでですか？」

「こういった雑務系の依頼は初心者用に街の人がわざわざギルドに依頼してくれてるのさ。簡単な仕事だけど、働いてお金をもらうつて喜びを知ってもらう為にね。だけど最近の若い子達はすぐゴブリン退治なんだ、って飛び出したがるからねえ。あたしだって初心忘れるべからず！って時々受けてるのに、全く困った話だよっ」

お姉さんの言葉に思わず顔を背ける人がチラホラ。

まあ、気持ちは解るけどね。

男の子ならいつだって冒険に出掛けたくなるものだ、ってCMでもやってたし。

「おっと、ちょっと愚痴っぽくなっちゃったね。しっぱいしっぱい」

自分でおでこをコツンと叩くお姉さん。

妙に子供っぽい仕草がまたかわいい。

ちょっぴりエアリィさんに似てるかもしれない。

受付に依頼の紙を持って行って、依頼受注完了。

早速初仕事へレッツごう！

ギルドで一悶着ありました。

クワンカの街は5つの区画に分かれている。

南側に宿屋や交易店、ギルドなんかがある旅店地区。

閑静な住宅街と憩いの広場がある北の居住地区。

衛兵詰め所や図書館、歴史的建造物でもある英雄の銅像が立つ東の公社地区。

西には活気溢れる飲食店や酒場、本屋に装具屋、鍛冶屋を有する商人地区。

そして教会と大きな広場がある中央地区だ。

今僕は北にある居住地区の一軒のお宅にお邪魔してる。

善は急げという事で早速ギルドの依頼をこなしに来たのだ！

とちよつとテンション上げてお送りしているのには訳がある。

屋根の修理という事は屋根に登る必要がある訳で。

——こわっ、この中途半端な高さこわっ！

特別高所恐怖症って訳じゃないけど、この5m付近の高さって一番怖い。

多分高度5000mとかなら平気だけど、これくらいの高さだと自分が落ちたらどうなるかを鮮明に想像出来るから怖いんだと思うけど。

ちなみに屋根の修理っていつでも専門的な事はやらずに、上から木の板を張り付けて雨漏りしないようにするだけ。

元々大工さんに修理を頼んであって、大工さんが来る日までの間の臨時依頼だったみたい。

やる意味無い所か最悪屋根の状態が酷くなるんじゃないかなって

思うけど、そこも含めて初心者向けの依頼って事らしい。

本当に善意で依頼出してくれてるんだなあっていうのが解る。

取り敢えず傷んでる所を外して新しい木の板をはめる。

釘を使わなくていいように、パズルの積み木みたいな形に切り出した板を上からはめ込むように当てて、木槌を無理な力を込めずに振り下ろす。

こんこんこん、と小さく何度も振り下ろすのがコツだ。

こうして上手い事はまったら周りに溶かした蠟を流して完了。

冷えた蠟が隙間を埋めて水漏れを防いでくれる。

それに大工さんが修理する時も外しやすくして対処に困らないハズだ。ま、応急処置としては上出来かな？

梯子をおっかなびっくり降りると、お姉さんが出迎えてくれた。

「お疲れ様。はい、ユーリ君もお茶をどうぞ」

「ありがとう、お姉さん」

「んー、ユーリ君はあたしの事名前と呼んでくれないねえ。お姉さん寂しいっ」

「いやいや、まだ名前聴かせてもらってないですから」

「ありゃ、そうだったけ？」

お茶をすすりながら首を傾げるお姉さんを見る。

お姉さんオトボケキャラだなあ。

まあ、そんな所もかわいいんだけどね。

「あたしはティスカ・ウアー・ロ。本命はティス姉、対抗でティスちん、大穴はていていお姉ちゃんはどう？」

「どう？と言われましても」

「やん、ユーリ君敬語禁止っ」

「えっと……これでいい？ ティスカさん」

「そんな他人行儀じゃなく、もっと愛情と情欲を込めてお姉ちゃん
って呼んで」

「情欲って……じゃ、じゃあ、ティス姉」

「はうん、もっと呼んで！」

くねくねと体を悩ましげによじって悶えるティス姉。

なんだろう、色んな意味で危険な人だ。

テンション高いなあ。

ちよっぴり引いてたらミナが様子を見に出て来た。

ミナには僕の作業中に依頼人のお婆さんの話し相手になってもらっ
ていたんだ。

「ユーリ、もう出来たの？」

「うん、あれでしばらくは大丈夫だと思うよ」

「さすがユーリ、えらいえらい♪」

ミナの小さな手で頭をくしゃくしゃ撫でられる。

いっつも撫でる側だからかすごく新鮮だ。

なんだか癖になりそう。

「おやおや、もう終わったのかい。ご苦労様」

「あ、お婆さん。応急処置って事だったので周りの板はそのままに
してありますから、大工さんの仕事に影響は出ないと思いますよ」

「若いのにしっかりしてるねえ。ほれ、ギルドカードを出しなさい」

ギルドカードを差し出すと、お婆さんの手が白く光り出した。すぐに光は収まり、ギルドカードを受け取ると情報が頭の中に浮かび上がる。

『依頼内容、屋根の修理。進行状況、完遂』

これを受付に持って行ったら晴れて依頼完了って訳だ。つまり初仕事は無事成功。達成感でいっぱいになった僕は足取りも軽やかに冒険者ギルドへと戻った。

「はい、依頼完了を確認しました。お疲れ様でした、こちらが報酬の銅貨3枚です」

受付のお姉さんから銅貨を受け取ると、感動が胸に込み上げてきた。初報酬を手に入れた！

頭の中でファンファーレが鳴り響く。

後ろでミナとティス姉が拍手してくれた。

あ、そうだ。ついでに魔法付呪って仕事になるか聴いてみよつと。

「あの、お姉さん。ちょっと聴きたいんですけど」

「はい、なんででしょう？」

「魔法付呪って仕事になりますか？」

それまでザワザワと賑わっていたギルド内が一瞬で静まり返る。

え、僕今ザ・ワールド使った？

受付のお姉さんは「少々お待ち下さい」って言って、固まった笑みを浮かべたまま2階へとダッシュして行った。

もしやと思うけど僕盛大にフラグ立てた？

なんか小さな声で「あんな子供がか？」とか「今の内に連れ出す？」とか不穏な相談をしているのが聞こえる。

そんな空気を感じ取ってか、ミナが少し怯えるように抱き付いてきた。

目を合わせて、心配無いよって微笑む。

——これはまずったかなあ。なんかハイエナの群れに投げ込まれた羊の気分。

聴き方が明らかに付呪出来る人の聴き方だったしなあ。

来る途中でさり気なくティス姉に付呪の価値や常識を聞き出せば良かった。

と、2階から受付のお姉さんが急ぎ足で降りてきた。

「お待たせしました、こちらについて来て下さい」

言葉少な目に先導するお姉さんの後ろを慌てて追いかける。

ミナは僕の手をぎゅって握って離さないしティス姉はなにやら思案顔。

案内された部屋にはソファアールと執務机が置いてあって、難しい顔をした恰幅の良い男の人が待っていた。

多分、この人が責任者かな？

「どうぞ、掛けて下さい」

「あ、はい、失礼します」

促されてソファアールに腰を下ろす。

僕の左にミナが抱き付くように座り、右側にティス姉が足を組んで座る。

「まずは自己紹介させてもらいましょう、私はこの街の冒険者ギルドの責任者、トレスキンと申します」

「僕はユーリと言います。こっちはミナ、僕の……まあ、婚約者だと思って下さい」

「あたしはただの付き添いだから気にしないでいーよ」

「相変わらずだな、ティスカ」

色々説明が面倒だしミナを僕の婚約者という事にした。

それでいいかな？って目を向けると、ミナは僕に任せてくれるみたいで小さく頷いてくれた。

ティス姉はどうやらトレスキンさんと知り合いみたいだね。

こほん、と咳をしてトレスキンさんが僕に向き直る。

「それではユーリさん、聞いた話では貴方が魔法付呪が仕事になるか、と尋ねたそうですが？」

「はい、尋ねました」

「それは何故ですか？」

「何故、とはどういう意味でしょう？」

「魔法付呪が出来る人は何もせずとも、その特異性故に大金を手にする事が出来る。何故なら魔法付呪された装具は非常に貴重な物だからです。故に魔法付呪された装具を求める者は多い。1つの装具の為に争いが起こる程です。それをわざわざギルド内で不特定多数の者に聞かせた、その真意を聞きたい」

わーお、実はトレスキンさんプチ切れしてない！？

プレッシャーが半端ない。

僕の予想以上に魔法付呪はレアスキルだったみたいだ。
ともあれ、誤解を招いたようだし素直に謝っておこう。

「申し訳ありません、魔法付呪にそれ程の価値があったとは夢にも思わなかったのです」

「ほほう、あの言葉が何を意味するのか知らなかったと？」

あるえー、逆効果！？

てかトレスキンさん僕の事全く信用してないし！

緊張と圧力で焦っていると、突然ミナが立ち上がってトレスキンさんを正面から見据えた。

「その事については私が説明します」

「君がかね？」

「はい、私の知るすべてをお話します」

何を、と思ったら、ミナは僕に振り向いて微笑んでみせた。
小さく口が動く。

『だいじょぶ』

やっと僕はミナが何をするつもりなのか理解した。

ミナは、僕の代わりに矢面に立ってトレスキンさんから僕を守るつもりなんだ。

情けない。

自分自身の情けなさに反吐が出そうだ。

こんなにちっちゃい体で、僕を一生懸命守ろうとするミナに対して
申し訳無さや恥ずかしさが込み上げてくる。

握られた右手は、微かに震えている。

僕はミナに、ありがとうって伝えたくて、左手できゅっと握り締め
た。

「ユーリは一週間前にこの国に来ました。前はユーリを拾って育て
てくれた人と、たった2人で暮らしていたそうです。だからユーリ
はこの国の常識や魔法や生活のちしきがありません。さっき受付で
お姉さんに言った事も、本当に知らなかったから出た言葉です。ユ
ーリは人をだましたり傷付けたりしない人です！」

「それはそれは。俄かにはとても信じられない話だがね」

「首都にある魔術師ギルドに、ナカシュという人がいます。その人に確認して下さい。ユーリのすじょうを知っている1人です」

ナカシュの名前が出た途端、トレスキンさんの眉間にシワが寄った。確認の為に姉さんに向かってせよとしたのをミナが呼び止める。

「ユーリの事をたずねる時に、魔法付呪の事は言わないで下さい。ユーリを利用しようとする人がいるかもしれません」

その言葉で、ナカシュの上司の人を思い出した。

確かに僕が魔法付呪出来ると知ったら嬉々として乗り込んで来そう
だ。

でも僕は、そんな事は気にする事さえ出来なかった。

凜とした態度で僕を弁護してくれたミナに、心底見惚れていたんだ。
真剣な横顔に、僕の為に言葉を紡ぐ姿に、冷静で回転の早い頭脳に、
震えながらも退かない強い意志を感じさせる瞳に。

5分か10分か、それとも一瞬にも満たない時間か。

ミナに見惚れていた僕は、お姉さんが部屋に戻ってきた音で意識を
取り戻した。

「確認しました。確かに、ミナさんの言う通りユーリさんは特殊な
事情をお持ちのようです」

「そうか。……ミナさん、ユーリさん」

その声にびくつと震える僕達に、トレスキンさんは頭を下げた。

「疑ってしまい申し訳ありませんでした。確認の取れた今、正式に謝罪させて頂きたい」

「あ、頭を上げて下さい。僕もちよつと不注意でしたし」

「トレスキンさん、それならお願いがあります」

僕の言葉を遮って、ミナが口を開いた。

「これから起こる、他の人達がユーリにする行動への対策と一緒に考えてもらえますか？」

「それでしたら、是非お手伝いさせて頂きたいと思います」

振り返ったミナは僕の唇に指を当てる。

任せて、って目が語ってた。

その仕草に不思議と胸が高鳴る。

「ではユーリさん、貴方が付呪出来るのはどのような魔法ですか？」

「はっ、はいいい！？あ、僕が知っている魔法はファイヤーとライブだけです」

思わず声が裏返っちゃった。

その反応にミナがクスクスと笑いを零す。

「知っている、というのは？」

「そのままの意味で……僕が聞いた事のある魔法はその2つだけなんです」

「ねえ、ユーリ君。今朝使ってたのは魔法じゃないの？」

突然、それまで黙っていたティス姉が口を開いた。

今朝使ってたって……あ、もしかして狼相手に実験してたの見られてた？

「あれは、なんて言うか……僕が勝手に創作したやつだから」

「は、創作!？」

「ユーリ、朝何かやってたの？」

「う、うん、昨日狼が出るかもって聞いたから実験してたんだ。髪の毛長くなってきてたから、ちょっと前髪切ったやつにファイヤーと創作の追尾魔法を付呪して、狼を驚かせようとしたんだ」

「あ、それで前髪短くなってたんだ」

「い、いやいやっ!?! 2つも付呪とか普通じゃないから!?!」

ものすごいティス姉が驚いている。

なんだろう、またフラグ立てた気がする。

せっかくだし、僕はここで付呪について整理してもらった。

基本的に付呪が出来る人は珍しく、ほとんどが王宮で働いている。その理由は付呪したマジックアイテムを悪用されない為だったり、ライブの杖みたいな有用な品を安定して供給する為だったり、付呪出来る人を保護する為だったり。

付呪には専用の道具が必要で、魔力をかなり消耗するから付呪出来るのは1日に1個が限度だったりする。

更に付呪は1つの装具に1つの魔法しか組み込めない。

一番安価な発光の付呪でも、装具に付呪するだけで銀貨10枚、付呪された装具の相場は銀貨12枚だそう。

ライブの杖なんかは治療が目的だから銀貨2枚くらいで国が販売してるらしい。

こんな所かな？

魔法の創作うんぬんに関しては……発想と想像力を元にやったら偶然出来たって事にして誤魔化しておいた。

口の堅いギルドの人とはいえ、まだそこまで信用出来ないからね。取り敢えず僕の付呪に関しては、ライブだけ付呪出来るって事にし
て広める事で決まった。

下手に隠すよりは大っぴらにそこまですごくないって言った方が追求されないらしい。

それに攻撃系の付呪じゃなく治癒系の付呪なら、よからぬ人達に目を付けられにくいだろうって思惑もあるみたいだ。

ついでに僕の付呪行為に関してはギルド預かりにした。

僕への依頼はギルドを通して行う事で、余計なリスクを減らす為だ。そこまで話して、僕はやっと自分やミナがどれほどの危険に晒されているか気付いた。

一時話し合いを中断して、部屋を借りて誰も部屋に近付けないようにしてもらい、ミナを守る為の付呪を組み込む事にした。

「ミナ、何に付呪しようか？」

「ユーリがくれた、この指輪はどう？」

「うん、いいよ。ちょっと借りるね」

ミナから指輪を受け取り、思い付く限りの加護を与えていく。
耐熱、耐寒、耐衝撃、耐電、耐風、耐震、耐刃、耐弾、耐爆、耐毒、

耐煙、耐圧、耐水、耐音、耐霊、耐光、耐魔法、耐武器、耐臭……
そろそろ耐がゲシュタルト崩壊してきた。

他にもミナに対して悪意のあるもの、敵意のあるもの、害意のあるもの、健康を害するもの、怪我を負わせるもの、不快にさせるものなんかを弾くようにする。

真空、深海、高熱、低温等の人体に悪影響を及ぼす環境に対してもブロックするように調整。

効果範囲はミナの両手を広げたくらい。

言うなれば無敵バリアーだ。

やり過ぎ？ミナの為なら何だってするさ！

完成した指輪をミナに返す。

「これで大丈夫だよ」

「ありがと、ユーリ」

「お風呂の時も外さなくていいように改良したんだ。試しに消えろって念じてごらん」

「んっ……おゝ、消えたよユーリ！」

「出す時は出ろって念じれば出るよ」

「おゝ、便利だぁ」

左手をにぎにぎして指輪を出したり消したりするミナ。

ようやく一安心して肺の空気を吐き出す。

これで誰もミナに手出しは出来ない。

誰にもミナを傷付けさせるもんか。

不意に頭を抱きかえられた。

顔を上げると、困ったような寂しいような、そんな笑みを浮かべたミナと目が合った。

「ユーリ、もうだいじょぶだよ。こわくない、こわくない♪いいこいいこ♪」

「ミナ……?」

「だいじょぶだよ。私はどこにも行かない、ずっとユーリの側にいるから。ユーリが私を守ってくれるみたいに、私もユーリを守るから。だから、怖がらなくてもいいんだよ」

その言葉で、張り詰めていた糸が切れたような、そんな気持ちがした。た。

ゆっくり、僕が抱え込んでたもやもやが溶けていく。

——そっか、僕は怖がってたのか。

家族を失って、異世界に放り出されて。

ミナやシーナ、エアリィさんに出会って。

また人の優しさに触れて、離したくないって思っ

自分の不注意でミナを危険に晒して、ミナを失うかもしれないって気付いて。

体から力がすんと抜ける。

「よしよし、いいこいいこ。落ち着くまで、こうしてるから」

小さな手が僕の頭を撫でる。

不思議と安らぎをくれる手に甘えて、しばらく僕はミナに抱き締め

てもらった。

ギルドで一悶着ありました。（後書き）

色々と難産でした。

最後の方は文体が混乱しています。

今回は後で黒歴史認定なお話になりそうです。

初めて、恋をしました。

ギルドでの付呪についての話し合いを終えて、僕とミナは宿屋へ帰ってきた。

色々とハートブレイクしてた情けない僕の代わりに、ミナがその辺の話を詰めてくれた。

僕的能力を見極める為に5つ程ライブ——正確には自動回復を付呪した指輪を作り、その引き取りとこれからの仕事の手付け金として、金貨3枚を収入として得た。

庶民の1日の食費が銅貨15〜20枚だから……と、取り敢えずいっぱい食べられる額だ。

それと、あの後から部屋に帰るまで、ずっとミナに手を握ってもらっていたのは内緒だ。

さっきまでの幼児退行してた僕は黒歴史行きです。っていうか幼児退行多いな！

でもまあ、ミナに撫でてもらえるならたまには幼児退行もいいかもしれない。

ティス姉は気を使ってくれたのか、飲食街へと消えて行った。

去り際に「たらふく食うぞ」って言ってたけど……気を使ってくれたんだよね？

自信無くなってきた。

そして今、僕には新たな問題が。

問題っていうか、自分でもよく解らないんだけど。

——ミナの顔が見れないっ。

部屋に戻って一休みしたら、何故かミナを正面から見れなくなって

た。

なんだかよく解らないけど、ミナと目が合うと息が苦しくなったり胸が苦しくなったりする。

呼び掛けようとしても、

「み、ミナ……？」

「なあに、ユーリ？」

「あ、えっと……なんでもない」

胸が詰まって何も言えなくなる。
なんでだろ？

ミナの指輪に付呪した効果が僕にまで影響してるのかな？
理由は解らないけど、このままじゃまともに会話も出来ない。
どうしたもんかなって考えてたら、ミナの方から声を掛けてくれた。

「ねえユーリ、お腹空かない？」

「う、うん、そうだね。どっ、どこか食べに行こうかつ」

ミナの声を聴くだけで心がふわふわ飛んでいきそうになる。
普段ならすらすら言える言葉もつかえつつかえになって、最後の
方は声が裏返ってた。

困惑する僕にミナが抱き付いてきた。

左腕を組まれ、くりくりとした愛らしい目が僕を見上げる。

「じゃあ行こ、デートデート♪」

デート。

さっきは普通に口に出来た言葉が、やけに特別なものに感じる。ほっぺ所か耳まで熱くなつて、僕は壊れた人形みたいに首をかくかくと振る事しか出来なかった。

ミナに腕を引かれ、部屋を出て飲食街へ向かう通りへ。

なんなんだ、このワクワク感は。

組んだ腕に伝わる温もりに3割、指を絡めるように繋いだ柔らかな手の感触に5割、立ち上る甘い香りに1割の意識を持ってかれる。

「おいし〜ね、これ♪」

「え、あ、うん」

知らない間に屋台で買い物していたみたいで、僕の手には鶏肉とレタスらしき野菜を挟んだパンのような料理が握られていた。

かぶりつくと、白いピリ辛のソースが溢れ出す。

でも味は全然解らなかった。

もぐもぐと妖しく動くミナの唇は美味しいのかもしれない。

そんな事を考えてたら、ミナが僕に顔を寄せてきた。

長い睫毛も、澄んだ瞳も、美術品みたいにすごく綺麗だ。ぺろり。

唇の端に、湿ったものが触れる。

「にへへ、おいし♪」

いたずらっ子みたいに笑うミナ。
何をされたのか理解した途端、急激に顔の温度が上がっていくのが解った。

——いつ、今、僕の唇に、ぺ、ぺろって!?

あうあうと口をぱくぱくさせる僕の手を握って、ミナは歩き出した。慌てて横を歩きながら、味の解らないパンを口に押し込む。
ふらふらと幾つかの露天を冷やかして、僕とミナはアクセサリーショップに入った。

ミナはキラキラした目で、猫の置物や食器を見つめる。

「わぁ、かわいいねこれ」

「そ、そうだね」

正直見てなかった。

猫グッズにはしゃぐミナしか、僕の目に入らなかったからだ。

ぐるっと店内を見て回って、そろそろ出ようになって思った時に、それに出会った。

棚の端に置かれた小さな髪飾り。

かわいらしい花びらの部分に濃緑の宝石が飾られてあって、不思議と目が離せなくなった。

そんな僕の元に店員さんがやってくる。

「お気に召しました?」

「ええ、ミナに似合いそうだなんて」

「元の花と宝石にはそれぞれ特別な意味が込められているので、贈り物として買われるお客様もいらっしゃいます」

「特別な意味？」

「ええ、花言葉と宝石言葉とでも申しましょうか。それぞれ『純愛』と『献身』で、併せれば『私の気持ちを貴方に捧げる』と言った意味になります」

私の気持ちを貴方に捧げる……な、なんだか恥ずかしいな。

ミナにこれを贈ったら変な意味に取られないだろうか。

そんな葛藤を感じ取ったのか、店員さんは薄く笑って言った。

「日常の感謝として贈っても大丈夫ですよ。花言葉や宝石言葉は数多くありますし、普段から気にしている方は少ないですから」

「そ、そうですね。……じゃ、じゃあコレを下さい」

「お買い上げありがとうございます」

銀貨20枚を払って懷にしまう。

あ、でもコレいつ渡そう。

また1つ悩みが増えた瞬間だった。

その後もミナと2人で北の広場にある噴水で遊んだり、中央広場の教会を見学したり、色々と歩き回った。

笑ったり驚いたり、素敵な表情を見せてくれるミナ。

僕はチラチラとミナを見て、ミナが「なあに？」ってこっちを見たら慌てて視線を逸らして、しばらくしたらまたチラチラとミナを見ていた。

変に思われてなければいいなあ、って思ったけど、そんな僕を見てミナはクスクス笑っていた。

——ああ、やっぱりミナはかわいいなあ。

日も傾いてきたから今日は散策終了。

宿屋に戻ってソファで寛いでいると、隣に座るミナが突然僕のほっぺをつつき始めた。

むにむにむに。

やわっこい人差し指の感触にドキドキしながら、目だけミナに向ける。

「じーっ」

なにやらすごい見られてた。

照れくさくなって目を逸らしたら、回り込んで僕の間を見つめる。

さっと目を逸らす。

とてとて回り込むミナ。

目を逸らす。

とてとて。

さっ。

とてとて。

ささっ。

がしっ。
捕まりました。

——な、なんだろう、怒らせるような事しちゃったかな？

恐る恐るミナの目を覗き込む。

そこには怒りの色は無く、ただ嬉しそうに僕を映す瞳があった。
綺麗な瞳に心を奪われて固まる僕。

さっきまで街の賑わいや鳥のさえずりが聞こえていたのに、今は痛いくらいに何も聞こえない。

時間が僕を置き去りにしたんじゃないかって思うくらい、僕の世界は止まってしまった。

『——ッ』

音がした。

本当に小さな、音。

『——ドッ』

知っている。

この音を、僕は知っている。
心臓の音だ。

『ッ、ドッ、ドッ』

胸元で、掌で、足先で、腰元で、耳の裏で、喉の奥で、或いは――
全身で。

僕の世界で1つだけ動きを止めずに、その存在を主張している。

『ドクッ、ドクッ、ドクッ』

音色は、まるで僕を急かすように。
うるさいくらいに鳴り響く鼓動が僕の体を支配していた。

『ドクンッ！ドクンッ！ドクンッ！』

目の前の女の子が、愛しい。
それしか考えられなかった僕は、そっと頬に添えられた手を外して
立ち上がった。

「かつ、顔洗ってくるっ！」

そのまま一目散に部屋を飛び出した。
背後からはミナの「もうっ」って呆れを含んだ、どこか嬉しそうな
声が聞こえてくる。

帳簿を付けていた女将さん呼び止め、冷水を張った桶を用意してもらった。

宿屋の裏にあるこじんまりとした庭で頭から冷水を被る。

何度か冷水に頭を浴びせて、ようやく僕の思考も落ち着きを取り戻した。

まだ頬や耳は熱いけど、自分の気持ちに向き合うだけの余裕は生まれたみたい。

――僕は、僕は。

「僕は……ミナに恋をしたんだ」

言葉にすると、スツと今までの感情を受け入れられた。

あのドキドキもふわふわも、全部ミナが好きだから。

顔を真っ直ぐ見られなかったのも、咲き誇る笑顔にずっと見惚れていたのも、触れ合った手を離したくないって思ったのも、全部。

「……よしっ」

懐にしまった髪飾りを撫でる。

まだドキドキは残ってるけど、このドキドキも全部ミナにぶつけてやるんだ！

結果なんて、今はどうでもいい。

僕がミナを好きだって気持ちを、全部伝えたい。

宿屋に戻ると、びしょ濡れの僕を見て女将さんはニヤツと口の端を

吊り上げた。

女将さんは何も言わずに、背中をバシッと叩いた。

お礼を言って階段を駆け上がる。

ほんのちよつとの距離なのに、ミナの待つ部屋がすごく遠くに感じる。

廊下を駆け抜け、勢いよく扉を開け放った。

「ユーリ、わ、どうしたの!？」

びしょ濡れの僕に目を丸くする。

タオルを取りに洗面所へ向かおうとするのを制して、僕はお姫様に片膝を着く。

僕の行動に混乱するミナに、僕は自分の気持ちをぶつけた。

「ミナ、僕の話聞いて欲しい」

「な、何、ユーリ？」

「僕は……僕は、ミナが好きだ!」

突然の告白に再度目を丸くするミナ。

構わず、僕は言葉を続けた。

「今日、やっと解ったんだ。どこへ行っても、何をしてても、僕はずっとミナを追っていた。ミナの笑顔が見る為ならなんだってする、ミナが喜んでくれるならどんな事でもしてあげたい。もし僕がお爺さんになっても、ミナが隣で笑っていてくれれば、後は何もいらな

い。僕はミナの事が好きだ、大好きだ！ミナ、僕と――僕と結婚を前提に付き合って下さい！」

懷から取り出した髪飾りを、ミナへ差し出した。

言い切るのと同時に頭を下げたから、ミナの表情は解らない。

1分か2分か、30分か10秒か。

時間の感覚が無くなっている僕は、永遠に近い時間が過ぎ去ったように思えた。

――もしかしたら、ミナは髪飾りを受け取ってくれないかもしれないかもしれない。

そんな暗い、泣き叫びたくなるような不安が胸を横切ろうとした瞬間、僕の手は温かいものに包まれた。

見なくても解る、優しい小さな手。

弾かれたように顔を上げると、満面の笑みを浮かべたミナが、そこに立っていた。

頬には一筋の光が伝っている。

髪飾りを受け取ったミナは、そのまま僕に抱き付いて言った。

「ユーリのバカ、バカバカばあか」

「ゴメン」

「そこで謝るユーリはもつとおバカ。私は逢った時から、ユーリの事を好きって解ってたのに」

「ゴメン」

「ゆるしてあげないもん、ユーリと結婚して、たくさん子供産んで、

ユーリがおじいちゃんになって死ぬ時までゆるしてあげないもん」
「うん」

「でもユーリが死んだら悲しいから、やっぱりゆるしてあげない」

「じゃあ、生まれ変わったらまた、ミナに逢いに行くよ」

「逢いに来るだけ？」

「まさか。もう一度言うんだ、僕と結婚して下さいって」

「ユーリを待ってたら、私おばあちゃんかもしれないよ？」

「構わないよ。ミナがおばあちゃんだったら最期の時まで側にいて看送ってあげる。その後、生まれ変わったミナを探し出して、大きくなるまで待って、もう一度告白する」

「なら、ゆるしてあげる」

少し体を離して、目を閉じて僕を見上げるミナ。

その柔らかな唇に、僕の唇を重ねた。

今日僕に、優しくてかわいくて小さな――世界一のお嫁さんが出来た。

夢見心地だった僕達を現実に戻したのは、背後で起きたドタバタという何かが倒れる音。

びっくりして振り返ると、数人の若い女性や女の子がひしめき合って床に倒れていた。

一番下で潰れていたのはなんと宿屋の娘さん。

なんでもびしょ濡れになった僕を見掛けて女将さんに訳を聴いたら居ても立ってもいられず、仕事を放り出して覗き見していたらしい。

それを見た他の宿泊客や従業員が集まっていつの間にか出歯亀タワ
ーが。

廊下には更に多くの人が困ったように笑いながら立っていた。

……どうやら僕の一世代の告白は宿屋中に響き渡っていたっぽい。
恥ずかしくて固まっていると、娘さんの頭に女将さんがげんこつを
振り下ろした。

うわ、ごいんって音したよ！？女将さんは僕達に頭を下げると、謝
罪も込みで僕とミナの結婚祝いを一足先にやろう、と提案してくれ
た。

その日の夕食はすごく豪華で賑やかなものになった。

こうして、僕の仕事初日は笑顔と祝福に包まれながら過ぎて行きま
したとき。

ミナとイチャらぶっ。(前書き)

注意・今回から若干えっちな描写が増え始めます。苦手な方はご注意ください。

ユニーク5000突破しました。

ありがとうございます。

こんな駄文で良ければどんどん垂れ流しますので、どうぞご贔屓に。

ミナとイチチャらぶっ。

「ユーリ、起きて、朝だよ……？」

耳をくすぐる甘く耽美な声。

すぐ近くから聞こえた言葉の意味を寝起きで鈍っている頭が理解しようとする。

朝ってなんだっけ、って呆けていると僕の唇に何かが触れた。

「ちろちろ……ちゅ、ぺろっ」

柔らかくて温かいものが触れ、僕の唇を濡らしていく。

鼻を上る蠱惑的な匂いに導かれて、反射的に舌を伸ばした。

舌尖が唇を湿らせていたものに触れる。

ぴくんっ、って怯えたように跳ね上がったそれは、すぐに僕の舌へおずおずと絡まってきた。

伸ばした舌を伝って、蜜が僕の口へと流れ込んでくる。

その味で、僕はやっと状況を理解した。

目を開くと、僕のお嫁さんが小さな舌を僕の舌に絡ませながら、だらしないところ顔を披露していた。

「ふぁん、ちゅ、れろれろ……」

「んっ……おはよう、ミナ」

「にへへ、おはよう、ユーリ」

幸せでとろとろになった瞳で僕を見つめるミナ。

そっと抱き締めると、嬉しそうに両足を絡めてきた。

じかに伝わる体温がくすぐったい。

僕もミナも、裸だ。

理由は……その、ごによごによ。

ま、まあ、そういう事だ！

「ねえユーリ、今日はどうしょっか？」

僕の考えが伝わったのか、同じく頬を赤く染めながら口を開くミナ。
優しくその唇を味わいつつ、今日の予定を思い返す。

今日はギルドで付呪の仕事があるくらいで特にイベントは無かった
なあ。

「ちゅ、はむっ、何か適当に仕事探してみようかな」

「じゃあ、んっ、ついて行っても良い？」

「ついて来てくれないと寂しくて泣いちゃうよ？」

柔らかい体をぎゅっと抱き締めてくるっと体勢を入れ替える。

小さなお嫁さんを組み敷いて、2つのぷっくりとしたさくらんぼを
舌で転がしながら、僕はいたずらっぽい目でミナを見上げた。

「でも出掛けるのはミナをもっとかわいがってからでもいいよね？」
「ふぁっ♪うん、私の体、ユーリでいっぱいにしてえ、あふれるくらい、しよお♪」

結局出発したのは2時間後。

ぽっこりとお腹を膨らませて幸せそうに痙攣するミナを撫でながら、溺れてるなあって気付いた僕だった。

「もう、ユーリきちくすぎい」

「えー、だってミナも離してくれなかったじゃん」

「あんなにカッコいいセリフ言ったのに、たった1日でガマン出来なくなって私にいっぱいそそぎ込むんだもん。きちくきちくう♪」

「ううっ、ミナがいじめる」

「いいこいいこ、なでなで♪」

「わあい、ミナ大好き……って、アレ？ いじめたのミナじゃない？」

「バレちゃった？」

「だましたなあ、がおー！」

「わあ、ユーリが怒ったあ♪」

ギルドの喫茶店の一角を占領してイチャイチャらぶらぶし始めた僕とミナを、信じられないものを見たような表情を浮かべて凝視するティス姉。

口に運ぼうとしたパスタがずり落ち、テーブルの上でカランと音を立てるフォーク。

僕達の余りの変貌ぶりに、開いた口が塞がらないという言葉を体現している。

でも僕はミナとイチヤイチヤらぶらぶするのに忙しいから構ってあげられないんだ、ゴメンね。

焼き菓子をつつまみ、ミナの口元に持って行く。

「はい、あーん」

「あーん♪」

「口の端に欠片が付いてるよ？ぺろっ」

「んやあっ♪」

「ああ、もうっ、ミナはかわいいなあ」

膝の上に乗せたミナの口の端を舐めると、焼き菓子の甘さとミナの匂いが脳を刺激する。

しばらくミナの唇を堪能していると、受付のお姉さんがやってきた。右手には依頼書、左手には2種類の付呪用の指輪が入った籠を持っている。

「ユーリさん、ミナさん、ティスカさん、おはようございます。ユーリさん、こちらが今回の依頼書です」

「おはようございます。じゃあ早速やっちゃいますか。ティス姉、行ってくるね」

「う、あ、えん」

受け答えが怪しくなってるティス姉はさて置き、お姉さんに先導されて2階の角部屋へと向かう。

勿論ミナと手を繋ぎながらだ。

角部屋に入り質素ながら気品の漂う椅子に腰掛ける。

お姉さんは付呪用の指輪を僕に見せて、問題が無いか確認する。

「ライブを両方に付呪して下さい、但し片方は意図的に効力を下げるようお願い致します」

「了解、すぐやっちゃいますね」

僕は指輪を手に取り2秒くらいで付呪を終え別の指輪に手を伸ばす。1分もしない内に自然回復量増加がエンチャントされた指輪が出来上がった。

イメージとしては5秒で総HPの1%を回復するのと、10秒で総HPの3%を回復する2種類。

だいぶ性能落としたけど、それでもかなり良質なエンチャントに分類されるらしい。

付呪による消耗も微々たるものだし、たった1分で金貨20枚だなんて、随分とぼろ儲けしちゃったなあ。

ほくほく顔で指輪をお姉さんに渡すと、1つ1つ確認して良い出来だと頷いてくれる。

「これで依頼は完了ですね、ありがとうございました。こちらが報酬の金貨20枚です。必要量は揃いましたのでギルド側からの依頼はしばらく無くなりますが、今後は付呪された装具をお持ち頂ければその都度買い取りさせて頂きます」

1階に戻ると依頼受付に長蛇の列が出来ていた。

依頼受付は依頼掲示板の奥にあって、文字通りギルドに依頼を出す受付だ。

依頼人はギルドに依頼の概要と期間、報酬なんかを伝えて依頼掲示板に自分の依頼を張り出してもらう。

普通ならワイバーン退治とか失われた秘宝の搜索とかの高額報酬が期待出来る依頼が出た時に、依頼掲示板に一獲千金を目指すパーティーが刺さってるんだろうけど、一体何で依頼受付に？

ギルド職員のお兄さんが忙しく依頼掲示板に依頼を張り付けていくのに興味を引かれて、掲示板を覗き込んだ。

分類先は採集、収集の板。

昨日は4、5つくらいしか張り出されていなかった掲示板が、今日は端から端までびっしり埋まっている。

その中の1つを手に取り読み上げ……ミナに読んでもらった。文字の勉強もしなくちゃなあ。

「依頼内容、装具への付呪。報酬は銀貨40枚、だって」

「へっ？」

「昨日の騒ぎを見て、みんなユーリ君に依頼を出してるのさ」

いつの間にか後ろにやってきたティス姉がつまようじをシーハーさせながら答えてくれた。

お行儀悪いですよ。

「みんな直接頼もうとしてたけどギルドの方から盛大に釘を刺されてねえ。これなら文句無いだろうって事で、みんな依頼受付に殺到してる訳さ。しっかり付呪の報酬が銀貨40枚ぼっちで受けると思ってるんだろうかね？」

呆れ顔で僕の頭に溢れんばかりのおっぱいを乗せるティース姉。
昨日の僕ならあわあわしてただろう。

でも今はかわいいお嫁さんがいるから僕の心は揺れ動きません！
ぷにぷに。

動きませんよ？

ぽよぽよ。

動かないってば。

ぱふぱふ。

……でへへ。

「めっ」

「いだっ!？」

だらしなくニヤニヤしてたら、ミナにおでこを刺された。
触ってみたら皮膚がミナの爪の形にへこんでる。

ぷっくりほっぺを膨らませて、僕をむっとした目で見上げるミナ。
そのほっぺをつんつんつついてみる。

「ミナ？」

「っーん」

「ミナちゃん？」

「っーん」

「みーちゃん？」

「っ、っーん」

お、みーちゃんって呼び方はちよっぱり気に入ったみたい。
昔妹が見つけて来たぷちツンデレの猫にそんな名前を付けて遊んだ
のを思い出した。
前から抱き締めてほっぺをつんつんしながら耳元で囁く。

「みーちゃん」

「ぷ、ぷいっ」

「こっち向いたらキスしてあげる」

その言葉に顔を真っ赤にして固まるミナ。

こっちを向こうとするけど、一応怒ってるんだよってアピールもし
てる訳だからそっぽを向かないといけない。

うーうーとかわいらしい唸り声をあげるミナをもっといじめたくな
るけど、それよりも早くミナの笑顔が見たい。

すっかりミナの虜だなあ、って他人事みたいに考えながら僕は口を
開いた。

「ゴメンね、ミナ。僕はえっちだから色んな女の子に目移りしちゃ
うけど、僕が一番好きなのはミナだけだから」

「そ、そんな事言ってもダメだもん」

「ミナが好きだよ。大好き。かわいいなって思う子がいても、お嫁
さんでいて欲しいのはミナだけだよ」

「う、浮気するユーリの言葉なんか信じてあげないもん」

あにゃ、なかなか手強い。

でもそっぽ向きながらチラチラ僕を見るのは反則だと思えます。
好き好き攻撃でダメだったから今度は泣き落として揺さぶってみよう。

「そっか……嫌われちゃったかあ……」

「え、ゆ、ユーリ？」

突然しょんぼりと落ち込んだ僕に慌て始める。
そっと体を離し、屈んでミナと視線の高さを合わせて力無く微笑んだ。

「ゴメンね、ミナ。本当はずっと側にいたいけど、僕がいたら迷惑だよ。もうミナには近付かないから、安心して。今までありがとう、楽しかったよ。それじゃ、元気でね……」

そのまま肩を落としてとぼとぼ歩き出す。
ギルドの入り口のドアに手を掛けた時、背中にどんと何かがぶつかる。

振り返ったら、目に涙を溜めたミナが僕の腰に抱き付いていた。

「ミナ……？」

「ユーリ、ごめんなさい、ひくっ、もういじわる言わないからあ、ぐすっ、行っちゃだよ……」

「こんな僕でも、ミナの側にいて良いの？」

「いいのっ、ひぐっ、ユーリがいいのっ、ユーリじゃなきゃだあ」

「あぁっ、ミナっ！」
「ユーリい！」

がしつと抱き合い、お互いの温もりを交換して心の隙間を埋め合う。
頬を伝う雫をそっと指で払うと、ミナは飛びっきりの笑顔を見せてくれた。

「あぁ、ミナ……愛してる。世界で一番、ミナが好きだよ」

「私も、ユーリが好き……。ユーリ以外の人がいなくなっても、ユーリさえいてくれれば、いいの」

「ミナ……」

「ユーリ……」

涙を溜めた瞳に誘われて、僕は小さな赤い唇にそっとキスをした。
大好きだよ、って伝わるように優しく何度も、何度も。

「うわぁ……ユーリ君誑しで鬼畜だぁ」

「失敬な!？」

引き気味のテイス姉に思わず突っ込む。
鬼畜はともかく、誑しとはひどい。

「あのセリフは無いわ……ユーリ君って結構軟派？」

「いやいや、あれは昔妹とやったおままごと『嫌いって言ったけど

本当は大好きなの！素直に慣れない私を許して』編のセリフから引用したやつだし」

「なにそのダサいおままごと！？」

「ダサいとは失礼な。僕のかわいくて賢くて天使のような妹が考えたおままごとだよ？正直これをダサいと言うティス姉のセンスの無さに脱帽」

「え、悪いのあたし！？」

「それに僕がミナから離れる訳ないじゃない。ずっと一緒にいるって約束したし、愛するお嫁さんを放ってなんかいられないよ」

「そーそー、私もユーリ大好きだからずっと一緒なの」

「一緒だもんね〜？」

「ね〜♪」

わあい、と笑顔でハイタッチ。

そのまま抱き締めてむぎゅむぎゅ。

ティス姉も解ってないなあ、僕がミナから離れる時はどっちかが死んだ時だけだよ？

すぐ転生して迎えに行くけど。

今のは寸劇はミナも解ってて遊んでくれてたし。

っていうかミナも役者だなあ、とっさに涙浮かべて絶妙のタイミングでやってくれるんだもん。

そんな事を考えていると、ミナはクスクス笑いながら僕の耳に口を寄せた。

「でも、構ってくれないと、本当に泣いちゃうからね？」

その言葉で、僕の心がきゅってなった。

いたずらっぽい目で僕を見上げる姿はいつもと違って、妖艶っていうか大人びた魅力に溢れてた。

誑し込まれているのは、ひょっとしたら僕の方なのかもしれない。ま、ミナと一緒にいられるならいいか。

なんだかんだですっかりミナの虜になっている僕だった。

話が進まないからと強制的に引き離されてしまった僕とミナ。

ああ、手を繋げないのがこんなに苦痛だなんて！

いや、ティス姉挟んだ隣にいるけどさ。

「それで、一体どうしたの？」

「いやさ、ちょっと2人に手伝って欲しい依頼があってね」

「僕達に？」

なんとも齒切れ悪くティス姉が切り出したのは、街の北にある一軒の豪邸にまつわる依頼。

この街に古くからある豪邸なんだけど、ある日幽霊が出るって噂になって誰も寄り付かなくなっちゃったんだ。

取り壊そうにも、必ずアクシデントが発生するみたいで工事が全然進まない。

仕方がないから放置してたんだけど、やっぱり気味が悪いからギルドに街から依頼を出した。

今まで色んな人がどうにかしようって挑んだらしいんだけど全部失敗、巡り巡ってティス姉の所にお鉢が回ってきたみたい。

ただ、1つ問題が。

ティス姉は幽霊の類いが大の苦手で、とても1人では対処出来ないって事で僕達に手伝って欲しいんだって。

「って訳なのさ。お願い、手伝って？」

「僕は大丈夫だけど、ミナはどうする？」

「私も平気だよ、ユーリがいるもん」

「ありがとっ、恩に着るよ」

承諾した途端キラキラした目で僕を見つめるティス姉。

僕の手を握ってぶんぶん振りたくる所を見ると、相当幽霊が苦手なんだなあ。

「怯えるティス姉もかわいいなあ」

「んえ？」

おっと、口から本音がだだ漏れだった。

ティス姉はちょっぴり頬を赤く染めて、そっぽを向きながら呟いた。

「毎回思うけど、ユーリ君って恥ずかしいセリフ堂々と言うよね」

「だってティス姉本当にかわいいから」

「だ、だからそういうの禁止い！」

照れまくるティス姉。

余り耐性がないのか真っ赤になってる所もかわいいなあ。

ニヤニヤしてたら、照れ隠しなのかティス姉にでこぴんされた。痛かったです。

取り敢えずお昼過ぎにまたギルドで待ち合わせて、それまでは各自用意って事になった。

幽霊退治って何持って行けばいいんだろうか。

掃除機かな？

ま、何よりもまずミナとイチチャイチャしよつと。

え、色ボケのロリコン？

ハハハ、面と向かって賞賛されると照れますな。

靈魂が住まいし廃屋。

どうも、ついさっき7回戦を終えてお疲れモードなユーリです。
ちよっと早めのお昼ご飯を食べて宿屋で休憩してたけど、お盛んな
年頃の男の子と愛らしいお嫁さんが一緒の部屋にいたらやる事は1
つ。

猿か！ってお叱りはごもつとただけど、はっきり言ってミナ相手に
我慢出来る方がおかしいと思う。

気だるい体を起こして、指先に魔力を集中させる。
生まれたのは縦に薄く広がった円環状の水膜、名付けてアクアリン
グ。

これを通り抜ける事で全身の汚れやバイ菌なんかを濯ぐ事が出来る
んだ。

2秒でおっけーな簡易お風呂みたいなものかな。
通り抜けさっぱりした所でミナを起こす。

「ほら、ミナ起きて。そろそろ準備するよ？起きないといたずらし
ちゃうよ」

「あはっ……♪んああ……っ♪」

体を揺する度に小さく跳ねて、軽く絶頂を迎えるミナ。

……ちよっとやり過ぎたかな？

取り敢えずお姫様抱っこして「あんっ♪」アクアリングを潜り抜け
「やらあ、ゆーりのみるく、ながれちゃうう」綺麗になったミナを
ベッドの端に座らせ「ゆーりい、もつとしよお」ダメだ、このまま
じゃまた理性が無くなる。

指先に魔力を集めて沈静化の魔法をミナに掛ける。

悦びに囚われていた顔がちよつとずつ落ち着いていき、くりくりした瞳に理性の光が戻ってきた。

「……ほえ？ ユーリ？」

「おかえり、ミナ。色んな意味で。さ、そろそろ準備するよ」
「え、うん。あれ？」

多少記憶が混乱してるみたい。

無理矢理抑えつけられた感情の推移に思考が追いついていない弊害かな？

沈静化魔法は要改良、っと。

オリジナル魔法はなかなか副作用が強いのが欠点だなあ、と僕は1人ごちる。

昨夜、ミナの初めてをもらった後に痛みを抑える魔法を試しに使ってみたら、ミナがえろえろっ娘になった。

どこをどう間違ったのか、僕が使った魔法は痛みを抑えるのではなく、痛みを快楽に変換する魔法になった。

快楽を倍増させる効果もあったみたいで、早くも4回戦目でミナが僕の上で腰を振り始める始末。

ま、まあすごい気持ち良かったけどね。

試行錯誤の結果、僕のオリジナル魔法には幾つかの法則が見付かった。

まず、創作時に抱いたイメージに結果が大きく左右される事。

痛みを抑える魔法を使う時も、もっとミナを気持ち良くしてあげたって思ったのが効果に反映されたみたい。

今の沈静化の影響も、急に感情が落ち着いたら何が起こったか解らなくなるだろうなあ、ってチラッと思ったせいだ。

今のも充分厄介だけど、それ以上に厄介なのがもう1つの法則だ。

それは、最初に使った魔法の効果がある程度固定されてしまう事。これはまあ、仕方ないっちゃ仕方ない事だけだね。

新しい魔法を創ろうにも、最初に使った魔法を効果の基準にしちゃうから、どうしても微調整くらいしか出来ない。

だから、似たような効果の魔法を創りたい時は微調整に微調整を重ねて、こっそり効果を入れ換えるしかない。

微妙に使い勝手が悪い気もするけど、オリジナル魔法を創れるってだけで満足するべきかなあ。

「ユーリ、準備出来たよ」

思考の世界に意識を飛ばしてる間にミナの準備が終わっていたみたいだ。

ミナが着ている服は午前中に２人で買ってきた、ワインレッドのシヤツと色を合わせたフリルがあしらわれたスカート。

まるでお姫様みたいな気品とかわいさがミナの魅力を存分に引き出している。

ミナはスカートの裾を軽く持ち上げて、くるくると回り始めた。

「にへへ、似合う？」

「うん、すごくかわいい。このまま連れ去ってしまいたいくらいだよ」

「連れ去らなくても、私の体も心も、ユーリ専用だよ♪」

僕のツボを的確に突いてくるミナ。

またベッドに押し倒したくなるのをなんとか我慢して、右手を差し

出す。

「行きましようか、お姫様」

「どこまでもついて行きます、旦那様♪」

僕の手を取ったミナは向日葵みたいな笑顔を見せてくれた。

「お、きたきた。やつほーい」

「お待たせ、ティス姉」

相変わらず食べ終わった皿でバベルを創造している褐色お姉さんの所へ歩いていく。

ホント、この細い体のどこに入ってるんだろう。

……おっぱいかな？

「おっ、ミナちゃんその服かわいくてオシャレ！」

「にへへ、ユーリが選んでくれたんだよ」

「へえー、ユーリ君もなかなかセンスいいじゃない」

喋りながらすごい勢いでお皿の上から料理を消していくティス姉。あっという間にデザートまで平らげて、お皿を返却口まで持って行く。

「なんであれで太らないんだろう？」

「羨ましいなあ……」

「お待たせっ、それじゃ出発……どしたの、2人共？」

疑問と羨望の視線を受けてちよっぴりたじろぐティス姉。

びくってした時に豊かな胸がぶるんって震えてた。

……うん、ミナの胸もあれくらいになるまで揉んで大きくしよう。
取り敢えず詳しい話を聴きながら、その豪邸を目指す事にした。

「今まで依頼受けた人はなんで失敗したの？いくらなんでも腕利きの冒険者なら原因くらい突き止められそうだけど」

「んーと、罠にやられたって報告が1割、不死者にやられたって報告が3割、6割は音信不通で行方不明だね」

「不死者って……ゾンビ？」

「うんにゃ、スケルトンしか確認されてないよ」

その言葉に胸を撫で下ろす。

屍肉の臭い撒き散らされると集中力や思考力が低下してくからね。
視覚的にも辛いし。

内臓がはみ出たまま襲い来るゾンビ……うわっ、肝臓飛び出してるよ！キモッ！

うん、今のは僕が悪かった。

もう少しダジャレも勉強しないとな。

それにしてもスケルトンしかないってのも不思議だね。

普通アンデッドダンジョンならスケルトンだけじゃなくゾンビやゴ

ーストもいるハズなのに。

「ティス姉、幽霊が出るって噂になる前の情報は無いの？」

「ああ、幽霊が出るようになるちよつと前に先代の当主が行方不明になったんだってさ」

「行方不明？」

「詳しい事は解らないけど、ある日突然姿形が忽然と消えちゃったんだって。一部の人は冥界に連れ去られたんじゃないかって」

「冥界？なんでまた」

「晩年、黒魔術に手を出したって話が残ってるよ。それで魂諸共引きずり込まれたって言ってる人もいる」

内心、僕は舌を巻いた。

全体像は見えたけどさあ、余計に気が進まないよこれは。

僕の予想だと、原因は十中八九先代の当主さんだ。

黒魔術を始める理由なんて学者でも無い限り、怨恨による仇討ちか不老不死だ。

多分先代は不老不死の秘術とか思って死霊転生でもするつもりなんだろう。

老衰か服毒自殺した後で霊体を予め用意した器に移して幽霊騒ぎを起こして、家族や使用人、様子を見に来た隣人やギルドから派遣された冒険者の血肉を手に入れてるんだ。

考えるだけでも吐き気がする。

胃から酸っぱい臭いが上がってきた。

と、繋いだ右手を引っ張られる。

「ユーリ、大丈夫？」

「うん、ちょっと気持ち悪くなったただけだから」
「無理しないでね？」

ミナの優しさが胸に染みる。

ただ、このままその邸宅へ向かっていいのだろうか。
少なくともミナは宿屋へ戻した方がいい気がする。

恐らく凄惨な結果が待っている事は間違いないだろうし、向けられる悪意だって半端じゃないハズだ。

そこまで考えて、ミナの指輪に幾つかエンチャントし忘れたのがあった事に気付いた。

慌ててミナに指輪を出してもらい、付呪を重ねていく。

「耐精神干渉、耐幻惑、耐変性……いっその事耐非物理干渉も重ねておこう。それに精神保護、肉体保護、自然治癒、能力維持……あ、そうそう、デイスペル無効も付けておこう。うん、こんなもんだ」

「わ、なんだかいっぱい」

「現時点で考えられる最高の防護付呪してみた」

「ありがと、ユーリ」

お礼にキスしてもらった。

たまりません。

思わず抱き締めて舌入れちゃった。

うん、美味しかった。

「それで、ミナは一旦戻ってもらおうと思うんだ」

僕の予想だけどって前置きして、さっきの想像を話してみる。
2人共すごく沈痛な面持ちだった。

自分の勝手に家族を殺すって事が可能性としてあるだけでも信じられないみたいだ。

ミナは僕を心配しながらも、宿屋で待つ事を了承してくれた。

念の為部屋まで送り届けてから、女将さんに了解を得て宿屋全体に結界を張っておく。

相手が本当に死霊術師ならこれぐらいの対策をして対等なくらいだ。
気を張って邸宅へと足を向ける。

道中、会話は少ない。

流石に幽霊屋敷へ出向くのにピクニック気分ではいられなかった。
北の居住地区の東側へ行くと、目標の邸宅が姿を見せる。

それと同時に空が暗くなり、霧のようなものが立ち込め始めた。
前に進む度に霧は纏わり付いてくる。

全身に鉛が積まれたような重さが襲い、息苦しさを感じる。

「ゆ、ユーリ君、やっぱり帰らない?」

「帰りたいけど、どうやら帰してはくれないみたいだよ」

「え、な、嘘っ!??」

いつの間にか僕の袖を掴んでいたティス姉に背後を示す。

今まで僕達が歩いてきた道は霧に吞まれて掻き消されていた。

幻惑の類だろう、恐らく真っ直ぐ後ろに歩いて行っても、あの邸宅の前に出る。

もう向こうは僕達に気付いたハズだ。

それなら、来たやつを片っ端から吹き飛ばすに限る。

後味は悪いけど、スケルトン相手なら成仏させるくらいの気持ちで

戦える。

だから、僕は敢えて前衛を買って出た。

「ティス姉、戦闘は僕がやるよ。代わりに罠の解除や閉鎖された扉の開錠をお願いね」

「りよ、了解っ」

「さ、行こっか」

この時、戦闘への緊張と高揚からティス姉に防護付呪をし忘れた事が、最悪の結果を招く事になるのを僕はまだ知らなかった。

一步一步、辺りを警戒しながら進む。

まだ通りではあるけど、既に相手方のテリトリーに入っただけで考えた方がいだろう。

100m程進むと急に視界が開け、古めかしい門を構えた邸宅が姿を見せた。

豪邸と呼んで差し支えない程の大きさを誇る邸宅は、今やその輝きを失って久しい。

ここからは更に警戒しなくっちゃ。

ぐっと握った手に力を込める。

ティス姉は僕の左後ろから服の裾を掴んでついて来る。

普段なら癒される所だけど、今はそんな余裕は無い。

錆び付いた門は開かれているけど、なんとなく嫌な予感がする。

「待って、ユーリ君。門の前に糸が張ってある、罨だよ」

そう言っただけ、ティス姉は腰のポーチから小さなナイフを取り出して、門に張られた糸へ投げつける。

ザッ、と門の後ろに溜まっていた落ち葉を掻き分けて、斜めに切り揃えられた竹が門の中程で交差する。

気付かずに足を踏み入れていたら、首が飛んでいたはずだ。

全力で殺しに掛かってくる事実思わず唾を飲み込む。

「ありがとう、ティス姉」

「ううん、罨なら任せて。その代わりしっかり守ってね、騎士様」

「はは、頑張るよ」

周囲を警戒しながら門を潜り抜ける。

どうやら他に罨は無いみたいだ。

地面にも特に変わった所は無い。

——変わった所が無い？

慌てて振り返って錆び付いた門に視線を巡らせると、違和感の正体が解った。

血が付いてない。

さっきの竹には切断面に赤黒い染みが付いていたのに、周りの土や外壁や門には一切血痕が残っていない。

相手が死霊術師なら飛び散った血を回収するから、門や土に血が付

いていなくても不思議は無い。

——なら、なんで竹にだけ血が残ってるんだ？ いや、あれは本当に竹なのか？

その考えに至った時、僕は反射的にティス姉を抱きかかえて前方に跳んだ。

一拍遅れて、僕達が立っていた場所に鈍い殴打音が響く。

「ひいっ!？」

ティス姉が短く悲鳴を上げる。

視線の先では、1体のスケルトンがメイスを打ち下ろしていた。

僕は内心で舌打ちをしながら指先に魔力を込めた。

「ファイヤー！」

放たれた魔力が獄炎となってスケルトンを包み込む。

わずか2秒後には欠片も遺らずに消え失せた。

油断したなあ、罠が発動したら効果を現す術式かあ……大方、落ち葉の中に転がった頭蓋骨の裏にでも彫ってあったんだろう。

もう少し意識を巡らせないといけない。

ホラー系のサウンドノベルをプレイするみたいな心境で捉えないと、こういった仕掛けは見破れない気がする。

それでも考えないと向けられる殺気に精神が耐えられないから、つて理由もあるけどね。

「ユーリ君……」

「あ、ゴメン。とっさに抱きかかえちゃったけど、痛くなかった？」
「う、うん、大丈夫。ありがとね」

横抱きに使っていたティス姉を下ろす。

強く抱き締め過ぎちゃったかな、余裕無くてゴメンね。

取り敢えず、第一関門は突破だ。

ここからが本番だな、って気合いを入れ直して玄関を見据える。

僕達が手を触れずとも、古びた重厚な玄関の扉は耳障りに蝶番を軋ませて僕達を招き入れた。

葬想——初めての恋と、永遠の別れ。

あたしが最初に抱いた印象は、女の子みみたいな男の子。

この国では珍しい漆黒の短い髪と、あたしより少し低い身長。

ちよっと中性的な顔立ちには、美男子とまではいかなけれど間違いなく整っている部類に入る。

声も声変わりしたにしては随分と高めで、声色を変えれば女の子と間違われるんじゃないかな。

ローブを纏ってるから身体の線は見えないけど、肩幅や手の大きさを見る限りは華奢のように思える。

何より変わってると思うのは、彼が纏ってる空気。

普通あの年頃の男の子といえば、やんちゃ盛りで落ち着きが無いってのが相場と決まっている。

なのに彼は年相応の快活さはあるけど、どこか母性……いや父性を感じさせる落ち着きを持っていた。

思えば、この時からあたしは彼に惹かれていたのかもしれない。

ただ接触する事は出来なかった。

一応あたしは商隊の護衛として来ていたから、客人の彼とのんびりしている暇は無かったんだ。

それに彼は、同じく客人として乗っていた少女と四六時中イチャイチャしていたし。

流石のあたしも、あの桃色空間には入り込めなかったよ。

翌朝、私は商隊を取り囲む殺気に気付いた。

恐らく吼狼の群れだ。

群れの長が指示を出し獲物を狡猾に追い詰める狼で、退治するには長を殺すのが効果的だ。

如何に狼と言えど、頭を失えば烏合の衆同然。

警戒しながら長を探すあたしの目に飛び込んできたのは、森の一角を冷めた瞳で眺める彼の横顔。

太陽のような笑顔を振り撒いていた彼が侮蔑的な表情を浮かべていた事に衝撃を受けた。

一体どうしたのかと問い掛けようと思った時、風に乗って彼の呟きが届いた。

うっとおしい、と。

苛立ちを秘めたその言葉に、あたしは震え上がった。

何故、何が？

形さえ整わない疑問が溢れる内に彼は馬車の中に引っ込んでしまった。

様子を見ようと一步踏み出したあたしの耳に、再度彼の呟きが届く。

「チェイサー」

放たれた言葉は聞き覚えの無いもの。

一拍遅れて馬車から何かが飛び出す。

――髪の毛？

漆黒を纏った彼の髪の毛は導かれるように風に乗って、潜んでいたもの達に突き刺さる。

潜んでいたものは吼狼だった。

吼狼に突き刺さった髪の毛は瞬時に獄炎を巻き上げ、一瞬でその肉体を燃やし尽くした。

突然の襲撃と長を失った事で、残った吼狼は我先にと背を向けて逃

げ出した。

彼はその結果に満足したようで、起きた少女と戯れ始めていた。あたしは護衛としての仕事を取られた事に怒りを覚えるでもなく、しばし瞼に焼き付いた彼の横顔に魅了されていた。

彼との再会はすぐだった。

というより、あたしが待ち構えていたんだけどね。

こっそり話を盗み聞きしたら、彼は冒険者ギルドで仕事を探してるみたいだったから、護衛を終えたらすぐさまギルドで待ち伏せしてたって訳。

彼もあたしの事を覚えてくれてたのには、ちよっぴり胸が高鳴った。彼の登録とちよっとした自己紹介を終えて依頼掲示板へ向かう。

どれを受けるのか気になって彼を見ていたら、ミナちゃんが差し出した依頼に決めたようだ。

討伐系かと思いきや、2人が選んだのは雑務系の依頼。

後で受けようかと思っていた依頼を掲示板に戻して、あたしは2人のついて行く事にした。

この時は興味だけで動いてたつもりだったけど、今思えば多少ミナちゃんに嫉妬していたのかもしれない。

彼の寵愛を一心に受けるミナちゃんに。

だからあたしはちよっとだけわがままを言った。

敬語の禁止。

呼び方もティス姉って愛称に変えてもらった。本当はティスカって呼び捨てにされたいんだけど、それはもうちよっと仲良くなっただらだと思う。

何より、彼に呼び捨てにされるのを想像しただけで恥ずかしくなってきたちゃうし。

依頼はすんなり終わった。

男の子らしく工作は好きなのか、すぐに弟子入り出来そうなくらい鮮やかに屋根を修理した姿には、ちょっぴりキュンてきた。

ただギルドに帰って、少し面倒な事に。

彼が付呪の仕事は無いかと遠回しに尋ねたのが原因。

流石に驚いたけど、更に驚いたのはミナちゃんの対応。

今はギルドマスターに収まってるけど冒険者時代は『般若の化身』なんて呼ばれてたトレスキン相手に一步も退かず、彼の潔白を証明してみせた。

ミナちゃんの彼を想う気持ちが力となって溢れ出ているみたいだった。

それを見たあたしの胸に去来したのは、諦念か尊敬か、はたまた恋慕か。

――恐らく、全部。

ミナちゃんを見つめる彼の瞳に浮かぶ感情に、彼の事をこんなにも想う事が出来るミナちゃんの姿に、ミナちゃんの心をここまで魅了し心酔させてしまう彼という存在に。

あたしは彼の一番になる事を諦め、あたしは行動を起こせるミナちゃんを慕い、あたしは彼の見せる深い愛情に惚れた。

この日は彼を追い回す事を諦め、ミナちゃんに任せる事にした。

彼も自分の気持ちに気付いたんだろう、ミナちゃんを熱っぽい瞳で見つめていた。

あたしのような砂漠の民と呼ばれる種族は生涯にたった1人だけを愛し、尽くす。

但し相手に愛する人がいたなら、諦めて別の人を探すという変則的な一夫一妻を強いる掟が存在する。

普通なら掟に従い、彼の事を諦めるのが通例であり、当然の事でも、あたしが彼を諦めるには少し遅過ぎた。

——彼の一番じゃなくてもいい、掟に逆らっても、彼の側にいたい。

そう心に決めた瞬間、ギルド職員があたしを呼び止めた。

思えばこの時、あたしの命運は定まったんだと思う。

翌朝、あたしは昨日退いた事を軽く後悔していた。

目の前には今まで以上にイチヤイチヤする彼とミナちゃんの姿。

2人に何があったのか解り、ちよつと頬が熱くなった。

彼の瞳はミナちゃんしか映っていないし、ミナちゃんは彼の事しか見えていない。

何より、ミナちゃんの未成熟な肢体から立ち上る濃厚な雌の匂いが、その隙間から香る彼の雄の匂いが、それを証明していた。

その匂いに当てられ、お腹の奥が甘くキュウって痺れる。

叶う事ならあたしも彼の雌にして欲しい、この子宮の渴きを彼で潤して欲しい。

彼が2階に消えるまで、あたしは熱に浮かされたように淫らな妄想に囚われていた。

雄の匂いが薄れ、はっと現実に取り戻される。

切ない。

彼が欲しい。

彼に求めて欲しい。

思考さえ奪われたあたしは、少し積極的になる事にした。

戻ってきた彼に背後から抱き付いて頭に胸を乗せる。

たまに彼があたしの胸やお尻を見てたのには気付いてたから、これなら誘惑出来るかも。

よ、喜んでくれるかな？

上から軽く押したり前に回した手で押さえつけてみたり。

と、ミナちゃんが彼のおでこを少しむくれた顔でつついた。

喜んでくれてたみたい。

でもその後の2人の喧嘩……遊び？には色んな意味で驚いた。

「うわあ……ユーリ君誑しで鬼畜だあ」

「失敬な!？」

怒られた。

後でミナちゃんにも聴いてみたら、あれは彼に乗って合わせた冗談みたいなものらしい。

ちょっと安心。

騒ぎが一段落した所で、彼にお願いを申し出る。

内容は、昨日あたしにギルドが持ってきた幽霊騒動の原因究明及び解決。

実は、あたしは幽霊や骸骨といった不死者が大の苦手。なんていうか、無理、生理的に無理。

話を聴くのも怖いし戦うなんて以ての外。
だから彼に是非とも手伝って欲しい、と伝えと彼は快諾してくれ
た。

安堵で、私は胸を撫で下ろす。

嬉しさの余り彼の手を勢いに任せて握った後に、手汗をかいてない
か心配になった。

「怯えるティス姉もかわいいなあ」

「んえ？」

突然のセリフに変な声が出た。

かわいい？あたしが？

彼にかわいいと言われたら、嬉しくて胸が高鳴るけど恥ずかしくて
照れくさい。

だからそっぽを向いて怒ったフリをした。

「毎回思うけど、ユーリ君って恥ずかしいセリフ堂々と言うよね」

「だってティス姉本当にかわいいから」

「だ、だからそういうの禁止い！」

逆効果だったみたいで、彼は眩しい笑顔をあたしに向けてきた。

顔が一気に熱くなり耳まで真っ赤になる。

なんとなく悔しくなって、彼にでこぴんしてやった。

相談の結果、ミナちゃんは宿屋に残る事になった。

理由は途中で彼が話した、今回の幽霊騒動の真相らしき予想。確証がある訳じゃないって彼は言ってるけど、あたしにはそれが真相としか思えなかった。

物的証拠は無いけど、状況証拠は彼の話を裏付けるものしかない。そんな危険な場所にミナちゃんを連れては行けないって事で宿屋まで送り届ける。

その途中で彼はミナちゃんの指輪に付呪をしたんだけど……その量も質も、この世界の法則を根源から覆しそうなものばかりだった。ギルドで話したのはライブだけって事だったけど、彼は明らかに大陸一、いや世界一の術師に間違いなかった。

送り届けた後で気付いた彼はあたしに内緒にしておいて欲しいと頼んだ。

「ティス姉、さっきの付呪についてはみんなに黙っててくれる？」

「……1つ約束してくれたらいいよ」

「僕に出来る範囲の事で、合法的なやつなら何でもいいよ」

む、失礼な。

あたしは何も荒稼ぎしようとか考えてないのに。

ちよつとむくれたあたしは、悪戯心とほんのちよつとの勇気を振り絞って、言葉を紡いだ。

「じゃ、じゃあ、この依頼が終わったらさ」

「うん？」

「あたしと……ううん、あたしをユーリ君の愛人にして」

「へ？あ、愛人っ！？」

「うん、ホントはお嫁さんがいいんだけど……ミナちゃんがいるか

ら我慢する。だから、代わりに愛人。あたしもユーリ君の事気に入っちゃったしね」

照れが入って最後の方は冗談めかして喋ってしまった。彼は少し頬を赤くして、考えておくよ、とだけ言った。照れてる彼もかわいかった。

目的の邸宅に近づくに連れ、口数も減ってくる。

周囲には微かに霧が降り、あたし達の視界を妨げ始めていた。恐怖のせいかな全身が重く感じる。

その感覚で恐怖が増大し、更に足の進みが鈍くなっていった。

「ゆ、ユーリ君、やっぱり帰らない？」

「帰りたいけど、どうやら帰してはくれないみたいだよ」

「え、な、嘘っ!？」

彼が背後を示す。

振り返った先、今し方歩いてきたハズの道は濃霧に包まれ数歩先すら見通せなくなっていた。

彼が言うには、これは結界の一種で例え真っ直ぐ後ろに進んでもあの邸宅の前に出るように細工されているって事らしい。

閉じ込められた。

その事実が、更にあたしの恐怖を煽る。

いつの間にか、あたしは彼の服の裾を握り締めていた。

この手を離したら、二度と彼に逢えない気がした。
慎重に一步一步進んで行くと、目的の邸宅が姿を現した。
不思議な事に周囲に纏わり付いてきていた霧が、邸宅の敷地内には
一切掛かっていなかった。
錆び付いた門は開かれたままで、不気味さをより一層強めている。
更に一步踏み出した時、視界の端で何かが光った。

「待って、ユーリ君。門の前に糸が張ってある、罨だよ」

細い弦が門の下に張られていた。
あれに足が引っ掛かったら罨が作動する。
あたしは彼の服を掴んだまま、器用に片手で収納袋を開き小さなナイフを取り出した。
腰溜めで投擲し、弦を断ち切る。

『ザンッ!』

大きな音を立てて、竹のような外観の仕掛け罨が門の先で交差する。
まるで巨大なトラバサミだ。
この罨も、幾人かの血を吸ったのだろう。
所々に赤黒い染みが付着していた。

「ありがとう、ティス姉」

「ううん、罨なら任せて。その代わりしっかり守ってね、騎士様」
「はは、頑張るよ」

軽い冗談で無理矢理緊張をほぐす。

門を潜り数歩進むと突然彼が振り返り、あたしを抱きかかえて前方に飛んだ。

何を、と思ったあたしが目にしたのはメイスを振り下ろしたスケルトン。

「ひいっ!？」

思わず悲鳴が漏れる。

恐怖に戦くあたしとは対照的に、彼は落ち着いた様子で魔法を放った。

彼の炎がスケルトンを包み、一瞬で灰すら遺さず燃やし尽くした。

凜々しい横顔に、胸が高鳴る。

助ける為とはいえ、あたしは今彼に抱きかかえられていると意識しただけで頬が熱くなる。

「ユーリ君……」

「あ、ゴメン。とっさに抱きかかえちゃったけど、痛くなかった？」

「う、うん、大丈夫。ありがとね」

自分でも信じられないくらい甘い声が出ていた。

彼はあたしをあやすように微笑み、そっと立たせた。

少し惜しく感じる。

とはいえ、ここからは心を引き締めないといけない。

蝶番を軋ませて玄関の扉が開く。

薄暗い室内には冷たい空気が流れ、生者の存在を否定するような気配を滲ませている。

中へ足を踏み入れた途端、背後の扉が勢い良く音を立てて閉まる。飛び上がりそうになるのを意思力で捻じ伏せ、同時に彼を掴み床へ倒れ込むようにして屈む。

『ダダダダッ!』

幾重にも連なる刺突音が響き、一瞬の静寂が戻る。頭上に突き刺さったのは鉄の矢。

恐らく床に圧力板が張られていて、侵入者が上に乗ると同時に扉が閉まり仕掛け弓から矢が発射される仕組みになっていたんだろう。暗さに目が慣れると広間の全体が見えてきた。

左右に2階へ続く階段があり、正面左奥の扉は多分食卓、正面右奥の下り階段は地下貯蔵庫へ続いているのだろう。

不意に視界が明るくなった。

同時に左右から骨の軋む音が聞こえ、カランと長剣だった鉄の欠片が床に転がる。

「罨といいスケルトンの配置といい……首謀者はかなりの悪趣味だね」

彼が呆れを滲ませて微笑む。

一息吐いて立ち上がり、周囲を見渡す。

どうやらこの区画の安全は確保出来たようだ。

彼と話し合った結果、先に2階から調べていく事にした。
階段を上り扉を開けた瞬間、扉の向こうに立っていたスケルトンと顔を合わせた。

「ひううっ!？」

「ファイヤー！」

一瞬で燃え尽きるスケルトン。

恐怖の余り彼に抱き付いちゃったけれど、彼はあたしの頭を優しく撫でてくれた。

ちよっと落ち着いた。

心の中で彼の存在がどんどん小さくなっていくのが解る。

その後も順調に罨やスケルトンを撃退し、2階も残す所後1部屋となった。

罨が無いのを確認して扉を開けると、その部屋は他のものと少し気色が違った。

質素な部屋の中には机が置いてあり、その上には1冊の本が鎮座していた。

罨が無い事を再度確認し、周囲の警戒を彼に任せて本を読み始めた。
この本は先代当主の息子が遺した日記のようだ。

日記には以下のような事が書かれていた。

『王年期334年5月7日――父は最近地下に籠もりがちだ。巷では父が怪しげな魔術に傾倒していると云った噂まで出始めている。
このままでは我が家の名に傷が付くかも知れない。父はもう57だ、そろそろ隠居を薦めてみようと思う。』

王年期334年5月8日——何だっと言うんだ！父にそれとなく家督を自分に継がせるよう進言したら、お前のような奴に私の栄光を渡すものか、と言ってきた。代々受け継がれている先祖の威光に甘えているだけの父に、一体どれ程の栄光や成功が有るものか！気は進まないが、父にはやや強引な方法で交渉のテーブルに着いてもらおう。

王年期334年5月13日——遂に父を説得する事が出来た。此方の誠意を持った対応が功を奏したようで、父は自分の意志で家督を継がせる旨を認めた誓約書にサインをした。去り際に忌々しげに私を睨み付けていたが、あんな痩せ細った体の老人に一体何が出来ようか。この家は今日から無能な父ではなく、この私がより良く導いていくのだ。

日付は無い——ちくしょう！あの老いぼれはとんでもない事を計画していやがった！闇魔法の中でも禁呪指定されていた黒魔術に手を出していたなんて、誰が気付くものか。奴は私達家族や隣人であるアノシユ家の人間を糧に不老不死を手に入れようと画策している。だが奴の思い通りに等させるものか、地下の部屋から抜け出す際にある仕掛けを施しておいた。奴が何体生贄を集めようと、徒労に終わるだろう。ああ、目が霞んできやがった。部屋の外で奴の手先と成り果てた弟だった骸が扉を壊そうとしている。最期に奴の怒り狂う姿を嘲ってやる事が出来ないのが心残りだな』

彼の予想が正しかった事に驚きつつ、日記の内容を伝える。
苦い顔をしていた彼だったが、仕掛けの下りで強い興味を示した。

多分、その仕掛けの謎が解ければ先代を葬り去る手助けになるハズだ。

あたし達は来た道に戻り、地下を目指す事にした。

やはりと言うべきか、地下に向かうに従ってスケルトンの数は増えていく。

貯蔵庫を抜け更に奥へ進むと、壁一面に謎の術式紋様が描かれた一室に辿り着いた。

恐らく、この先が先代の眠る墓所だろう。

「何だろうこの紋様。ユーリ君、解る？」

「ちよっと待ってね。解析の魔法は……サーチでいいか」

呟いて壁面を眺めていた彼の視線が、ある箇所で止まった。

その箇所に手を触れ煉瓦を押す。

低い稼働音が響き、壁が左右に割れた。

広い通路の奥には玉座が控え、錫杖と冠を被った1体のスケルトンが足を組んで座っていた。

多分あれが先代だろう。

『よくここまで辿り着いたものだな、矮小な者共よ』

「っ!？」

低く唸れた声が耳を通さず直接脳内に響き渡る。

先代であるスケルトンはゆっくりと立ち上がり、錫杖の先を向けて仰々しく構えた。

『もうじき儂の術式は完成する。お前達は最後の生贄となるのだ』
「ふざけた事を、お前の勝手に何人の人が犠牲になったと思ってるんだ！不老不死なんてくだらないものの為に！」
『ほう、活きが良いのう。お前の血肉は素材としても申し分無さそうじゃ』

彼は怒気を露わにして先代に喰って掛かるが、先代は余裕を崩さない。

圧倒的優位にあると思っているのか、その構えにはどこか弛緩が感じられた。

怯えるあたしに、彼は耳打ちする。

「ティス姉、一瞬でいいから奴の注意を引けないかな？」

「……うん、やってみる」

子細は問わずとも、彼が何かに気付いたのが雰囲気で伝わる。

多分日記に書かれていた仕掛けについて発見したんだろう。

なら、あたしのする事は1つ。

恐怖で震える足を叱咤して、収納袋からナイフを抜き出し先代へ数本投げつけた。

真っ直ぐ四肢へ向かうナイフは、直前で見えない何かに当たり弾かれた。

『何をするかと思えば、随分と短絡的な行動をするものだ。その程度で儂がくたばるとでも』

「ディヴァイン！」

先代の言葉を遮り彼が吼える。

その言葉が周囲に吸い込まれるのと同様、先代を取り囲むように4本の光の柱が出現した。

その中央に、一際太い光の柱が上から振り下ろされる。

『無駄だ！この体に幾ら魔法を放ったとしても』

「いや、狙いは……その錫杖の術式だ！」

『何っ！？』

彼の言葉通り、光は錫杖へ向かって収束を始めていた。

膨大な光の圧力に耐えきれず、錫杖の表面に幾つものヒビが走る。

硝子が割れるような音が響き、錫杖は先代と共に砕け散った。

光は役目を終え消え去り、静寂が戻ってきた。

「……か、勝ったの？」

「多分ね。先代を繋ぎ留めていた術式は無力化したよ」

思わずぺたんと床に座り込む。

張り詰めていた緊張の糸がぷつんと切れたのが解る。

見上げれば、彼が頭を撫でてくれた。

「そうだ、討伐の証拠になりそうな物が無いか探してくるね」

なんとなく照れくさくなって、立ち上がり部屋の中へ足を踏み入れた。

ずっと握っていた彼の裾を離れた途端、右手が寂しく感じる。

振り返って彼に抱き付いてみようかな？

そんな事を考えたあたしの右手が、弦に触れた。

天井に仕掛けられていた鎌が空を切り裂きながら、あたしの心臓目掛けて半弧を描き、

『ザンッ！』

あたしの生が、終わった。

後悔と懺悔、それから感謝。

「え……？」

目の前の光景が信じられなくて、僕の思考は停止した。

ティス姉の背中から鈍く光る刃先が覗き、一拍遅れて凶器が空気に溶けて消える。

青い炎がティス姉を包み、その体を消し去っていく。
骨の一片さえ遺さずに、世界からティス姉が消えた。

——なんで、どうして、何が、誰が、どうやって、何故。

言葉にならない感情が渦巻き意識を奪っていく。
自失した僕の脳に、唸れた声が響いた。

『ふはははっ、流石に驚いたが儂はあの程度では死なんぞ？不老不死の秘術は儂の魂に刻み込んだのであるからのう。何、心配せずともお前もすぐにその女の元へ送ってやろう』

その言葉を理解した途端、僕は脳が焼き切れるくらいの怒りを覚えた。

お前が。

お前如きが。

「テイス姉を殺したのか……！」

『あんな小娘でも少しは他人の役に立つようじゃな、お陰で儂の目指す不老不死に大きく近付いたわ』

玉座の裏から醜惡な生物が姿を見せた。

醜く変形した顔、苔のように薄汚れた緑の肌、痩せ細り腰の曲がった体。

ネザー・リッチと呼ばれる不浄の不死者がそこにはいた。

「うあああああつ！」

弾かれるように体を前に倒し、左足で床板を踏み抜き右足を前に投げ出す。

突然の行動に多少驚いた様子で先代は皺でヒビ割れた右腕を僕に突き出した。

『愚か者め、雷に吹き飛ばされるがいい！サンダー！』

指先から閃光が迸り荒れ狂う電撃が僕に向かって走り出した。

迫り来る雷を避けるでもなく、僕は両目に魔力を込めて雷を睨み付けた。

耳障りな破裂音を響かせて雷が霧散する。

『な、馬鹿なっ!?!』

醜悪な顔を歪め驚愕に目を見開く先代。

両足へ更に加速を乗せて先代の前に辿り着き、咄嗟に防御姿勢を取る両腕諸共振り抜いた右足の踵で穿った。

ミシリと骨が軋む音が聞こえ、続けてぼきりと骨が折れる感触が足裏に伝わる。

貧相な体で勢いを殺せるハズも無く、先代は無様に部屋の壁際まで転がり頭蓋を壁に叩き付けられる事になった。

『ぐっ、馬鹿なっ、何故魔法が効かぬ!?!』

完全に折れた両腕は肘の先にもう1つ赤黒く腫れ上がった関節を増やしている。

回る視界を抑え付け忌々しげに僕を睨み付ける先代。

その濁った目に先程の余裕は欠片も無い。

虚を突かれて魔法を放たれても面倒だ。

そう思った僕は四肢を粉碎する事にした。

『グアアアアアアッ!』

まず右足。

膝の上に足を構え皿ごと踏み抜いた。

肉や骨が潰れてひしゃげ、びくんびくんと跳ねるように足先が暴れ回る。

次は左足だ。

『ガアアアッ！』

「煩いな」

酷く耳障りな悲鳴を上げながら両太腿を痙攣させる先代。

その喧しい口を黙らせようと、僕は体を捻り後ろ回し蹴りを首目掛けて放った。

かひゅ、と空気が漏れて先代の首がだらりと力無く垂れ下がる。

勢いで崩れ落ちた上半身に狙いを定めて両肩を踏み抜いた。

ごきり、ごきり。

小気味良い音が鳴り、完全に外れた両腕を放り出したまま息も絶え絶えに言葉を漏らした。

『ガハッ、き、貴様……！』

「まだ喋れるんだ。不老不死も存外便利なんだね」

『許さん、その肉を切り裂い、て、内臓を喰らってやる』

「煩いよ」

胸を踏み抜く。

肋骨が折れ内臓に突き刺さったのか、先代がごふつと血を吐いた。汚いなあ、危うく服に汚い血が付いちゃう所だったじゃないか。

僕は先代を見下ろし、右手を翳した。

呟いた言葉はこの世界に存在しない言霊。

身構える先代は自分に掛けられた魔法がなんなのか解っていない。
だから僕は精一杯残虐に微笑んでみせた。

「今お前に掛けたのは魂の修復と精神の維持。これで心は壊れずに
魂も消えなくなった」

『な、なんだと？』

「永遠に苦しみ続けろ、外道。……ノスフェラート」

浮かび上がる紫色の炎が先代の顔を照らし出す。

その顔は恐怖に染まっていた。

外に出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。

ギルドへの帰り道、僕はティス姉の事ばかり考えていた。

もし、ティス姉に防護付呪した装具を渡していたら。もし、あの時
周囲を警戒して罫を発見していれば。もし、ティス姉を離さず抱き
留めていれば。

後悔は尽きない。

あの笑顔を二度と見れない、その事実が僕の胸を締め付けていた。

左手に握り締めた4本のナイフが、とても重く感じる。

この何の変哲も無いナイフだけが、僕に唯一遺されたティス姉の遺
品だ。

ナイフを回収した後、僕は邸宅全体を浄化の炎で包み込んだ。

願わくば、犠牲になった人達が安らかに眠れるように。

周囲を覆っていた霧も晴れ、辺りは平和な住宅街の姿を取り戻した。
もう二度と惨劇は起こらないだろう。

沈んだ顔のままギルドの扉を潜ると、受付のお姉さんは一瞬眉をひそめた。

僕の手握られたナイフを見たからだ。

「夜遅くまでお疲れ様です、ユーリさん。……その、ティスカさんは」

「亡くなりました。これがティス姉の……彼女の、遺品です」

カウンターにナイフを乗せる。

続けてポーチからあの日記を取り出した。

お姉さんは中身を確認して、軽く息を吐いた。

「……確認致しました。更新の為にギルドカードの提示をお願いします」

お姉さんにギルドカードを手渡すと、カードの表面が銀色に光った。そのまま光は定着して、カードの色が今までの白から銀へと変わった。

「更新致しました。これ以降ユーリさんは冒険者ギルドに於いて『第二位』の権限を持ちます。説明は致しますか？」

「お願いします」

「第二位とは冒険者ギルド内でギルドマスター、ギルドマスター補佐に次ぐ発言力を持ちます。各国家間で有効な身元の保証、国家からの承認を得た正式な討伐隊内での一定の権限、独自の判断で行え

るギルドを通さぬ脅威への対処の許可、他ギルドが管理運営する施設の使用料の一部免除、結成したクランに所属する全員への不干渉と庇護が適用されます。代わりに国家を脅かすものへの対処、及び国家間戦争への非介入が責務として課せられます」

早い話が有事の際に戦力として数える代わりにそれなりの待遇をしますよ、って事だ。

まあ、それくらいならいいかな。

「クランって何でしたっけ？」

「はい、クランは一定の権限を持つギルド員の方が結成する事の出来る小型の組織で、一般的には気の知れた仲間や志を共にする方々で構成されています。該当するギルド員ともう1人の計2人から結成が可能です」

なるほど、ネトゲのクランやチームと同じようなもんか。

ミナとクラン立ち上げようかな？

お姉さんは数枚の書類を取り出しながら、僕にその中の一枚を差し出した。

「これは？」

「幽霊騒動の依頼書とその報酬について纏めたものです。残念ながら……請負人不在、という事になりますので報酬はユーリさんに受け取って頂く形になります」

「報酬、ですか」

胸が痛む。

お金や名声なんかより、ティス姉の笑顔が何よりの報酬に違いない。その時僕は、カウンターに置かれたままのナイフに目が止まった。

「お姉さん、この遺品のナイフはどうなるんですか？」

「本来なら遺族の方にお渡ししますが、ティスカさんはご家族がいらっしゃらないようですのでギルドが共同墓地の方に埋葬致します」

「報酬でナイフを1本買い取る事は可能ですか？」

「それは……」

「彼女を忘れない為に、手元に置いておきたいんです」

「……それは出来ません、規則ですので」

「そうですか……無理を言ってますみませんでした」

「いえいえ、ではこの遺品のナイフ『3本』は確かにギルドで埋葬致します」

そう言ってお姉さんはナイフを3本だけ取って遺品箱へしまった。カウンターの上には1本だけナイフが残されている。

——え、これって？

どういう事、と視線を上げたらお姉さんが口に人差し指を当てて微笑んでいた。

薄く紅の塗られた唇が小さく動く。

『ナイシヨですよ？』

お姉さんの気遣いで胸がいっぱいになりつつ、僕はナイフをポーチにしまった。

報酬については半分だけ受け取り、もう半分はティス姉のお墓の費用に充ててもらった。

半分の報酬白金貨2枚をしまつて、すっかり暗くなった街の中を歩いていく。

ミナも待ちくたびれてるだろうなあ。

宿屋に到着すると女将さんの娘さんが出迎えてくれた。

暇を見つけてはミナの話し相手になってくれていたらしい。

お礼を言って階段を上る。

扉を開けると、ミナが笑顔で待っていた。

「おかえり、ユーリ」

「ただいま、ミナ」

たった一言。

その短い言葉を交わしただけで、全身から余計な力が抜けていくのが解った。

装備を外してベッドに倒れ込むと、今日の出来事は全部夢だったんじゃないかって気がしてくる。

「ユーリ」

名前を呼ばれて起き上がろうとしたら、頭をぐいっと引き寄せられた。

ミナに頭を抱きかかえられ、そっと髪を梳かれる。

「つらかったね、悲しかったね」

「ミナ？」

「全部、伝わってたよ。ユーリの悲しみも怒りも、全部」

伝わってた？

悲しみも怒りも、全部？

何故って疑問が湧いた瞬間、視界の端でミナの指輪が輝いたような気がした。

あの指輪が僕とミナの心を繋いだのかな？

「私はユーリのお嫁さんだよな？」

「うん」

「だったら、私に悲しみも怒りも全部ぶつけていいんだよ。旦那様を支えるのはお嫁さんの仕事だから、ユーリの気持ちを全部受け止めてあげる」

優しく心を癒やしてくれる声が、僕の鼓膜を揺らしていく。

髪を梳く小さな手のひらから、抱き留める柔らかな胸から、ミナの優しさが伝わってくる。

ダメだ、ミナの前では強い僕でいるって決めてたのに。

不安になると思って弱い所を見せないようにしていたのに。そんなに優しくされたら、泣いちゃうじゃないか。

「だから、泣いてもいいんだよ。私の前では、無理して強がらなくてもだいじょぶだから」

「……っあ」

一滴、目から涙が溢れた。

次から次へと、堰を切ったように涙が流れ出て行く。

「うあっ、ああああっ、あああああっ！」

「よしよし、どうしたの？」

「僕はっ、僕は守れなかった！守れたハズなのに、僕は守れたのに！」

「ユーリは悪くないよ、ユーリは悪くないから」

「でもっ、それでもっ！僕がしっかりしてれば、僕がちゃんとテイス姉を見ていればっ！」

「ユーリは何も悪くないよ。……ただ、神さまがちよっと残酷だっただけ」

「僕は、僕は……っ！」

「今はいっぱい泣いていいよ。落ち着くまで、抱き締めていてあげるから」

「ううっ、あっ、うあああああっ！」

思いつきり泣いたせいか、少し心が軽くなった気がする。

ミナはずっと、頭を撫で続けてくれた。

「……不安なんだ、今度はミナまで失ってしまったらって、そう考えたら」

「私はきつとだいじょぶだよ」

「でも！……それでも僕は」

「ユーリ」

撫でる手を止めて、僕の目を覗き込む。

聖母みたいに、慈愛に満ち溢れたその顔を見た途端、もやもやしていた気持ちがずっと晴れていった。

「ユーリが望む限り、私は側にいるから。約束したでしょ、旦那様？」

「あ……うん」

「ふふ、忘れっぽいんだから。めっ」

つん、と僕のおでこを人差し指でつつく。

「さ、顔洗ってきなよ。ユーリの目、うさぎさんみたいに真っ赤だよ？」

「うん……ミナ」

ベッドを降りて僕の脱ぎ散らかした装備を片付けるミナに、心からの感謝を込めて。

「ありがとう」

「どういたしまして♪」

笑顔で応えるお嫁さんを、一生守っていこうと改めて誓った。

それから2日経ち、あつと言う間にタマタ村へ戻る日になった。ティス姉の事を引きずらないように、精力的に仕事をこなしていた。

気付けば稼いだお金は白金貨78枚、金貨27枚。

大家族でも一生働かずに暮らせる額だ。

余りに稼ぐもんだからギルドの金庫が6つ程空になっちゃって、最後はトレスキンさんにギルドを潰す気かって呆れられた。

ティス姉の葬儀は恙無く終わった。

参列者は意外と多く、みんなティス姉にお世話になった人達ばかりだった。

1人1人に頭を下げて回ったらトレスキンさんに怒られた。

みんなの前に連れ出されて「見てみる、誰がお前を恨んでる？あいつの最期を見届けて、仇まで取ってくれたお前に感謝してるんだよ馬鹿野郎」って説教された。

昔の口調が出たみたいだったけど、いきなり乱暴な言葉使いになったからすごくびっくりしちゃったよ。

みんなにありがとう、って言われてちょっぴり泣きそうになったのはナイショだ。

そして今、準備を終えて商隊の馬車に相乗りさせてもらっている。

来た時とは別の商隊で、元々村の住人だった人が立ち上げた商隊だった。

商人さんも久々の故郷が楽しみで今からワクワクしてるみたい。

ミナを見て大きくなったってびっくりしてたけど、ミナが僕のお嫁さんになったって話したら顎が外れそうになってた。

それを見て2人で笑ってたら商人さんも釣られて笑い出した。

そんな和やかな雰囲気で馬車は進む。

そしてタマタ村に到着した僕達は、そこに広がる光景に目が点になったんだ。

「なんじゃこりゃあああ!？」

つづく？

後悔と懺悔、それから感謝。（後書き）

今回でハードなお話はひとまず終了です。

時話からはまたゆるふわロリエろあんあんイチャイチャな話に戻ると思います。

ハード系シナリオは書き慣れないせいか細部の作り込みが甘いです。もっと精進します。

未確認生物、IMOUTO。

「なんじゃこりやああああ!？」

商人さんの心の叫びで、意識が戻った。

到着したタマタ村では、何かイベントというかミニシナリオが始まっているらしかった。

入り口にボロ雑巾みたいになった人達が転がって、鋼の鎧を着込んだ兵士がそれを見張って、村人は壊れた家屋や瓦礫を撤去していた。

何より、入り口から見えるハズの教会がすっかり無くなったいたんだ。

慌ててミナと教会のあった方へ行ってみると、炭化した柱や崩れ落ちた屋根板を片付けているエアリイさんと、倉庫の方へ走っていくシーナがいた。

2人の無事を確認してほっと胸を撫で下ろすと、エアリイさんが僕達に気付いて手を振った。

「やあ2人共、おかえり。随分と早い到着だね？」

「え、あ、ただいまです」

「ただいま、エアリイさん」

「うんうん、2人共元気そうでなにより。シーナ君は倉庫の方で作業しているから、早く行って顔を見せてあげるといい」

「そうですね……って違う! エアリイさん、一体何があったんですか!？」

いつも通りのほほんとしているエアリィさんに毒気を抜かれつつ、僕は子細を訊ねた。

エアリィさんは顎に手を当てかわいらしく首を捻った。

「何が、と訊かれてもイマイチ説明しにくいんだよ。まあそろそろ帰ってくる頃だから、本人に直接訊いてみたらどうだい？」

「本人？」

「ああ、君の「おゝい、エアリィさん！」噂をすれば、だね」

どこか懐かしさを感じる声が響く。

はっと振り返ったら、村の入り口の方から赤いローブを纏った少女がこっちに駆けて来ていた。

透き通るように白い肌、さらさらと風に揺れる肩まで伸びた艶やかな黒髪。

僕よりも深い黒を湛えたぱっちりとした瞳や蠱惑的な程に鮮やかな色合いの小さな唇等全てのパーツが一級品で揃えられており、神の作った彫刻かと見間違う程に整った美しい顔立ち。

すらりと伸びた手足は華奢で庇護欲をそそり、未成熟な体は狂おしい程に僕の心を魅了して止まない。

幼女も僕の姿を見て足を止め、信じられないような顔をした。

でも、それも一瞬。

満面の笑みを浮かべて走り出し、僕の胸元に飛び込んできた。

「お兄ちゃん！」

「美由里！？」

半年前に亡くしたハズの最愛の妹が、僕の胸の中に飛び込んできた。

シーナとも合流して倉庫を片付け円卓の周りに椅子を置き、改めて自己紹介する事になった。

ちなみにお茶は四次元麻袋から取り出した蕎麦茶、お茶請けはこれまた四次元麻袋から取り出した栗饅頭だ。

「えー、こほん。改めまして、悠里お兄ちゃんの元妹で竜族の美由里です。今の名前はミューリだけど、呼ぶ時は好きな方で呼んで下さい。よろしくお願いします」

ハキハキと立派に喋る妹の姿に感動や郷愁を覚えつつ、突っ込み所の多さに舌を巻いた。

周りを伺ってみると、みんな黙って頷いてくれた。

ミナに至っては早く早くと膝をぺちぺち叩いてくる。

よし、じゃあ早速突っ込み……もとい、数々の疑問をぶつけてみよう。

「えっと、美由里？」

「なあに、お兄ちゃん？」

「色々訊きたいんだけど……なんで美由里がこの世界に？」

一番訊きたいのはそれだ。

ここは地球じゃない、別世界だ。

幽霊でも無ければ僕みたいに偶発的に渡って来たハズも無い。

ってどうか美由里の葬儀もやったし。

遺骨も抱いて寝てたよ？

「お兄ちゃん、信じられないかもしれないけど私……転生したの！」

「転生って、え、マジで？うわぁ、兄妹揃ってテンプレな事を」

「って、あ、アレ？お兄ちゃん信じてくれるの？」

「え、だって本当なんでしょ」

「う、うん」

「なら信じるよ。僕が美由里の事を疑う訳無いじゃないか」

美由里が他人を巻き込んだり傷付けたりするような嘘を吐くハズが無いしね。

たまにちよっとした小さな嘘を言った時はお仕置きでこちよこちよの刑にしちゃうけど。

すると美由里は突然涙ぐみ始めた。

な、なんで！？

「ぐすつ、良かったぁ、お兄ちゃんに信じてもらえて」

「馬鹿だなぁ、妹の事を信じるのがお兄ちゃんの役目じゃないか。ほら、おいで」

抱き寄せて頭を撫でてあげる。

美由里はすぐに泣き止んで嬉しそうに擦り寄ってきた。
それを見て左右から眩きが漏れる。

「強敵出現です……」

「私もたまには甘えてみようかな」

「やっぱりユーリ優しい♪」

上からシーナ、エアリィさん、ミナだ。

よし、ミナには後で飴ちゃんをあげよう。

すっかり安心して子犬みたいに白い尻尾をパタパタさせ……し、尻尾？

僕の目の先で揺れる白い尻尾は、犬や猫と違って毛が生えてない。
鱗みたいのも付いてるし爬虫類系？

「み、美由里、尻尾が」

「あ、それもお話しないと」

ぱつと離れて椅子に戻る美由里。

……温もりが無くなってちよつと寂しい。

「えっと、事故の後私の魂はふよふよと次元を越えて、この世界に
転生したのです！」

「おお」

「転生した先はなんと人間ではなく、竜族だったの！」

「おおー!?」

「竜族として知識を得ていく内に私は思ったの。もう一度お兄ちゃんに会いたい！そして遂に発見したの、お兄ちゃんをこの世界に召還するマジックアイテムを！」

「おお……お？」

ちょっと待つんだマイシスター。

って事は、あれ？

「僕がこの世界に来たのって、美由里が召還したから？」

「うん、そだよ」

「ワオ」

なんてこったパンナコッタ。

まさか僕のフラグを管理していたのが妹だったなんて。

あれ、さっき元妹って言ったのは転生したからなのかな？

確かに前世では兄妹だったけど、今世では血の繋がりは……ってか種族すら違う！？

妹が元妹で竜族で僕の召還者？

それなんてラノベ？

「ちなみに私200年以上生きてるよ」

まさかの合法ロリキターー！

ってふざけてる場合じゃない。

200年以上も僕の事を想って、こうやって逢える日を待っていて

くれたんだ。

なんて健気なんだろう。

僕は美由里を抱き寄せて、優しく髪の毛を梳いてあげた。

「ひゃ、お兄ちゃん？」

「ゴメンね、200年以上も待たせちゃって。待たせた分、いっぱい美由里のわがママを聞いてあげるね」

「……ふえ」

「ほら、美由里のお兄ちゃんだよ。好きなだけ甘えていいんだよ？」

「……ふええん、おにいちゃあゝん」

幼子のように声を上げて泣く美由里を、優しく抱き締める。兄妹揃って泣き虫だなあ、ってなんだかちよっぴり微笑ましくなった。

僕をあやすミナもこんな風に暖かい気持ちになったのかな？

しばらくむぎゅむぎゅしていると、なんか気配が変わった気がした。時折鼻をすすり上げるだけで特に変な事は無いような？

「くすん、くすん」

無いような……？

「すんすん、くんかくんかすーはーすーはー」

「って嗅ぐなあ！」

「やんっ♪」

「わぁ、嗅ぎ方がユーリと一緒にだぁ」

立ち直った様子で身を振る美由里。

くねくね動くのはかわいいけど、はしたないから嗅いじゃダメです。それと、ミナは変な事言わないように。

後でシーナに怒られちゃ……あぁっ、シーナがまた感情の読めない濁った目で僕を見てるう！？

「ミューリちゃん、お待たせ〜♪」

「あ、お姉ちゃん」

倉庫の扉を開けて新たな人物が姿を見せた。

背が高く足が長い典型的なモデル体型とでもいうのか、スラッとした印象を受ける。

だが胸では母性愛を体現したかのような慈愛の詰まった巨乳が、ゆっさゆっさと揺れ動いていた。

あれはFはある、絶対にある。

切れ長で睫毛の長い深紅の瞳と、腰まで伸びる長い緑銀の髪の毛を後ろで結わえてあり、巫女服を着れば間違いなく神社に行列が出来る程の妖艶で神々しい雰囲気がある。

きりりと引き締まった唇も魅惑的で思わず吸い付きたくなるような魅力に溢れている。

このように一見すると美術品のように上品な空気を感じちゃうけれど、お姉さんが醸し出すほんわかふにふにした雰囲気、それを良い方向にぶち壊している。

お姉さんが着てる赤いローブも雰囲気似合ってた美しい……あれ、

美由里とお揃い？

じゃあこのお姉さんも竜族の方？

と、僕の不躰な視線に気付いたのか頬を微かに染めて、たおやかに腰を折った。

「あらあら、お話の途中でごめんなさい。お邪魔だったかしら」

「いっ、いえいえっ！良かったらどうぞ、お茶菓子もありますから！」

「いいんですか？ありがとうございます、お兄さん」

ふわりと花が咲いたような笑みを浮かべるお姉さん。

仕草1つ1つがかわいらしくて、さっきから胸がキュンキュンしちゃう。

だらしなくでへへと笑っていたら、背後から女性陣のジト目が刺さっているのに気付いた。

ミナまで呆れたように僕を見ていた。

あぁっ、ゴメンなさいっ、謝るから僕を見捨てないで！

「もう、お姉ちゃんったらすぐお兄ちゃんを誘惑するんだから」

「だって、お兄さんカッコいいんだものお。流石ミュージリちゃんのお兄さんよねえ♪」

「でしよ、えへへ」

2人はだいぶ仲が良いみたい。

そういえばお姉ちゃん、って呼んでたね。

転生先の家族なのかな？

そんな僕の疑問を感じ取ってか、お姉さんは微笑みながら自己紹介を始めた。

「初めまして、竜族の2番札のワナギユーテ・フォン・テティクラドと申します。気軽にナギって呼んで下さいねえ♪」

ぼわぼわした空間が出来上がった。

きつとお姉さん……ナギさんの全身からマイナスイオンが出ているに違いない。

存分に癒されていると美由里が補足を入れた。

「私達竜族では力が強かったり頭が良かったりする人に、割札っていうのが支給されるの。割札を持つてる人は一族の会議に出たり学校で教師になったり出来るんだよ。2番札を持つてるお姉ちゃんは長老の次に偉いんだよ」

「へえ、ナギさんすごいんですね」

「やあん、お兄さんにそんな事言われたら照れちゃう」

手を合わせて肩の辺りに持ち上げ、やんやんと身を振るナギさん。なんだろうこのかわいい未確認生命体。

あ、竜族か。

取り敢えず互いに自己紹介を終えて、タマタ村の現状を聞くことにした。

こほん、と咳をして場を取り仕切るのはエアリィさん。こういう時は頼りになるなあ。

「ユーリ君が出発してすぐに、首都から騎士団の方々が来てね。先の山賊の襲撃に関しての事後処理と生活支援で立ち寄ってくれたんだが、上手く逃げ仰せた残党が50人近い荒くれ者を連れて復讐にやってきたんだ」

「50人!？」

「エアリィさん、村のみんなはだいじょぶだったの？」

「ああ、慌てて転んだ子が1人いたくらいで怪我人は皆無だったよ」

チラッと横目を向けるエアリィさん。

……なるほど、転んだのはシーナだな。

ドジっ娘さんめ。

「騎士団の方々も撃退に参加してくれたがやはり多勢に無勢。突破されてしまうと誰もが思った時、突然森の中から1体の白く輝く竜が現れて言ったんだ。『どっちが悪者?』ってね。皆呆気にとられていたんだが、なんとか意識を取り戻した私が山賊達を指差して『あいつらだ!』って叫んだのさ。そこからはもうミューリ君の独壇場でね、山賊相手に尻尾で薙払うわブレスで焼き払うわ。結果山賊相手に敵味方1人の死者も出さずに見事撃退した訳さ。残念ながら幾つかの家屋やこの教会なんかは、山賊の放った火矢で焼失してしまったけどね」

話を聞いて村の入り口に転がっていたボロ雑巾が頭に浮かんだ。
自業自得だな。

取り敢えず僕は美由里を抱き寄せて体に怪我が無いか確認する。

「ひゃあっ、お、お兄ちゃん？」

「んゝ、指先に傷は……無し、と。大丈夫？ 足とか擦りむいたりしてない？」

「う、うん、大丈夫……あっ、一応足とかお腹とか触って確かめてもいいよ？ むしろ触って、さあ！」

若干美由里のテンションが怪しいけど、ローブをはだけて綺麗な足を空気に晒した。

美由里は濃紺のスパッツを履いていた。

いつも元気な美由里らしい、活動的なファッションだね。

ぷりんとしたお尻やシュツとした生足にちょっぴりドキドキしながら、陶磁器みたいに綺麗な足を調べていく。

時々「あんっ」とか「ひゃうん」とか声を上げる。

くすぐったいだろうけど、我慢してね。

傷1つ無い綺麗な肌のままだった事を確認して、美由里を解放した。余程くすぐったかったのか、少し息が荒くなった。

うん、そんな顔もかわいいぞ妹よ。

と、テーブルの下から僕の膝をぺちぺち叩く小さな手が。見るとミナが軽く顔を赤らめていた。

「後で私にもして」

「うん？ いいけど」

くてっ、ってなってる美由里は置いていて話を進める。
やっぱり最大の悩みは、これからどこで寝るか、だった。
教会は全焼、エアリィさんの家も倒壊。

美由里やナギさんのいた竜族の里は別の大陸にあるらしい。
さて、どうしようか。

みんなで頭を悩ませていたら、不意にミナが顔を上げてエアリィさんに聞いた。

「ねえねえ、エアリィさん。お家って買うのに幾らくらいするの？」

「家かい？1から建てるのはそれこそ目が飛び出るような金額だろうね。空き家を買うにしても、街中なら白金貨20枚、もし首都で買ったら白金貨40枚は下らないんじゃないかな」

それを聞いたミナは僕に向き直ってぱっと笑顔を見せた。

普段ならうなだれる金額だけど、今の僕なら手が出せる範囲だ。

領きを返すと、ミナは僕の膝の上に乗って甘えるように声を出した。

「ねえねえユーリい、お願いがあるの」

「何かな、ミナ？」

「私、首都に家欲しいなあ。ダメ？」

「はっはっは、よおし、首都で家買っちゃうか！」

「やあん、ユーリ太っ腹♪」

僕達のやり取りをぼかんとした顔で見つめるみんな。

やだなあ、あんまり見られたら恥ずかしいよっ。

いち早く意識を取り戻したエアリィさんが慌てて手を振る。

「いつ、いやいやっ、ユーリ君白金貨って言うのは普通に働いても

貯めるのに50年掛かる金額なんだよ。一部の商人や凄腕の冒険者じゃないと見る機会さえ無いものなんだよ？」

「にゅっふっふっふ、そにえがそうでもにゃいんですな、エアリィにゃん」

怪しげな笑いが漏れる。

いや、ミナにほっぺむにむにされてたからなんだけどさ。

僕は四次元麻袋から財布代わりのサックを取り出して、その中身をテーブルの上に広げてみせた。

エアリィさんは驚愕に目を見開き、シーナは目の前の光景に失神し、美由里はどういう事が解らずぼかんと口を開け、ナギさんは口に手を当てあらあらとびっくりしている。

唯一ミナだけが僕と同じように笑みを浮かべていた。

「ニヤニヤ」

「にやにや♪」

「ニヤンニヤン」

「にゃーにゃー♪」

おっと、いつの間にかミナと猫ごっこしてたよ。

猫ミナもかわいいなあ。

またもや最初に復活したエアリィさんが、テーブルに散乱する白金貨をふるふる震えながら指差して尋ねた。

「ゆ、ユーリ君、これは」

「白金貨78枚、金貨27枚。僕が冒険者ギルドで稼いだお金です

！」

「わ〜どんどんぱふ〜♪」

膝の上で拍手しながら効果音を担当してくれるミナが微笑ましい。

でもミナ、みんながいるから今は我慢だ。

その魅力的なお尻をやわやわと擦り付けちゃダメっ、あっ、僕の息子がドントストップミーナウ！？

現実世界へ帰ってきたみんなと話し合って、首都リレジーへ向かう事にした。

シーナもエアリィさんも家がなくなっちゃったし、そもそも美由里とナギさんは寝泊まりする場所とかは何も考えずに出て来たらしい。正確には準備する間もなく美由里に連れてこられたみたいだけどね。大事な物とかは前々からこの倉庫に保管してあったみたいで、持っていく物を選別する事にした。そしてその作業中。

「ねえねえミューリちゃん、そっちの端っこ持ってくれる？」

「うん、いいよミナお姉ちゃん。せーのっ」

「よいしょ、よいしょ……うう〜」

腕がぷるぷる震えてるミナの後ろから、衣装収納箱を支えてあげる。

「ほら、僕が持つてあげるから無理しないで」

「あ、ユーリありがとう♪」

「いいのいいの、ミナに無理はさせられないしね」

「お兄ちゃん優しいね、さっすが私のお兄ちゃん!」

「ははっ、ありがとう。美由里も知らない間に力持ちになったね、僕より強いんじゃない?」

「えへへ、でもお兄ちゃんの方が格好良くて優しいから、お兄ちゃんが最強なんだよ?」

「そうなの?」

「うん、最強。ねー、ミナお姉ちゃん」

「うんうん、さいきょー。ねー、ミューリちゃん」

小さい組は微笑まじさが半端じゃない。

10歳にしてはかなり小さい部類に入るミナだけど、美由里と並ぶとちよっぴりお姉さんなんだなって解る。

美由里は不思議な事に、外見は半年前の8歳のままだ。

竜族は長命だから体の成長も遅いらしいけど、別れた時の姿でまた再会出来たなんて、運命的でロマンチックだ。

美由里が当時のままの体なら身長は127cm、ミナはプラス3cmで130cmって所かな。

思わず生唾を飲み込む。

130cmしかない幼気な女の子が、夜に僕の上に跨がってアへ顔やとろ顔で腰を振ってたのか。

ちよっと息子が元気になった。

お盛んですわね。

「あ、お兄ちゃんちよっとえっちな顔になってる!」

「ホントだ、ユーリのきちくう♪」

2人でキャツキャとからかってくる。
年も近いせいかすぐに仲良くなれたみたいでお兄ちゃん安心。
いたずら好きの妖精みたいにはしゃぐ2人に怪我しないよう注意して、僕は2階へと向かった。

階段を上っていくと、シーナとエアリイさんが盛んに議論を交わしていた。

「だからっ、そんな派手な下着なんて却下です！そんな、え、えっちすぎです！」

「いやいやシーナ君、彼にはこれくらい刺激的なのじゃないとダメだと思うよ？なにせ帰ってきたはいいが、私のお色気むんむんな服にも興味を示さずミナ君ばかり眺めていたのだからね」

そういえばエアリイさん、随分とえろかわな服着てたなあ。

いつものワンピースでもグリーンサーコートでもなく、燕尾服を軍隊仕様にしたようなジャケットを、胸のボタン1つだけ留めて惜しみなく横乳を僕に見せていた。

下に履いたストラックスもエアリイさんの細い足を存分に引き立てていて、頬ずりしたくなる雰囲気醸し出してた。

うん、思い出しただけでたまらんです。

気分は凄腕エージェント！な服だったけどあれどこで買ったんだろう。

「た、確かにユーリさんは私の卸したての服を見ても上の空でしたけど！」

ああ、そういえばシーナも普段とは違った服を着てたなあ。

上は緑を基調としたリネンのチュニック、下は薄いピンクのリボンがあしらわれたレースのスカート。

町娘に扮してお城から抜け出したお姫様みたいな、どこか上品で清楚な服装だ。

普段はおしとやかな見た目なのに、いざ発情すると誰よりもえろえろ……ごくり。

って遊んでる場合じゃないか、どうしよ？

階段を上がりきった所で、僕はやる事も無く立ち呆けていた。

いやね、シーナとエアリイさんが下着の話してたし、まあ間違いくそこには女性ものの下着が散乱、もしくは整頓されて置いてある訳ですよ。

多分エアリイさんも服とか下着とか一時的にここへ持ってきてるだろうし、もしかしたら2人は下着姿なのかもしれない。

そんな所に男の僕が乗り込んだら2人共恥ずかしいだろうし、何より僕のほっぺに紅葉が映える。

「あらあ、お兄さんこんな所でどうしたの？」

後ろから声が掛かり、部屋の中からガタガタと慌てふためく効果音が聞こえる。

振り向くと、3段下で立ち止まり僕を見上げるナギさんの姿が。

「あ、ちょっと勢い良く階段登ったら貧血になりました」
「うふふ、危ないから気を付けなくちゃダメよお？」

見え見えの僕の嘘に笑顔で乗ってくれる。

ミナや美由里の笑顔が眩しい太陽なら、ナギさんの笑顔はさしずめ柔らかく地上を照らす月だね。

ナギさんは僕の横をすり抜けると、部屋の中の2人に言った。

「2人共、はしゃぐのはかわいくていいけどお兄さんを困らせちゃダメよお？」

「うぐっ、ごめんなさい」

「し、しかしナギ君、私達だってミナ君みたいにかわいがって欲しいんだ。その為にはユーリ君が発情して獣のように襲いかかってくるような下着を選ばないと」

「エアリイちゃん、まだそこでお兄さん待ってるんだけどお……」

「はうあ!？」

盛大に自爆するエアリイさん。

とういかエアリイさんは誰にでも君付けなんだ。

長命なエルフの淑女がナギさんにちゃん付けされるのもなかなか面白いけどね。

まあ、手伝えるような事は無いかな？

ナギさんに声を掛けて、1階に戻る事にした。

1階に戻ると、美由里が駆け寄ってきた。
美由里は興奮した様子で僕に尋ねる。

「ねえねえお兄ちゃんっ、ミナお義姉ちゃんにプロポーズしたって本当!？」

とんでもない爆弾を投下された。

2階から物が吹き飛んだり窓が壊れたりするような音が聞こえる。
妹よ、いきなりボンバーマンをやるなんてお兄ちゃん聞いてないぞ。
ミナは顔を赤くしてもじもじしている。

うん、かわいい……ハッ、騙されませんよお嬢さん!
何を暴露しちゃったの!?

っていうか美由里がミナを呼ぶ時に混ざった、ノイズみたいな感覚
は何だろう?

お姉ちゃんの発音っていうかニュアンスに違和感があるような。
まあ、いっか。

今はそれよりもこの色恋沙汰に興味津々な妹さんの対処を考えないと。

美由里はもういてもたってもいられない様子でパタパタと両手を振っている。

「ま、まあ取り敢えず落ち着いて」

「これが落ち着いていられますかっ! やっぱり指輪渡して『君の全てが欲しい』とか言っちゃったの!?! ミナお義姉ちゃんの指にはめられてるのって、件の指輪!？」

「いや、渡したのは髪飾りで」

「やあん、髪飾りなんてオシャレさん！流石お兄ちゃんは格が違った！でもミナお義姉ちゃんに先越されちゃったなあ……うう、せっかく転生してお兄ちゃんのお嫁さんになろうと思ってたのに。仕方がない、お嫁さん2号の座は私がもらうからね！」

ズビシッ、と右手の人差し指を僕に向ける。

でも人に指を向けてはいけませんって昔から言ってるのに。

思い出したのか、すぐに両手を背中に隠して上目遣いに僕を窺う。

ニコツと笑いかけると、美由里もにへらって笑い返す。

「はい、アウト」

「やああつ、お兄ちゃん許して〜！」

「ぶつぶつ、ダメです。美由里の大好きなお仕置きタイム〜」

逃げ出そうとする小さな体をひょいと持ち上げて椅子に座り、後ろから膝抱っこして固定する。

ふっふっふ、久しぶりのお仕置きでお兄ちゃんワクワクしちゃうなあ。

……決してプロポーズの話題から逃れようとしてのお仕置きじゃないんだからね！勘違いしないでよっ。

じたばた暴れる体をぎゅっと抑えつけて、僕はその未成熟な体に手を這わせた。

「ぷっ、あははははっ、ひゃふっ、ははははっ、や、やらっ、あははははっ」

「ほくら、こちよこちよ」

「あははっ、はははっ、だ、ダメえ、うひひひひはは、ぷくく、くひひひっ」

くすぐりの刑だ。

舐めてはいけない、どっかの国では刑罰として取り入れられているんだ。

爪を剥いても指を折っても口を割らなかったスパイをくすぐりの刑に処したら10分も持たずに首謀者の名前を白状した、って逸話があるくらい耐えるのが難しい。

まあ僕は優しいからすぐに解放するけど。

たっぷり30秒くすぐったら、美由里は息も絶え絶えになってぐったりしてた。

くすぐった後の美由里は笑いが引かなくて口の端を上げたままよだれを垂らしている。

……なんかムラムラしてきた。

膝の上で体を痙攣させて悦びをうかべる妹……なんだろう、この背徳感。

「うわあ、ユーリきちくう」

「ミナもしてあげようか？」

「ほわあっ！？え、えんりよするっ」

ありゃ、逃げられた。

まあ夜中に似たような事はするけどね！

順調に脳が毒されてきた僕だった。

……後でシーナとエアリィさんにもすごい剣幕で問い詰められたのは言うまでもない。
流石にごまかしきれませんでしたっ。

ハーレムルートとトラウマ喚起。

ぱからっぱからっ。

そんな軽快なりズムを刻んで馬車は進む。

意外と早く荷造りが終わった僕達は、山賊達を捕縛して刑務所へ連れて行く騎士団の隊長さんに頼んで、一緒に首都リレジーまで同乗させてもらった。

荷造り優先で出て来た結果、ミナにしたプロポーズの詳細や向こうでの出来事を逃げ場の無い馬車の中にする事になった。

僕の迂闊過ぎる行動や髪飾りの下りまで話す事になり、途中シーナに説教されながらも、みんな興味津々に聞いてくれた。

ただ、ティス姉の事は細部まで話さなかった。いや、話せなかった。思い出しただけでも悔しくて、悲しくて。

それでも僕の拙い話で察してくれたのか、みんな温かい言葉をくれた。

ちよっぴりしんみりしちゃった空気を吹き飛ばそうと、美由里が話題を振ってくれたんだけど……妹よ、そのチョイスはどうだろう。

「そ、そういえばお兄ちゃん、私には指輪くれないの？」

その言葉にシーナとエアリイさんの目が色めき立……いや、殺気立つ。

余りの眼力にぞわりと鳥肌が。
本気で怖いです。

最初にミナに指輪を渡した後でシーナに聞かれた時は「麻袋からいっぱい出て来たんだけど、ミナが欲しそうにしてたから1つあげたんだ。小さくてもやっぱり女の子だね」って答えたせいか、余り深

く追及してこなかった。

そしてその時の行為の意味を知ったのはついさっき。

——いや、地球じゃ左手の薬指だったのに何故この世界では中指！？

男性が女性に指輪を贈り、左手の中指にはめる事は「貴方は私のも
の」って意味を持つんだ。

言わば言葉にしないプロポーズ。

そして女性の返事がイエスなら唇にキスを、ノーなら左手に右手を
重ねて相手に見えないように指輪を抜き取る。

あの時は……なかなかに激しいキスをしたような気がする。

唾液交換もしたし。

舌、柔らかかったなあ、と無意識の内に視線を送るとミナは照れた
ように小さく微笑んだ。

よし、後で絶対襲う。

かわいすぎて我慢出来ません！

と、どんどん我慢の出来ない人間になっていく僕へ更に強く視線が
突き刺さった。

ああっ、エアリィさんまで僕を見る目が濁ってきてるよおっ！？

「私にも勿論くれるよねユーリ君？ああ、私の返事は聞かなくても
解るね、虜になるくらい激しい口付けをしてあげよう」

「私にも勿論くれますよねユーリさん？なにしろ指輪はたくさん余
っているのですから」

獲物を見つめる蛇みたいな視線を僕に向ける2人。

って、いつシーナの攻略フラグ立ったの!？
そんなフラグ立つような行動したっけ？
取り敢えず出会ってからのそれっぽい行動を思い出してみた。

——もやもやもやと回想開始。

『んやあ、ユーリちゃん、んあつ、しよれ、らめれしゅう、ふああ
っ♪』

——やもやもやもつと回想終了。

あれかあああつ!？
い、いや落ち着け僕。

幾ら何でもあのシーナがそんな事で落ちる訳が無いじゃないか。

「あの時から自分で慰めてもイケないんですよ……ふふふ、責任取
って下さいね？」

堕ちてたあああ!？

落とす前に堕としていたとは、流石に思わなかった。

っていか女の子がそんなえっちな事言っちゃいけません!

修道女でしょ!？

焦りが焦りを呼ぶパニック状態に陥っていると、すかさずエアリイ
さんが追撃する。

「私はいつでもユーリ君を受け入れるよ。……ユーリ君、君の子を
孕んだぽっこりお腹のエルフを更に犯してみたくはないかい？」

アウトオオオオ！？

その発言はアウトですエアリィさん！

風紀的にも常識的にも理性的にもアウトですよ！

っていうかふくよかな胸の谷間をアピールしちゃらめえ！？

息子よ、ステンバーイステンバーイ。

多分ゴーのかけ声は無いけど。

もう後が無くなった僕の理性に、美由里がトドメを刺した。

「ねえ、お兄ちゃん。私達今は血の繋がりに無いんだよ。……妹と、
合法的な近親相姦、しよ？」

「スリープ！」

ぷちんと理性の糸が切れる瞬間、僕は自分に睡眠魔法を掛けた。

なんでかって？

みんなが僕に好意を持ってくれてるのは解ったけど、やっぱり初め
ては2人つきりでもらってあげたいじゃない。

あ、これ言うの2度目だ。

そんな事を考えながら、僕は夢の世界へ旅立って行った。

淫夢を見なかったのは奇跡に近い。

強制睡眠から目覚めた僕を、その後も色んなイベントというか事件が待ち構えていた。

寝ぼけて膝枕してくれてたナギさんを抱き締めたり、起きたらミナが美由里とシーナとエアリィさんの3人を正座させて説教してたり、夕飯の時にあゝん合戦が始まったり、騎士団の若い人達から「爆発しろ」って血涙流しながら言われたり、夜中トイレに起きた帰りにミナが散歩しようと誘ってきたり、そのまま近くの林の中でミナと4回戦くらい……げふんげふん。

翌朝はミナ以外の面々に指輪贈呈と防護付呪を行った。

——シーナには風に揺られる天使の羽が彫られた白金の指輪を。

——エアリィさんには葉を繁らせた大樹が彫られた金の指輪を。

——美由里には一面に咲き誇る桜が彫られた碧水晶の指輪を。

——ナギさんには夜空を暖かな光で照らす月が彫られた翡翠の指輪を。

それぞれ、僕がみんなに抱くイメージを元に四次元麻袋から取り出したものだ。

そしてミナの指輪にしたのと同じ付呪を行っていく。

ナギさんは僕に好意を持ってってくれるか解らないから、安全の為に身に付けて置いて欲しいと説明した。

勿論特別な意味は無いから手渡しだ。

3人は指にはめて欲しいって言ってたけど、そうしたらナギさんだけ仲間外れみたいになっちゃうからダメって言ったら渋々納得してくれた。

先にナギさんに手渡して置いて良かった。

ダシに使っちゃってゴメンなさいって後で謝りに行ったら、笑顔で気にしないでって言うてくれた。

ああ、ナギさんの心遣いが沁み入るなあ。

優しく母性愛に溢れるナギさんにちよっぴりデレデレしていたら、他のみんながむくれて僕を見ていた。

そして僕を三白眼で見つめるシーナが一言。

「そんなに女の子が好きなら、ユーリさんを女の子にしてあげますよ」

恐ろしく低い声で告げられた内容に、僕はトラウマを刺激された。

それは小学校の修学旅行での出来事。

テンションの上がりまくった小学生が沸いた脳で考え出したイベントの1つが女装大会。

クラスの女子も何故かノリノリでメイク道具やウィッグを貸し出し、クラスの男子全員が女装する事になった。

童顔でやや女の子よりな顔だった僕は、数人の女子に取り囲まれてあっという間に女装させられた。

まあテンションも上がってたし僕自身ノリノリだったけど、クラスの男子の前に出た時に恐怖を覚えた。

それまでのお祭り騒ぎが一変、男子のギラついた視線が僕を捉えた。僕のメイクを担当したのが、プロのメイクさんを親に持つ女の子だったって事も要因の1つなんだろうけど、あの瞬間から僕は男に苦

手意識を持つようになったんだ。

それから卒業まで、一部の友人を除いてクラスの男子には近付けなかったし。

今では苦手意識も薄れたけど、女装というワードに恐怖心が湧き起こるようになってしまった。

男らしさというものに並々ならぬ執着を抱いたのもこの頃だ。

そして今、シーナの言葉にトラウマを刺激された僕は軽い錯乱状態に陥った。

「いやだ、女装だけはいやだぁあっ！」

自分で言った女装というワードに自分で恐れる悪循環。

いつになく弱気で逃げ惑う姿がツボに入ったのか、悦に入った表情で僕を追い詰めるシーナ。

「ふっふっふ、かわいいですねユーリさん。でも私が更にかわいくしてあげますよ」

「や、やぁあっ、やだぁああっ！」

「あぁっ、その絶望に染まった悲鳴、ゾクゾクきちゃいます。もつと鳴かせてあげましょう、エアリイさんそっち抑えて下さい」

「あ、あぁ。すまないユーリ君、だが……なんだろう、確かにゾクゾクくるね」

「やぁ、やぁあっ、やだよお、こないでっ、いやぁあぁあっ！」

そして数分後。

純潔を奪われた女の子みたいにシクシク泣く僕を、やけに満足そう

にツヤツヤした顔で眺めるシーナの姿が。
ますます解らない、シーナの性癖が。

エアリィさんは少々罪悪感があるのか、ばつの悪そうな顔で頬をポリポリ掻いていた。

ミナと美由里はナギさんが目隠ししてくれていたおかげで、僕の痴態を見ていない。

ナギさんはちよっぴり顔を赤らめていた。

そして僕はというと、髪に星形の髪留めを着けられた上に、耳の上辺りで左右の髪の毛を結ばれぴよこんと触角みたいにされていた。鏡を見せられた時、自分でもかわいいと思ってしまったのが悔しい。更に服も脱がされ、無理矢理着替えさせられた。

勝手知ったるなんとやら、シーナが四次元麻袋に僕の手を突っ込み取り出したのは……何故か巫女服だった。

しかも袴は膝上でカットされてハーフパンツみたいになってたし。流石に下着は死守したおかげでボクサーパンツのままだったけど、シーナとエアリィさんには着せ替え人形のように扱われた。

そうして誕生したのが、巫女服を着た美少女ユーリちゃんだ。

ここまでされたら、もうどうでもいい。

ああそうさ、僕は今美少女ですよ！惚れたら火傷するぜっ！

半ばヤケクソになって、僕はこの状況を受け入れる事にした。

まあ、そんなイベントをこなしつつ僕達は馬車に揺られる。

そして気付けば首都は目前に迫っていた。

首都リレジー。

リンディア王国の中心地なのに何故王都じゃないの？って思ったお嬢さん、貴女の疑問にお答えしましょう。

え、男性？膝でも抱えて黙って下さい。

ここリンディア王国では民の上に君臨しているのは王族だけど、政を担当するのは各町村を取り纏める11人の首相達が国民の意見や要望を纏めつつ、多数決で政を運営するって言う形態で国が成り立っているんだ。

解りやすく言うと、王が治める都が王都、政府が治める都が首都って感じた。

ここら辺の認識は、地球の住人だった僕や美由里に若干の違和感を与えている。

まあ文化どころか世界まで違うんだから、こうして言葉の使い方に差違が有るのは当然なのかもしれない。

それは置いといて、リレジーはかなりの大都市と言っている。大きな湖の真ん中にある島の上……というよりは、低地に流れる川で囲まれた平地の上に大都市が建設されている。

その地形の特性上守備に適していて、昔に起きた数多くの戦争の中でリレジーが陥落した事は一度も無い。

攻め込むには西に架けられた大橋を渡るか湖を船で渡るしか無い。しかし街の周囲は高い城壁で囲まれ、大橋は特殊な仕掛けが施されていて中程から跳ね橋のように吊り上げて侵入を阻む事が出来る。まあ今では大きな戦争も無いから観光名所になってるけどね。

入り口で降ろしてもらい、騎士団の人達にお礼を言う。

僕達の会話——というか僕の悲鳴が聞こえてなかった数人は僕の姿を見て目を丸くしてた。

1人が「君は女の子だったのか？」って聞いてきたから、脛にキックしてやった。

僕は男だいつ。

捕縛した山賊達の手続きを検問で行うみたいだから、取り敢えずここでお別れ。

……別れ際に隊長さんがぽんと肩に手を置いて慰めてくれた。思わず泣きそうになった。

気を取り直して、僕は首都へ入る為に検問の列に並んだ。

面倒な検問も僕のギルドカードで難なくパスして、いよいよ首都に乗り込む。

ちよつと緊張してきたなあ。

大きな門を通され、遂に僕は大陸最大の街に足を踏み入れた。

「わあ……！」

思わず言葉を失った。

華やかな通りには人々の活気が溢れ、数多くの露天や商店があり、正面には王城が高くそびえ立っている。

賑やかな街並みの向こうでは、大道芸人が噴水をバックに華麗な芸を披露している。

一步横道に逸れば、玄人受けしそうな年季の入った鍛冶屋やちよっぴり大人な雰囲気のホテルがある。

まさにファンタジーまさに異世界な街の光景に、僕はすっかり魅了されていた。

「ユーリ君、感動している所悪いが……早い所移動した方が良くないかい？」

エアリィさんに言われて意識を取り戻し、慌てて周囲を確認する。知らない間に随分と注目を集めていた。

男1人に美女2人美少女1人美幼女2人というなんとも奇妙な組み合わせが目立たないハズが無い。

幾人かの男達は早速ナンパしようと近付いて来てるし。

その中から如何にも軽薄そうな2人組が僕の目の前にやってきた。

「やつほ、お嬢ちゃん達。この街は初めて？良かったら俺達が案内するよ」

「かわいい子ばかりじゃないか、女の子6人で旅行かい？」

マテ、今なんて言った？

女の子6人？

ぴしっと固まった僕を見て美由里だけが慌て出す。

他のみんなはそれに気付かず困ったような顔をしている。

すっかり忘れてた……いや、無意識の内に無かった事になっていた事実を突き付けられて、僕は恥ずかしいやら腹立たしいやらで頭に血が上った。

そこへ軽薄そうな2人組の内の、ツンツン頭の方が僕の肩に手を置いた。

「君かわいいね、珍しい服だけど似合ってるよ。控え目な胸がまたいいね」

ぴしり。

そんな音が脳内に響く。

もう片方の肩にオールバックの優男が手を乗せる。

「せっかくだしお茶でも行こうよ。なんなら2人つきりになれる場所まで連れて行ってあげようか？大丈夫、俺結構上手いから」

ぶちっ。

どこか遠くでそんな音が聞こえた。

女の子にかわいいと評されるのはちよっぴりへこむくらいだけど、男にかわいいと言われるのは勘弁ならん。

しかも僕を性的な対象に見たなコイツら。

よろしい、ならば殲滅だ。

無言で顔を上げ、2人に微笑みかける。

それを肯定と受け取った2人がいやらしい笑みを浮かべて、

『ズダアアアアン！』

轟音と共に地面にめり込んだ。

一瞬で街から喧騒が消え、辺りに静寂が訪れる。

今使ったのは魔法でも何でもない。

集めた魔力をそのまま固めて2人の頭上から思いっきり叩き付けただけだ。

ぽっかりと広がるクレーターの中心に寝転ぶ気絶した男達の頭を踵で踏みつけると、なにやら気分が良い。

ガシガシと男達を足蹴にする僕の手を、美由里とミナが掴み全力で走り出した。

「に、逃げるよみんな！」

美由里の声に弾かれるようにして、全員で入り口広場を後にする。背後からどよめきが湧き起こるのを、僕は暗い笑みを浮かべながら

聞いていた。

「「めっ」」

「ゴメンなさいでした」

平静を取り戻した僕は幼女2人に怒られて絶賛土下座中。

手近な宿に転がり込んで着替えを終えてほとぼりが冷めるのを待っている間、僕は先程の暴走を咎められていた。

シーナとエアリィさんは隣の部屋でナギさんにお説教されている。声を荒げず淡々と何がいけなかったのか論すように語るナギさんのお説教はかなりキツそうだ。

「ユーリ、聞いているの？」

「はい、聞いてます」

「ダメだよお兄ちゃん、いくら何でも一般人に魔法使ったら」

「はい、反省してます」

「あんまり騒ぎになったら困るのはユーリなんだよ？これからこの街に住む予定なんだから」

「はい、重々承知しております」

「それにみんな怖がってたよ。お兄ちゃん、みんなに怖がられたらイヤでしょ？」

「はい、いやです」

幼女2人に正論で怒られるのもキツイです。

それも僕の為に苦言を呈してくれてるだけに心が痛い。
でも僕は男なんだ、女の子じゃないやい！
その言葉をぐっと飲み込んで、ひたすら2人に頭を下げ続ける。

「ユーリ、反省した？」

「はい、反省しました」

「お兄ちゃん、もうしない？」

「はい、もうしません」

「「じゃあ、許してあげる♪」」

そう言って僕を抱き締めてくれる美由里とミナ。

思わず抱き返すと幼女特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

くんかくんか。

ハッ、無意識の内に嗅いってしまった。

なんという幼女トラップ。

これを戦場に配置すれば4割の男は戦闘不能に陥るハズ！

残り6割はお姉さんのおっぱいで掌握可能かと思われます。

そんな事を考えていると、両頬に柔らかな感触が。

男なら誰しもが夢見る両頬同時キッスだ。

ちよっぴりほっぺを赤く染めて、2人はもじもじしながら言った。

「にへへ、ユーリのえっち♪」

「お兄ちゃんのヘンタイ♪」

辛抱たまらん。

2人を抱っこしながら、しばし幼女の匂いを堪能していた。

様子を見に来たシーナとエアリィさんにべしべし叩かれたのは言うまでもない。

齢15でマイホーム購入。

リレジーへの到着初日。

色々有ったけど取り敢えず今日は羽を休めて、明日から家を探しに行こうと思う。

そう伝えたらみんなも異論は無いようで、各自まったりと過ごす事に。

ミナと美由里は疲れてお昼寝、シーナとエアリィさんはお買い物に出掛けた。

僕はと言うと「商人ギルドへ顔見せしておいた方が明日楽出来るわよお」とのんびり指摘されて、ナギさんと一緒に商人ギルドへ向かう事にした。

僕はこの前着た、鳶が絡まる金の刺繍が特徴的な黒の上下に身を包んでいる。

断じて巫女服ではない。

ナギさんはいつもの赤いローブじゃなく、胸元にある白い蝶のワンポイントが特徴的な蒼いリネンのシャツに、同じく蒼で纏めたスカートを見事に着こなしている。

明らかに背伸びした格好の僕と、貴族の令嬢のようなナギさん。端から見たらどう見えるんだろうか。

ナギさんは「きつと初々しい若旦那と、年上の妻じゃないかしら」なんてほわほわ回答してくれた。

ナギさんが妻……でへへ。

おっと、思わずニヤけちゃった。

まあ今の状況も、角度を変えればデートに見える訳で。

綺麗で美人のナギさんの隣を歩く僕は、ちょっぴりドキドキしながら商人ギルドへと続く道を歩いていた。

……ハッ、ここはどこ？わたしはだあれ？

いや、後半は冗談だけだよ。

商人ギルドに入った僕は独特の雰囲気というかプレッシャーに圧されて頭が真っ白になってた。

よくテレビでやってる株取引の現場みたいな謎の焦燥感や緊張感に、すっかり呑み込まれていたんだ。

左を向いたら数人の商人が物資の搬入について調整中。

右を向いたら裕福そうな男が従者を引き連れて歓談中。

——いやいやっ、一見和やかっぽいけどなんか火花散ってるよ!？

商人にはどこも等しく戦場なんだろう。

そして僕はいつの間にかソファアに座ってて、横で柔らかな微笑みを浮かべているナギさんと如何にも百戦錬磨な狸ってイメージの商人さんが言外の闘争を繰り広げているのを、ぼーっと聴いていた。

「では此方で幾つか検討して置きますが、やはりこれだけの条件となると厳しいものがありますので」

「あらあら、商人さんがそんな弱気じゃダメよお？唯でさえ竜族の顧客が出来るかもって噂で貴方の評価は鰻登りなんだから。好機を逃さない強かさと計算力、それにお客に喜んでもらおうって心構えが無いと出世出来ないわあ」

「はっはっは、これはハッキリと申されますなあ」

「ええ、貴方の事は少し気に入ってるからちよっとでも手助け出来ればと思って」

「いやあ、貴女のような美人にそう言って頂けるとは、何やら勘違いしそうになります」

「ふふ、お世辞でも嬉しいわあ」

さっきから聴いてるだけで胃が痛い。

ナギさんは最初の内こそ、わざと何も知らない令嬢を装っていたんだけど、相手が舐めて掛かってくるなり煽て赚しや自分の魅力まで武器にして商人さんを圧倒。

なんとか自分のペースに持って行こうとする度に、ほんわりぽやぽやな天然空気に出鼻を挫かれている。

ありゃ竜じゃない、毒蛇かなんかだ。

美由里が宿屋でぼつりと漏らした、竜族で一番怖いって評価は間違っていないだろう。

所謂敵に回してはいけない人種だ。

そんな事を考えて胃の痛みを和らげている内に、どうやら会談は纏まったようだ。

幾つかの書類を携えて奥に引っ込む商人さんを見送ったら、一気に疲れが出た。

ぐったりしながら手を引かれて外に出てみれば、日も傾いてすっかり夕方という時分になっていた。

「……はあ」

「ふふ、お疲れ様あ」

「いやいや、僕は何もしてなかったし。ナギさんこそお疲れ様」

思わず溜め息が出た。

精神力は限りなく0に近い。

隣でクク、と喉を鳴らして笑うナギさんを見てるとちよっぴり癒された。

美人なのにかわいいってずるいよね。

そういえばナギさんは何で美由里と一緒に来たんだろう。

半ば無理矢理連れて来られたっぽいけど、事前に断ったりしなかったのかな？

それとも美由里が心配について来たとか。

聞いてみようかなって思ったら、ナギさんが先に口を開いた。

「それも有るけど、正解じゃないわぁ」

「へっ？」

「考えてる事、口から漏れてたわよ？」

なんというお約束な失敗。

照れくさくて頬を掻いていたら、ナギさんがまた喉を鳴らす。

「私がついて来た理由、知りたい？」

「も、勿論」

「ふふ、私ねえ、ミューリちゃんが物心ついた時からずっと『素敵なお兄さん』の事聴かされてたのよ」

「へっ？」

「聴いてる内に私もお兄さんの事が気になっちゃってえ、ちよっぴり逢ってみたいって思ったの」

「それはそれは……平凡でガツカリしました？」

「そんな事無いわよお。素敵で格好良くて優しい、理想の男性だったわぁ♪」

その言葉で一気に顔が熱くなる。
ナギさんみたいな美人さんに面と向かって素敵だの格好良いだの言われたら、誰だって胸がドキドキする。
あの商人さんよくデレデレしなかったな。
妙な所に感心しつつ、僕はナギさんから視線を逸らすので精一杯だった。

「みんなの後でもいいから、私の事もかわいがってくれと嬉しいわぁ」

「え、あ、それって」

「女性にそれを言わせちゃダメよ？」

「うぁ、あ、はい」

「ふふ、お兄さんかわいい♪」

こんな感じにからかわれつつ、ほんわかまったりしながら宿屋へ到着。

ちょっとした時間だったけど、ナギさんには絶対勝てないだろうなあって変な確信が持てた。

部屋に戻ると、ちびっこ2人がボディアタックを仕掛けてきた。

そのまま抱きかかえてベッドにダイブ。

2人はお昼寝して充電たっぷりだけど、僕は若干眠気が襲ってきた。

「ユーリ、疲れたなら寝てもいいよ？」

「うんうん、休んでいいよ？」

「にやにや」

「くすくす」

明らかに寝たらいたずらする気満々なちびっこ2人。

美由里はともかくミナまで一緒に悪巧みするなんて珍しい。

もう親友並みの仲良しっぷりだ。

微笑ましく感じながら、僕は2人を抱き寄せて身動きが取れないようにしつつ、うつ伏せに寝転んだ。

両腕の隙間から「ふみゅっ」とか「ひゃわっ」とかかわいい悲鳴が聞こえる。

左腕の上に顔だけ出したミナが幸せそうな目をしながら、器用に口を尖らせた。

「もう、ずるいよユーリ。こんな事されたら幸せで動けなくなっちゃうもん」

「そくだそくだ、お兄ちゃん横暴だあ。こんなにお兄ちゃんの匂いでいっぱいになったら、気持ちよすぎて動けないよお」

「それはいい事を聴いたなあ。今度から2人を大人しくさせる時はこうしよう」

「「やあん♪」」

眠気でちよつとバカになりつつ受け答える僕を、左右から抱き締めるちびっこ達。

やっぱり幼女はいいなあ。

そんな爛れた思考を最後に、僕の意識は夢の世界に吸い込まれていた。

で、どうしてこうなった。

翌朝、僕は全身の凝りと鈍い痛みを目を覚ました。

昨日半分寝ながら晩ご飯を食べた後、同じようにミナと美由里を抱き締めて寝たのはぼんやり覚えている。

普通に考えたらベッドにはうつ伏せの僕、左腕にミナ、右腕に美由里が寝ているハズだ。

けど現実違った。

僕達はそのままだからいい。

でも左足に体を絡めたシーナ、右足にしがみついたエアリイさんが追加されている。

いつの間に、って思ったけど百歩譲ってそれもいいだろう。

——だけどナギさん、あなたはダメです。

何がダメって、まず位置がおかしい。

うつ伏せに寝ていたハズなのに、ナギさんは僕の体の下にいる。

ちょうど頭が豊満な胸に挟まれる位置にあって、左右からぽよんぽよんな触感が幸せ過ぎる。

思わずむしゃぶりつきたくなったのは仕方ないよね、うん。

更におかしいのは、何故か下着姿な事だ。

薄いピンクのブラは面積が少なく、横から上から下からおっぱいが零れそうだ。

パジャマを通して伝わってくるナギさんの体温が気恥ずかしい。一番おかしいのは、

「あんっ、お兄さんの大きくなってる♪」

ナギさんが起きて僕を抱き締めてる事だ。

そして息子は朝から元気です。

みんなにしがみつかれて身動きの取れない僕と違って、ある程度自由になれるナギさん。

はい、僕間違はなく獲物です。

というか意外とむっちりしてる太腿で息子挟んじやらめえええ!?

「ちょ、な、ナギさんっ!?!」

「あらあ、あんまり声出したらみんな起きちゃうわよお?」

「くっ、ちよっ、どいて下さいっ」

「いっやっ♪お兄さんの切なそうな顔、かわいいわあ」

なんとかみんなが起き出す前にベッドから脱出する事に成功。パンツを洗う事になった理由は聴かないで欲しい。

うう、ナギさんは淫魔だ。

幼女2人エルフ1人淫魔2人。

なかなか濃いメンバーが集まったもんだ。

どこか遠い目をしながら、僕は冷水でパンツを洗い続けた。

「んっ、ゆるりのみるくのおい……」

「うわあっ、ミナ!?!」

ミナが寝ぼけ眼で襲来した。

起きて着替えてご飯を食べて。

特にやる事も無いのでみんな連れ立って商人ギルドへ。

これから住むならみんなも見て決めた方がいいだろうしね。

ギルドの入り口には昨日の商人さんが立っていた。

心なしか昨日よりやつれた？

ずっとナギさんが前に出て商人さんと言葉を交わし、候補の家まで先導してくれる。

もう後はぼーっとついて行くだけだ。

正直値段交渉とか解らないし、ナギさんに丸投げした方がいい気がする。

「お兄ちゃんの手あったかぁーい♪」

「あはは、美由里は元気いっぱいだなあ」

「ユーリ、どんな家なの？」

「僕もよく解らない。ナギさんにお任せ状態だからね」

「ミナ、そろそろ交代の時間よ。ユーリさんの左手ハァハァ」

「私はユーリ君の右手を……お、本当に温かいね」

一部カオスなのは仕様です。

シーナ、君は何を目指しているんだ。

方向性が全く解らないよ？

時間を決めて交代で手を繋ぐ。

ちびっこ達の小さな手もふにふにしてていいけど、シーナとエアリィさんの手もすべすべしてて手触りが抜群だ。

「お兄さん、着きましたよ」

「お？」

「「「「「おおー！」」「」「」」」」

思わずみんなで感嘆の声を上げる。

そこには豪邸が建っていた。

洋風建築の王道という雰囲気を持った華やかな門構え、玄関はダブルベッドでも楽々運べそうな大きさがある。

充分遊べる広さの庭は芝の管理も行き届いており、植えられた木々が優雅な空気を演出している。

走り出したミナと美由里に引き摺られ中に足を踏み入れると、天窓から差し込む光が白壁に当たり玄関と廊下を明るく照らしている。

部屋数も1階に4つ、2階に6つあり地下室まで完備だ。

1階には部屋が少ない代わりに大理石で出来た広い浴室と、10人が同時に食事出来るダイニングがある。

小市民である僕は物怖じしてしまったけど、他のみんなは歓声を上げてはしゃいでいる。

エアリイさんも耳をピクピクさせていてかわいかった。

「すごいな……」

「ふふ、その分値段も張っちゃったけど」

「幾らですか？」

「白金貨75枚よ、これでもだいぶ値切ったんだからあ。お兄さん、後で褒めてね♪」

にこやかに笑うナギさんの後ろで、疲れたように虚ろな笑みを浮か

べる商人さん。

合掌しておこう。

即金で支払い幾つかの書類にサインして、権利書を譲渡された。

これで名実ともにこの豪邸が僕のモノ……あ、なんか目眩してきた。ギルドカードに書類を翳して情報を写しておく。

大きな取引を終えた商人さんは疲労困憊といった表情で、しかし足取りは軽やかに帰って行った。

「でもこれだけの家で白金貨75枚とは随分と凄まじい交渉をしたようだね、ナギ君」

まだ興奮で耳をピクピクさせながら、エアリィさんが笑いかける。

確かに買い得な気がする。

っていうか僕が買える家とは思えない。

いや、即金で買ったけどさ。

家を買う、って行為自体にまだ実感が湧いてないんだと思う。

するとナギさんはクク、と喉を鳴らして答えた。

「かなり値切ったのは確かだけど、最初はここを管理する人の給金も込みで値段を提示されたのよお。庭師やメイドを雇う必要は無いでしょうしい、そこら辺も切り詰めたの」

「それじゃ、誰がここを管理するんだい？生活すれば埃も溜まるし庭の芝生も伸びてしまうよ？」

「そこは私達の旦那様の出番よお♪」

と、ナギさんは僕を見る。

……うえええつ、僕ううう！？

慌てふためく僕にナギさんはウインクしてみせる。

あ、かわいい。

「ねえお兄さん、土地や建物に付呪ってまだ試して無いでしょう？」

「え、ええ、え？出来るんですか？」

「勿論よお♪」

という訳で試した所、確かに土地や建物にも付呪は効果を示した。

庭は芝が綺麗に保たれ落ち葉や砂塵を自動的に掃除。

家の中は埃が集まり自動的にゴミ箱へ、汚れや臭いも分解されてお掃除要らず。

間違いなく全世界の主婦が殴り込みに来るレベルである。

「自分でやったけど、これはひどい」

思わず呟いちゃった。

こうして問題も解決したなと鼻歌混じりに思っていたら、部屋割り決めの段階で大論争が勃発。

誰が僕と相部屋になるかで喧嘩——まではいいかないけど、火花が散る展開に。

部屋は6つあるんだからバラバラでいいんじゃないやって僕の場合は早々に却下された。

「ユーリは私と寝るの。私はユーリのお嫁さんだもん、一緒に寝る

のは当然だよ。それにユーリは私の体の虜なの」

「私が召還しなかったらお兄ちゃんに会えなかったのよ？ 私がお兄ちゃんと寝る権利があるわ。ミナお義姉ちゃんがストライクなら私だって抱いてくれるハズだし」

「私はユーリさんの怪我を治した、言わば恩人。私が毎日ユーリさんの健康を把握する為に一緒に寝ます。それにユーリさんの巨根を受け入れるのは私の体だけで充分でしょう」

「それなら私もユーリ君の命を救った事になるね。エルフの掟に従うならユーリ君は私の夫だ、夫婦水入らずでいいんじゃないかい？ それにユーリ君は私を何度も視姦していたんだ、そろそろ貪らせてあげたい」

「あらあ、私だってお兄さんの事を愛してるわよお。昨日だって一緒にデートもしたし。それに私の体がお兄さんの子を孕みたいって言ってるのよお」

上から順にミナ、美由里、シーナ、エアリィさん、ナギさんだ。

っていうかみんな本音というか本能だだ漏れですよ！？

……いや、誰になるにしろ迫られたら多分抱いちゃうんだろうなあとは思う。

ああっ、ヘタレでチキンな癖に性欲は誰よりも強い自分が憎いつ。とはいえみんなが言い争うのを見てるのも居心地悪いし、妥協点を出してみる事にした。

「じゃあ部屋はバラバラだけど、僕の部屋に来るのは順番にしたら？」

「どういう事？」

かわいらしく、へにやりと首を傾げるミナ。
ヤバイ、抱きたい。

ごほんと咳払いをしてピンクな妄想を消し去り、説明を続ける。

「例えば月曜日はミナ、火曜日は美由里、水曜日はシーナ、木曜日はエアリィさん、金曜日はナギさん。土曜日は用事とかで一緒に寝られなかった人用の予備日において、日曜日は僕のお休み」
「でもそれだとお兄ちゃんと寝る順番で喧嘩にならない？」

「そこで毎週順番を入れ替えるんだ。さっきの例だと、月曜日のミナは次の週は金曜日に移動。代わりにナギさんが木曜日、エアリィさんが水曜日、シーナが火曜日、美由里が月曜日っていう風にしたらみんな順番に回ってくるよ」

「なるほど、お兄ちゃん頭良い！」

美由里がキラキラした目で見上げてくる。
ははは、お兄ちゃん頭は良いんだぞう。

「でも最初の順番はどうするの、お兄ちゃん？」
「そこはジャンケンか何かで決めてよ」

面倒くさくなって投げた。

僕の集中力なんてこんなもんだよ？

そして始まるジャンケン大会。

果たして勝つのは誰か！？

……身も蓋も無く考えると勝った順番が、多分僕がえっちする順番。その時用のプレゼントでも買いに行こ。

白熱する5人にバレないように、僕はそつと家を後にした。
見上げれば太陽が眩しく輝いている。

「……これからしばらくは黄色い太陽を拝む事になりそうだ」

合掌。

勿論僕に。

齡15でマイホーム購入。(後書き)

取り敢えずこれで一旦更新は止まりです。
次の更新は29か30日の予定です。

ちなみに家は買ったけど家具はまだ揃ってません、次話で買いに行きます。

やだなあ、自衛隊の訓練行きたくないなあ。

エアリイさんとデート。

「ん、もうそろそろ時間かあ」

読んでいた本をぱたむ、と閉じて立ち上がり体を軽く伸ばす。
え、何読んでたかって？

タイトルは『もじをならおう』と『かずってな〜に？』だ。

明らかに子供向けの教本ってか絵本だけど今の僕にはコレがちょうど良いレベル。

僕が文字を読めないと知った美由里が貸してくれたんだ。

や、悔しくは無いし久しぶりに美由里と『妹がセンセイ！？わくわく個人授業』とか遊べたからいいんだけどね。

……内容は至って健全ですよ？

「っと、早く準備しなきゃ」

最早デフォルトになりつつある黒の上下に着替える。

麻袋を漁ったら大量に出てきたんだ。

鳶の刺繍や襟元のデザインとか、細部がちよつとずつ違うのがポイント。

今日は鳶が互いに絡まりながら伸びていく模様のでいいかな。

新調した白塗りの衣類タンスの中から目的の1着取り出す。

家具は昨日の午後に取り揃えた。

みんなでもいいものを選んで買ったせいで懷は寂しくなっちゃったけ

どね。

——今日はエアリイさんとデートだね。

昨日のじゃんけん大会、見事初戦を制し一番乗りを飾ったのがエアリイさんだ。

今日の昼12時から明日の朝11時まで、僕の身柄はエアリイさんの預かり。

何をしようか尋ねたら、デートがしてみたいって言われた。

散々デートの良さについてミナから聞かされたらしく、恋する乙女モードに入ってた。

っと、待たせちゃ悪いよね。

手早く着替えて広間に降りると、エアリイさんが落ち着かなそうに耳をピクピクさせていた。

——うわあ……まるで絵画のお姫様みたいだ。

サラサラと揺れる薄い金髪をポニーテールにしている、いつもの落ち着いた雰囲気とは違った勝ち気っぽいというか活動的な感じがまたイイ。

淡い緑のノースリーブのブラウスと白のフレアスカートで女性らしさを演出しつつも、媚びないかわいさがエアリイさんの素の美しさを存分に引き立てている。

でも浮き足立ってるっていうかちよつと不安そうな姿が、庇護欲をそそって心にキュンキュンくる。

様子を窺ってみると、エアリイさんはまだ僕に気付いてないみたい。

——ちょっといたずらしてみよっかな？

足音を消して後ろから忍び寄る。

バレないように魔法で認識阻害しておく。

むっふっふ、驚いてくれるかな？

そっつと背後に立って認識阻害を打ち消し肩を優しくむにと触ってみた。

「エアリィさあん？」

「うなあっ!？」

わ、びくんって飛び上がっちゃったよ。

いたずら成功、とニンマリしながら体を離すとエアリィさんがバツと振り返る。

思いつきり驚いてたけど、やったのが僕だって解ると呆れたように息を吐いた。

「ユーリ君、余り脅かさないでくれ。ただでさえユーリ君と……その、初デートで緊張しているんだ、心臓が破裂してしまうよ?」

「あはは、ゴメンなさい。エアリィさんガチガチだったから、ちょっと緊張をほぐしてあげようかなって思いました。似合ってますよ、その服。とっても素敵です」

気恥ずかしさをごまかしながら、先制パンチを放ってみる。
前の僕なら黙ってるところだけど、今の僕はミナと付き合ってる分ち
よっぴりオトナ。

だからこういう時は僕がリードするのが当然だね。

——うん、我ながら発想というか思考がキモイ。

前の僕なら間違いなく「リア充爆発しろ」って言うなあ。

まずミナっていう小さな女の子に手を出した時点で鬼畜なのに、こ
れからエアリイさんとデートするのがみんな公認って最早ギャルゲ
ーの主人公状態じゃないか。

そんな風に早くも思考を走らせる僕。

やっぱりなんだかんだで僕も緊張しているみたいだ。

特有のパニックも出た所で意識を戻すと、エアリイさんは俯いて顔
を真っ赤にしていた。

昨日解ったんだけど、エアリイさんは相当な照れ屋さんだ。

歯の浮くようなセリフには反応しないけどストレートな言葉には弱
いみたい。

「かわいいですよ、まるでお姫様みたい」

「うう……は、恥ずかしいから余り見ないでくれないか？」

「無理です、こんなに綺麗でかわいいエアリイさんを放っておいた
らバチが当たっちゃいますよ」

「う、にう……」

きゃー、にうですってよ奥さん！
かわいいっ、たまらんっ！

もじもじしながら上目でチラチラと僕を見る姿はもう小動物そのものの。

――よし、今度四次元麻袋を漁ってネコミミ帽子を探そう。そしてエアリィさんに被せる事に決定。

色々ダメな決心を固めた所で、右手を前に差し出した。
きよんとするエアリィさんに、満面の笑みを向ける。

「さ、一緒にデート行きましょうか。お手をどうぞ、お姫様」

長く綺麗な耳の先まで真っ赤にして俯きながら、それでもおずおずと僕に手を伸ばす。

重なった掌から伝わる体温がこそばゆい。

優しく手を引きながら、僕は街へと繰り出した。

太陽は今日も眩しい。

今は乾期の真っ只中で、地球で言う6月近くに相当するらしい。

ちよっぴり開放的な気分を味わいつつ、隣を歩くエアリィさんに微笑んだ。

「まずは買い物でもしましょうか」

あっちへふらふら、こっちへふらふら。

立ち寄った露天商を冷やかしながら買い食いを楽しみ、たまにある怪しげなマジックアイテムを眺めては隣の屋台から漂う匂いにお腹を鳴らす。

そんな気ままなデートをしていた。

お互いに緊張も解け、手を繋ぎながら商店街を練り歩く。

「あ、エアリィさん。なんか美味しそうですよ、焼き鳥みたいなの」
「それはクック鳥の胸肉を果物や香草で臭いを消し下味を付けたものを、木炭で炙り塩を振って味付けしたものだよ。大陸北部では一般的に食べられている料理だね」

「博識ですね、流石エアリィさん。おじさん、それ6本下さい！」

意外というか、エアリィさんはとってもグルメで美味しいものを探して旅をしていた時期があったんだって。

色々食べ歩いたから料理についての知識は勿論、作る腕前もなかなかすごい。

宮廷料理人にもなれるんじゃないかな？

おじさんから焼き鳥を受け取りエアリィさんと半分こ。

かぶりつくと肉汁と脂がジュワーって口の中に広がって、程良い塩加減と共に香草の香りが喉から鼻に抜ける。

美味しいです、シェフを呼べ！

なんちゃって。

そんな風にまったりしていると、ミナと入ったアクセサリーショップを見つけた。

——エアリィさんにも、何か素敵な装飾品を選んであげたいな……
よしっ。

「ん、どうしたんだいユーリ君？」

「ちょっと行きたいお店があるんです。良ければ行ってみませんか？」

「ふむ……なにやら面白そうだね。じゃあユーリ君、先導を頼むよ」

手を引いて扉を潜ると、この前の店員さんが出迎えてくれた。

連れている女の子が違うから変に思われないか心配だったりするけど、まあそこは割り切っていこう。

数々の珍妙な品物に目を輝かせるエアリィさんは、僕の手を握り締めてぶんぶん振りたくる。

自由に見て回っていいですよ、って告げたらすごい勢いで左の棚へ向かって行った。

なるほど、あそこは猫コーナーか。

取り敢えず装飾品の棚を覗いていると、窓際に飾られているブローチに目が止まった。

向日葵を象った虹水晶のブローチ。

主張し過ぎず華やかに咲く姿が、まるでエアリィさんみたいだ。

「花言葉は『憧れ』 宝石言葉は『尊敬』です。これを贈るなら『私は貴方を慕い共に歩んで行きます』といった意味になります」

いつの間にか隣に控えていた店員さんが説明をしてくれる。

憧れと尊敬か……うん、なんとなくぴったりな気がする。

「これを下さい」

「お買い上げありがとうございます」

銀貨20枚を支払いブローチを受け取る。

贈る事を考えたらドキドキしてきた。

ちよつと落ち着かない様子で店内を探してみると、先程の猫コーナーにかじりついているエアリィさんを発見。

目をキラキラさせながらにゃーにゃー言ってる姿はもうクリティカルですよ。

お気に入り猫のぬいぐるみらしく、もふもふしては目を瞑ってトリップしてる。

異世界トリップした先でトリップした人を見るなんて不思議な感じだ。

「ご機嫌ですね、エアリィさん」

「にゃ？ ああ、ユーリ君。見てくれ、このかわいい猫達を。なんと
いうか、ここはもう楽園だよ」

にゃ？ って、にゃ？ って！

僕はもう猫っぽいエアリィさんに楽園を感じますよ！

ぬいぐるみの値札を見れば銀貨1枚。

全体的にこの店は高級な物を取り扱ってるみたいだ。

まあ、ギルドの儲けがある僕には関係無い値段だけどね！

あ、今のフラグっぽいからブレイクしておかないと。

――べ、別に僕がお金持ちだって自慢したい訳じゃないんだから！
勘違いしないでよっ。

ふう、これでよしっ。

振り返ると既にステンバイしていた店員さんと目が合う。

「このぬいぐるみも買います」

「はい、ありがとうございます」

チャリーン、と銀貨1枚を支払う。

向き直りエアリィさんに微笑んでみせた。

「僕からエアリィさんにプレゼントです。ぬいぐるみ、大事にして
あげて下さいね」

「い、いいのかい？……大切にするよ」

むきゅっとぬいぐるみを抱き締め、上目遣いに微笑むエアリィさん。
こうかはばつぐんだ！

僕の精神力と鼻の粘膜に大ダメージを与えて、エアリィさんはるん
るん気分で店を後にした。

鼻血が出そうになるのを堪えながら、慌てて後を追う。

辺りに音符マークを撒き散らしながら歩く姿に満足しつつ、僕達は
帰路に着いた。

両手で幸せそうにぬいぐるみを抱き締めてたから、手を繋げなかったのは残念だったけどね。

そうして帰ってきた僕達は一旦部屋で普段着に着替えて、晩御飯の準備に取り掛かる。

いつもの白Yシャツと黒スラックスに身を包んで、如何にも学生アルバイト臭全開な僕はせつせと皿を出したり料理を運んだり。

厨房ではナギさんとエアリィさん、シーナが忙しそうに料理を作っている。

基本的に料理をあんまりしない僕、椅子を使わないと流し台に届かないミナと美由里は戦力外通告を受けたので、3人で簡単な準備をしていた。

それもすぐに終わり、やる事も無くぼーっとしてたら膝の上に2人が乗ってきた。

左膝にミナ、右膝に美由里。

それぞれ占領区域らしい。

紫銀の髪を撫でると、くすぐったそうに頭を震わせて抱き付いてくる。

長い黒髪を梳くと、甘えた声を上げながら体を密着させてくる。

なんか2人も猫っぽいな。

「あ、そうだ」

良い事を思い付いた僕は2人を降ろして自室へ向かい、麻袋の中に手を突っ込んだ。

がさがそがさがそ。

お、発見。

ってか何でも出てくるなあ、この麻袋。

取り敢えず目的のアイテムを手に入れてダイニングへ戻る。

ミナはきよんとしたてたけど、美由里は僕が持っている物に気付いてニヤニヤしていた。

「よし、今から猫ごっこでもしようか」

「猫ごっこ？」

「そ、猫ごっこ。今からにゃーしか喋っちゃダメだよ？」

首をへにゃりと傾げるミナの頭に灰色のネコミミを装着。

僕と美由里は黒のネコミミだ。

よく解っていないミナに美由里が説明する。

元々は美由里とのごっこ遊びの中で生まれたもので、ネコミミ付けたにゃーにゃー言うだけなんだけど、これが案外楽しい。

会話っぽくする為に相手の表情やにゃーにゃーのアクセントなんかも加味して喋ると、本当に猫語を話してる気分になるんだ。

「ニヤニヤン」

「にゃ、にゃ？」

「にゃーにゃー」

「にゃっ、にゃにゃっ」

「にゃーにゃ」

「フニヤア」

会話だけ聞くとなかなかカオスだ。

首を傾げたり、優しく猫ぱんちしたり、ほっぺをむにむにしたり。

「にゃっ♪」

「にゃーにゃー♪」

左右から丸めた手でほっぺをむにゅつとされる。

両手を上げてちよつと威嚇するように体を前に倒してみる。

「フシヤアア！」

「にゃうん」

「ふにゃっ」

にゃーにゃー言いながらちよつぱり後ずさるミナと美由里。

すぐさま抱き寄せておでこをぺしぺし丸めた手で叩くと、ほっぺを擦り寄せてぐにぐに押してくる。

なんだかんだでみんなノリノリだ。

そんな風に遊んでいると、背後からのんびりした声が掛かった。

「あらあら、みんな楽しそうねえ。ご飯が出来たわよ？」

「「「はあい」」」

「ほら、エアリィちゃんも起きて」

振り返るとエアリィさんが鼻血を垂らして固まっていた。

どうやら呼びに来た時に僕達の猫ごっこを見て色々と脳内でリミットブレイクしたらしい。
幸せそうな顔で気絶したエアリイさんが意識を取り戻すまで、たっぷり10分は掛かった。

この後シーナから猫ごっこ禁止令が発布されたのは言うまでもない。

楽しい夕食を取り後片付けも終え、まったりとした時間が流れる。
僕は自室にエアリイさん呼び出して、ちょっとした雑談を交えながらブローチを渡すタイミングを伺っていた。

——心臓がドキドキし過ぎて痛い！

早鐘どころか8ビートを刻む心臓のせいで碌に自分の考えも纏まらない。

隣に座るエアリイさんは少し気恥ずかしいのか、頻りに脚を組み替えている。

その様子も魅惑的で、鼓動を早くする要因になっていた。

僕のドキドキが微かに聞こえているのか、エアリイさんも段々口数が少なくなってくる。

次第に会話も途切れがちになり、互いにぼそぼそと喋り合う。

その会話さえ無くなって、聞こえるのは自分の心臓の音と隣に座るエアリイさんの吐息だけ。

——もうタイミングを測る余裕も無いや。勢いのまま渡そう！

不意に立ち上がった僕に驚き体をびくんとさせるエアリィさん。
その正面に跪き、エメラルドのように輝く瞳を見つめた。

「エアリィさん、僕は貴女が好きです」

「……うん？」

突然の告白に脳が追いついていないのか、首を傾げる。

言葉の意味が理解出来るに連れ、段々と白い肌に赤みが差していく。
釣られるように、僕もほっぺが熱くなってきた。

僕の行動と言葉を完全に理解したエアリィさんは、飛び上がるくらい驚いた。

「え、な、ま、何を」

「何度でも言います。エアリィさん、僕は貴女が好きです」

「……~~~~っ!？」

「僕にとって、エアリィさんは色んな意味で特別な存在でした。命の恩人で、姉のような人で、尊敬出来る先生で……。僕がこの世界の人じゃないって言っても信じてくれました。僕がこの世界のものじゃない魔法を使っても怖がらずに接してくれました。エアリィさんが僕を支えてくれたように、僕もエアリィさんを支えられる人物になりたい。エルフの掟なんか関係ありません、エアリィさんの隣を歩くのは僕です、他の誰にもエアリィさんを渡したくなんかありません!……僕の事を受け入れてくれるなら、このブローチを受け取ってもらえませんか？」

懷からブローチを取り出して右手の掌に乗せる。

贈る言葉は『貴女と共に、貴女と永久に』だ。

頭を下げて右手を掲げる。

果たしてエアリィさんは受け取ってくれるだろうか。

ミナがいるのにエアリィさんも好き、だなんて虫の良い事を言う僕に幻滅してないだろうか。

答えはすぐに来た。

右手をそっと包み込む感覚。

顔を上げると、エアリィさんに抱きすくめられた。

「私、エアリィ・ピアナは生涯をたった1人に捧げる事を誓う。彼の者の名はユーリ。彼を私の伴侶とする事を偉大なる祖神に誓おう。……ユーリ君、私は君を伴侶にすると誓った。もう逃げられないよ？」

「……本当に僕で良かったんですか？」

「ああ、君が良いんだ」

「ミナやシーナ、ナギさんや美由里にも気持ちが行っちゃう浮気者ですよ？」

「構わない。たまに帰ってきた時に、君が安らげる場所になれば、それで良い」

「僕、すごくえっちですよ？」

「君が望むままに、私の身体を貪ってくれていいよ。私の全てを、君にあげたい」

「……僕は貴女を置いて、先に逝ってしまいますよ」

「最期の瞬間まで側に居るよ。君の最期を看取るのは妻である私の役目だ」

だから、と体をぎゅっと抱き締められる。

「私を、君の妻にして欲しい」

「……喜んで」

深く、口付けを交わす。

舌を絡めて、唾液を交えて。

お互いの魂まで溶け合わせ、より深く繋がり合えるように。

背中に回した手をそっと前に這わせると、小さく体をぴくんと震わせる。

唇を重ねたまま、服の裾をたくし上げる。

白いブラに包まれた魅惑の双丘が、ぷるんと姿を現した。

優しく触れる度にぴくんぴくんと体が小さく跳ねる。

先端を軽く摘むと次第に堅くなり、ブラを押し上げていく。

唇を離すと荒い息がエアリィさんから漏れ、僕を潤んだ瞳で見上げる。

抱きかかえてベッドに横たえようと、エアリィさんは恥ずかしそうに頬を赤く染めながら、自分で胸をはだけた。

ツンと上を向いたピンク色の乳首がなんとも悩ましげに映る。

「ユーリ君……私の初めてを、全部もらってくれないかな……？」

返事をするのももどかしく感じ、僕はエアリィさんにのしかかった。

「……朝か」

気だるい体に鞭を入れて起き上がる。

お腹やらシーツやら、べたべたのぬるぬるでガビガビだ。
後でアクアリングに放り込んで置かなくちゃ。

隣には安らかな寝息を立てる裸のエアリイさんがいる。

あの子の事は……まあ、恥ずかしいから色々とナイショだ。
続きはウェブでっ。

というか知らない間に回復魔法でも発動してたりするのかな？
幾ら若いっていつても絶倫過ぎる。

異世界補正か無意識の防衛策か。

ま、まあ、ミナやエアリイさんも悦んでくれてるみたいだしいいか。
と、1人でどうでもいい事を考えているとエアリイさんがもぞもぞ
動き出した。

「う……ん、ユーリ君……」

「おはようございます、エアリイさん」

眠そうな顔で僕を見上げると、とろ顔になって僕の手を取り自分の
胸に押し付けた。

「ふあっ……♪」

「って、朝からなにをっ!？」

「ふふ、君の体温が恋しくてね。……寝てる間に溢れた分のえっちなミルク、また注いでくれないかい？」

「そ、それは……」

「は・や・く、旦那様♪」

ぷちん、と理性の糸が切れた。

結局ベッドから出たのは太陽が登り切ってからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486x/>

起きたら異世界でした。

2011年11月30日01時43分発行